

異世界にタワマンを！
 奴隷少年の下剋上な
 国づくり ～宇宙最強
 娘と純真少年の奇想天
 外な挑戦～

月城 友麻

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

奴隷で過酷な労働を強いられていた少年は、ある日、天から降りてきた自称『宇宙最強』の青い髪の少女に助けられ、奴隷から解放されることとなった。

喜ぶ少年は、社会の在り方に疑問を持ち、奴隷や貧困のない『自由の国』を作ろうと決心する。少年は不思議な力を持つ少女に助力を願ったが、少女は国づくりを手伝う代わりに、「失敗したら世界そのものを消去する」という条件を突きつけた。

少年は悩みながらも理想郷づくりに全てをかける決断をする――。

襲われる王女を助け、王宮で大暴れする少女……。彼女は圧倒的すぎる戦闘力は持つものの、雑なのが玉にきず。少年はほんろうされながらも、理想を説いて『自由の国』創

りの仲間を増やしていく。

絶世の美女である王女、敵ついウロコに覆われた巨大なドラゴンを引き連れ、国づくりの参考にしたのは日本だった。

渋谷のスクランブル交差点に降り立った一行、果たして国づくりは上手くいくのか？
奇想天外なファンタジーが、読む者を世界の深淵へと引き込んでいく問題作。

目次

1 1 1.	ケーキだよ、ケーキ!	62	2 8.	電子決済	137
1 1 0.	首輪からの自由	56	2 7.	渋谷スクランブル	132
1 9.	アヒルピョコピョコ	51	2 6.	国一番のウイスキー	127
1 8.	勝負! 勝負!	46	2 5.	静謐な神殿	121
1 7.	死んでいた騎士	41	2 4.	レストインピース	115
1 6.	全員生き埋め!?	36	2 3.	王都解放戦線	110
1 5.	大地を穿つ大穴	31	2 2.	欲望の生き物	105
1 4.	圧倒的な物理	25	2 1.	十六歳の旅立ち	100
1 3.	おぞましい漆黒の球	19	1 6.	金髪のドラゴン	95
1 2.	襲われる王女	1	1 5.	ドラゴン大暴れ	89
1 1.	神秘をまとう少女		1 4.	騎士こん棒	84
			1 3.	ヘッドハント	79
			1 2.	クリーム王子	73

3 5.	チートな風力発電	209	3 1 4.	夢の強さ	261
3 4.	最初はタワマン	203	3 1 3.	少年の外交	255
3 3.	都市計画	197	249		
3 2.	クモスケの逆襲	192	3 1 2.	ITエンジニア採用面接	
3 1.	宇宙サイズの蜘蛛	186	244		
2 1 6.	スタバで朝食を	180	3 1 1.	アットホームな職場です	
2 1 5.	救世の短剣	174	3 1 0.	シャトーブリアン	238
2 1 4.	幸せの記憶	168	233		
2 1 3.	殲滅のアヒル	163	3 9.	ヒレステーキ	280g
2 1 2.	戦略爆撃機B29	158	227		
2 1 1.	ドラゴン遊覧飛行	152	3 8.	MacBook Pro	
2 1 0.	宇宙の根源	147	3 7.	動かせる内臓、肺	221
2 9.	即死する少女	142	3 6.	寿司の洗礼	215

4 8.	暴力の発露	325
4 7.	パパの置き土産	320
4 6.	魂の故郷	315
4 5.	託されたカギ	310
4 4.	制圧	305
4 3.	原理主義者の暴走	300
4 2.	告げられた真名	296
4 1.	建国宣言	292
3 1 9.	アレグリス始動	287
3 1 8.	スタッフ一号	282
3 1 7.	新人絶好調	277
3 1 6.	壮大な宇宙の神秘	272
3 1 5.	海王星の衝撃	266

4 9.	暴走する殺意	330
4 1 0.	バージヨンアップ女子	335
4 1 1.	全宇宙の輝き	340
4 1 2.	美しき構造体	345
4 1 3.	限りなくにぎやかな未来	350
エピローグ		358

1—1. 神秘をまとう少女

「うひゃあ！ な、何これ……」

いきなり渋谷のスクランブル交差点に転送された異世界の少年レオは、目の前に展開される煌びやかな巨大スクリーンの映像に圧倒され、四方八方から押し寄せる群衆にほんろう翻弄された。

「これが……日本？」

異世界の王女は美しい金髪をゆらしながらレオの手を握り締め、圧倒されながらつぶやく。

やがて信号が赤になって人がはけていき、車がパツパー！ とクラクションを鳴らす。

「はいはい、危ないよ！」

青い髪の少女は二人を引っ張って歩道に上げた。

鉄橋の上を轟音を立てながら山手線が走り、続いて逆方向から成田エクスプレスが高速で通過していく。

「うわあー！」

レオは目を真ん丸にして後ずさりする。

「ここが日本、レオの理想とする貧困のない国だよ」

青い髪の少女はニヤツと笑って言った。

「これが……日本……」

レオは唾然^{あぜん}として渋谷の雑踏の中で立ち尽くす。

物心ついた時から奴隷として朝から晩までこき使われ、まともな食事も与えられず苦しんできた少年は、想像を絶する光景に言葉を失っていた。



それは少し前、午前中の事だった――。

「はい、どうぞ」

十二歳の少年レオは山菜採りの帰り、道端の孤児に野イチゴを手渡した。

孤児は何も言わずに野イチゴをひったくり、一気にほお張ると軽く頭を下げる。

道の脇のさびれた小さな祠^{ほじゅう}には身寄りのない子供たちが住み着き、雨露^{あめつゆ}をしのいでいるのだ。

レオは彼らの身を案じつつも、自分も奴隷として過酷な肉体労働の日々を送っていることにウンザリし、大きくため息をついた。

「お前！ 何サボってんだよ！」

レオはいきなり後ろから首輪を引つ張られる。

オエツつとえすぎながら、首輪を押しえ振り返ると、ボロをまとったアルとは対照的に煌びやかな衣装の小太りの若い男が、二人の手下を引き連れて立っていた。

彼はジュールダン。アルの所有者で、大きな商家の坊ちゃんだった。

「こ、これは、ご主人様、サボってるのではありません、ご命令の山菜摘みの帰りです」
ジュールダンはそう言うレオの身体をジロジロと見回す。

「お前！ 何だこれは！」

レオの腰の短剣を引き抜くと、品定めをする。それは柄つかの所に綺麗な赤い石がはめ込まれた立派な短剣だった。

「それは父の形見の短剣です。返してください！」

レオは取り返そうとするが、手下たちが身体を押しとどめ、手が届かない。

「形見？ 盗んだんじゃないのか？ 奴隷が持つには贅沢すぎる」

そう言うと、ジュールダンはビュンビュンと短剣を振り回した。

「返してください！」

レオが手下を振り切りながらジュールダンに迫ると、ジュールダンは、「おつといけない！」

そう叫んで、短剣を後ろに放り投げた。

えっ!?

短剣は青空をバツクに大きな弧を描き、後ろの池にボチャン！ と音を立てて消えていった。

ああっ！

呆然とするレオ。ずっと大切にしてきた父の形見、それを捨てられてしまったのだ。

「お前が手を出してくるから危ないと思って手を離れたんだぞ！ お前も見ただろ？」

ジュールダンは手下たちに聞く。

「その通りです！」「コイツのせいです！」

手下たちはいやらしい笑みを見せながら言う。

レオの奥底でガチツと何かのスイツチが入った。

短剣は亡きパパとの絆、それはレオにとって決して失ってはならない心のよりどころだった。それを捨てるものは誰だろうと許せない。

レオは体の奥底から湧き出す激しい怒りで我を忘れ、ジュールダンに殴りかかった。

ぐあああ!!

痩せた躯体からは想像もつかない素早さでジュールダンにせまり、右パンチを繰り出すその刹那、レオの首輪がギユツと締まる、

ぐつ……、ぐおつ……。

レオはゴロゴロと地面に転がり、もがき苦しむ。

奴隷に付けられた魔法の首輪は、主人に危害を与えようとすると自動的に締まるようにできていたのだ。

それを見たジュールダンは、

「奴隷のくせに主人にたて突くとはふてえ野郎だ!」

そう叫びながら、苦しむレオに何度もケリを入れた。

手下たちも、

「ふてえ野郎だ!」「ふてえ野郎だ!」

と、真似しながらレオを蹴り、顔を踏んだ。

なんとという理不尽、しかし、奴隷のレオにはどうにもできなかつた。

「いいか、奴隷は人間じゃない。よく覚えとけ!」

ひとしきり暴行を加えると、ジュールダンはそう言つて、笑いながら街の方へと歩き出す。

「覚えとけ！」「覚えとけ！」

手下たちも笑つて復唱した。

レオは血の味がするくちびるをキュツとかみしめ、ギユツと目をつぶる。頬にはとめどなく涙が伝つた。

くううう……。

一体なぜ、こんな仕打ちを受けねばならないのか？ 生まれが不運だっただけで奴隷として売られ、毎日過酷な労働と理不尽な扱い。レオは全く納得がいかなかった。

なぜみんなが笑顔で暮らせないのか……。いつかこの理不尽を変えてやる。

レオは奥歯をギリツツと鳴らし、心に誓つたのだつた。

◇

レオはよろよろと立ち上がつて池のほとりまで歩き、しばらく呆然として池を見ていた。

短剣はこの世に一つしかない。パパとの絆、命の次に大切な物だ。潜つてでも探すしかない。

レオは大きく息をつき、服を脱ごうとした。

その時だつた。

いきなり青空がかき曇り、暗くなつたかと思うと、鮮烈な閃光が空いっぱいに入った。

え……？

いきなりの異様な事態にレオは怪訝そうな顔で空を見上げる。

直後、激しい衝撃波を伴いながら流れ星が目の前の池に突っ込んできた。

地面を揺らす轟音と共に、百メートルはあろうかという巨大な水柱が上がり、激しい水しぶきがレオを襲う。

うわああああ！

驚き、腰を抜かすレオ。

一体何が起こったのか混乱しているレオの目の前で、青い髪をした少女が水中からピヨンと飛びあがる。そして、水面を軽やかにトントントーンと駆けてきた。

少女は波紋を点々と残しながら、楽しそうに短剣が落ちた辺りまでやってくると、ドボンと潜った。

レオは唾然あぜんとしながら、ブクブクと湧き上がってくる泡を眺める。

しばらくすると少女はゆっくりと浮かんできて、

「少年！ 君が落としたのは金の短剣？ それとも、鉄の短剣？」

そう言いながらうれしそうな顔で、金色に光り輝く短剣と、レオの短剣を見せた。

レオは驚き、とまどう。

少女は水から上がってきたのに濡れた様子もなく、短く青い髪を風に揺らしている。

透き通る白い肌に整った目鼻立ち、そして美しく澄んだ水色の瞳をしていた。

「どっちっ？」

首をかしげ、少しおどけた感じで楽しそうに聞いてくる。

少女は胸元の開いたシルバーのホルターネックのトップスに黒のショートパンツ、マントのような前が開いたスカートという、この辺では見ない服を着ている。

レオは意を決し、答える。

「落としたのは鉄のです。でも……金のも欲しいです……」

「きやははは！ 正直だねっ。いいよ、両方あげる」

少女は屈託のない笑顔でそう言うと、また水面をトントンと駆けてレオの前にやってきて、

「はい、どうぞぞー！」

と、首を傾げながら二本の剣をレオに差し出す。

「ほ、本当にいいんですか……？」

レオは少し伸ばした手を止め、少女を見て聞いた。

「ふふっ、この短剣……、君にはちよつと縁を感じるんだよね。どうぞぞ」

少女はうれしそうに言う。

「ありがとうございます！ これで奴隷を抜け出せるぞ！」

レオは剣を受け取ると、ずっしりと重い黄金色に輝く剣をじっくりと眺め、
「くふう……、やったあ！」

と、こぶしを握ってガッツポーズを見せた。

少女は優しくうなずきながらその姿を眺める。

そして、恍惚とした表情のレオに聞いた。

「奴隷抜けたらどうするの？」

「どうしようかな……。 奴隷や貧困のない世界でゆったり暮らしたいなあ……」

レオは青空にぽっかりと浮かぶ白い雲を眺めながら言った。

「うーん、 奴隷も貧困もないところ？」

渋い顔をする少女。

「きつとどこかにある気がするんです」

「残念だけど……。 この星には無いよ」

「ええ——……」

「権力者は格差大好きなんだよ」

そういつて少女は肩をすくめた。

レオはしばらく考え込み、そして、振り返る。視線の先には寂れた祠、そして飢えた
浮浪児たち。

レオは目を閉じ大きく息をつく。

そしてうなずくと少女を見て、

「じゃあ……、作ります……」

と言つて、こぶしを力強く握つて見せた。

「え？」

少女はポカンとした表情を浮かべる。

「なければ僕が作ります！」

レオはしっかりとした目をして少女を見据えた。少女は最初困惑した様子を見せたが、ニコツと笑うと、

「いいね！ それ、最高！ きやははは！」

と、嬉しそうに笑つた。

「どこか、人の住んでいない所に新たな国を作ります！」

「いいね！ いいね！」

少女はノリノリだった。

「手伝ってもらえませんか？」

レオは少女にお願いする。

少女は動きをピタツと止め……、水色の瞳をキラツと光らせ、鋭い視線でレオを見た。

「本気……?」

低い声で聞く。風がそよぎ、少女の青い髪がふわつと泳いだ。

「もちろん!」

レオは曇りない眼で少女を見た。

すると、少女は両手で少年の頬を包み、そつと額をレオの額に当てる。

直後、レオは青と白の世界に浮いていた。

「えっ!?!」

下半分は真つ青、上半分は真つ白、青と白しかない世界……。

でも、下を見て気がついたが、それはただの青の地面ではなさそうだった。

レオはかがんでそつと触れてみる……。波紋がフワ〜つと広がっていく。

それは水だった。どこまでも透明な水が、どこまでも深い深さで青に見え、静かに鏡

面のように世界に広がり、水平線を作っていたのだった。

とんでもない清浄な世界にレオは思わず息をのむ。

見ると、隣で少女も浮いている。

「(ハハ)は……、(ヒハ)〜」

レオが恐る恐る聞くと、

「(ハハ)は僕の中だよ」

そう言つてうれしそうに少女は答えた。

「えつ……？」

レオはどういうことか全くわからなかつた。

少女はクルクルと楽しそうに舞いながらレオの前に来ると、

「僕はシアン、深淵より来た根源なる威力……。いいよ、手伝つてあげる」

そう言つてにこやかに笑つた。

「あ、ありがとう！」

レオはニコツと笑う。

「ただ……」

シアンは急にシリアスな表情になると、レオをにらんで言つた。

「深淵の力を使う以上中途半端は許されない。途中で投げ出すようなことがあつたら

……」

「あつたら？」

「殺すよ……」

シアンは燃えるような紅蓮の瞳を輝かせ、射抜くようにレオを見た。それは水色の時とは桁違いの迫力を持つてレオの心の奥底まで貫いた。

「え……？」

「君だけじゃない、この星もろとも全てこの世から消し去るよ?」

シアンはニヤリと笑みを浮かべた。

レオは一瞬言葉を失い、口をパクパクとさせる。

ただ、シアンの瞳の輝きには純粹で鮮烈な力は感じるものの、悪意はみじんも含まれていなかった。

レオは大きく息をつくと言った。

「この星って……、この大地も街もみんなも全部……ですか?」

「そう、一切合切全部この世から消えるよ。それでもいい?」

レオは多くの人命を背負う重大な責任に一瞬^け気^お圧^おされた。

「今まで……、そういうことはあつたんですか?」

「見てごらん」

そう言うのと、シアンは両手のひらを上に向け、地球儀のような青い惑星を浮かび上げさせた。

「これがさつき消した星だよ……」

すると、惑星の大きな海の真ん中に鮮烈な光の柱が立ち上った。

「えっ!?!」

レオが驚いていると、光の柱のふもとが真っ赤に光を放ちながら海をどんどん侵食し

ていく。

やがて浸食された部分が、腐った果物のように焦げ跡のような色になり、落ち込み始める。浸食はどんどんと惑星を蝕み続け、海をあらかた覆いつくした時だった、惑星は全体に真紅のヒビがつきつきと走り、ボロボロと崩壊を始めた。

「ああっ！」

レオが叫び声をあげた直後、惑星は全体がボロボロと粉々になって中心部に吸い込まれていき、やがてすべて消えていった。きつと何億人もの命が失われたに違いない。

呆然とするレオ。

「なんで……、なんでこんなことするの？」

レオは涙目になって聞いた。

「新陳代謝だよ。健康な星が元気に繁栄するためには、将来性のない星を間引かないといけないんだ。そしてそれが僕の仕事」

レオは唾然とした。多くの人の命を奪うことを仕事というこの少女。だが、そう言う彼女の瞳は再び水色に澄み渡り、邪な影は感じられない。シアンの中だというこの世界も清浄そのものであり、聖なる気配に満ちていた。

「どうする？　それでも僕に頼む？」

「この星に……何しに来たんですか？」

レオは恐る恐る聞いた。

「ふふつ、カンがいいね。そう、この星はブラックリストに載ってるんだ」

レオは心臓が止まりそうになった。さっきの星のように自分達も滅ぼされてしまう……。

「も、もしかして、頼むのをやめたらすぐにこの星……消されますか？」

「まだ来たばかりだから何ともだけど……、多分そうなるかな？」

シアンは首をかしげながら、恐ろしい事をさらつと言った。

「だとしたら選択肢など無いじゃないですか……」

「そうだね、君が救世主になるしか道はないね」

シアンは微笑んで言った。

レオは目をつぶり大きく息をついた。

なぜこんな大量虐殺が許されるのかレオにはさっぱり分からなかった。レオには全く理解が及ばない、はるか高みにある世界の営みなのだろう。

「やります。それが僕の理想だし、他に選択肢などないんですから」

「無理してやってもうまくいかないよ？」

「元々僕が言い出した話です。僕はみんなを笑顔にしたいんです。しっかりとやり遂げます。」

レオは覚悟を決めそう言って笑った。

「大変だよ？」

シアンはレオの目をのぞきこむ。

「やりたいことをやるだけです」

レオはまつすぐな目でシアンを見た。

「ふうん……」

シアンはそう言ってしばらくレオの目を見つめる……。

そして、いきなり相好を崩すと、

「なら契約成立。一緒に国づくりだ——！」

うれしそうにそう言うのと、レオをぎゅつとハグして頬にチュツとキスをした。

レオはいきなりふわふわの柔らかな体に包まれ、目を白黒とさせながら言った。

「あ、ありがとう。シアンさん」

『『さん』なんて要らないよ……。シアンって呼んで』

「じゃあ、シ、シアン、よろしく！」

レオは立ち昇ってくる華やかな温かい香りに困惑しながら言った。

こうして失敗の許されないレオの理想郷づくりが始まった。それは数億人に及ぶこの星の住民の命が懸かったとんでもない勝負であり、また同時にこの星が新たなステー

ジへ行けるかどうかの挑戦だった。



気が付くとレオ達は元の世界に戻っていた。

麦畑は風に揺れ、黄金のウエーブを描き、青空にはポツカリと白い雲が浮かんでいる。冷静に考えると、なんだかすごい約束をしてしまったとレオは少し怖くなった。それでも物心ついてからずっと奴隷で悲惨な労働に明け暮れていた日々の中で、思い悩んでいたことの出口が見つかった思いがして、どこかワクワクしていた。

「最初はこうするの？」

シアンが聞いてくる。

「誰も住んでない場所を探したいな。でも……どこにあるかなあ……」

国の基本は何と言っても国土である。しかし、奴隷の少年にはそんなもの心当たりもなかった。

「うーん、じゃ、ドラゴンに聞いてみようか？」

少女は人差し指を立て、ニコニコしながら言った。

「ドラゴン!? ド、ドラゴンって本当にいるんですか？」

「いるわよ。可愛いわよー」

「か、可愛い………んですか？」

「とーっても」

ニツコリと笑うシアン。

「そしたらドラゴンの所まで案内してくれませんか？」

「敬語なんていらないわ、行きましょ！ ドラゴンに会いに」

シアンは微笑み、レオはうなずいた。

ビューッと爽やかな風が吹き、黄金色に実った小麦畑がウエーブを作る。まるで二人の挑戦を祝福しているようだった。

1—2. 襲われる王女

まずは、レオの奴隷契約を解消しないとならない。二人は街に向かって歩き出した。「国を作るなら衣食住をどうするか考えないと……」

レオは首をひねる。

「それだけじゃダメだよ、水道もトイレも、道も畑も、堤防も家もゼーんぶ作らないと！」
シアンは両手を広げてうれしそうに言う。

「えー！ 全部!？」

「レオ？ 国っていうのはそういうものだよ！ それに、そんなのは簡単な話。僕がパパッと作ってあげる。でも、人やシステムの問題は大変だよ。住民をどうやって集めるか？ 法律や警察や役所や……、裁判所に軍隊をどう作るか？ 産業も立ち上げないとだから貨幣や銀行や税金も！ もー大変！」

「うわあ……。人は身寄りのない子供たちを集めようかと思っただけ……」

「いい手だと思うけど、子供たちだけ集めたって国にはならないよ？」

「だよねえ……」

「いつそのこと、この国乗っ取っちゃう？」

シアンは悪い顔をして言った。

「えっ!? そんなことできるの?」

「レオが望むなら軍隊を無力化してあげるよ」

シアンはニコニコしながら言った。

「それって……、軍隊相手に勝つってこと……だよな?」

「ふふつ、僕は星ですら消せるんだよ? 軍隊なんて瞬殺だよ!」

そう言ってシアンはドヤ顔で胸を張った。

「すごいなあ……。シアンは神様なの?」

さっきの不思議な世界といい、シアンの存在は人の領域を超えている。

「僕はそんなに神聖じゃないよ。でも、神様よりは強いかな?」

傲慢顔のシアン。

「神様より強いならもう神様じゃないの?」

「そうかなあ? シアンはシアンだよ」

そう言ってシアンはニコニコする。

「それにしても国を乗っ取る……かあ……。それって楽しいかなあ?」

首をひねるレオ。

「うーん……。軍隊倒すのは楽しいけどねえ……」

「僕は楽しく国づくりがしたいんだよ」

レオはそう言つてニッコリした。

「ふうん。なんだか君はずいぶんとマトモだね……」

シアンは首をかしげた。

奴隷でこき使われ続けてきたレオにとって、神様より強いというシアンの実在は全く想像を絶していた。でも、自由の国を作るというただの思い付きが、シアンは圧倒的な力によつて現実性を帯びてきてることにレオはワクワクが止まらず、思わず両手のこぶしをグツと握つた。



パカラツ！ パカラツ！

馬が走ってくる音が響いてきた。

「あ、馬車だ！ 危ないよ」

レオはシアンの手を引いて道の脇に避けた。

豪華な金属製の鎧を身にまとつた騎士が乗つた騎馬が四頭、それに続いて馬車がやつてくる。豪華な装飾のつけられた馬車には王家の家紋があらわれ、どうやら王族が乗っているらしい。

俺たちは馬車を見送り、舞い上がった砂ぼこりを手で払つた。

ヒヒヒーン！ ヒヒヒーン！

向こうで急に馬たちがいなくな。

何だろうと思つてみると、黒装束の集団がいきなり騎馬の前に飛び出し、交戦を始めた。馬車も急停車すると、黒装束の連中に囲まれ、ドアを壊されていく。

「うわっ！ 大変だ！ 襲われてるよ！」

レオは叫んだ。

「ありやりや」

シアンは淡々と言う。

騎士たちは健闘したが、多勢に無勢。やがて次々と引きずり降ろされ、倒された。このままだと馬車の中の王族もやられてしまうだろう。

「何とか助けてあげられないかな？」

レオが眉間みけんにしわを寄せながら言った。

「助けると面倒な事になるよ？ 割に合わないよ」

シアンは肩をすくめていう。

するとレオは真剣なまなざしで言った。

「シアン、それは違うよ。人生は損得勘定しちゃダメなんだ」

「へっ？」

「『いい損をしな』ってママが言ってたよ」

「いい損……?」

「^い粋な損が最高だつて。人生の本質は『損』にあるつて」

レオはそう言つてジツとシアンを見つめた。

「へえ……、確かにそうかも……。君はすごい事言うねっ!」

シアンはすごく嬉しそうに言つた。

「へへっ、ママの受け売りだけどね」

レオは照れ、そして目をつぶつてちよつとうつむいた。

「で、損するのはいいんだけど……。僕、手加減できないからあいつら死んじやうよ?」

シアンは物騒なことを言う。

「なるべく殺さないように収められる?」

レオはシアンに聞いた。

「うーん、殺さないようにかあ……。君は面倒な事を言うねえ」

シアンはちよつと考え込む。

と、その時、馬車の後ろの小さな非常口がパカツと開いて少女が出てきた。少女は美しい金髪を綺麗に編み込み、白く美しい肌が陽の光にまぶしく見える。そして、ピンク色のワンピースで胸の所に編み紐が付いている豪華な服を着ていた。

「あつ！ 王女様だ！」

レオは叫んだ。レオはパレードの時に、遠巻きに彼女を見たことがあったのだ。

美しく品のある王女は街のみんなのアイドルであり、話題の美少女である。もちろん、レオも大好きだった。レオはそんな王女の危機に思わず心臓がキュツとなつて真っ青な顔になつた。

王女は必死にこつちの方に逃げてくる。

しかし、黒装束の男たちも見逃さなかつた。

「逃げたぞー！」

という声がして、三人が追いかけてきた。

1—3. おぞましい漆黒の球

「シアン。助けよう！」

レオはシアンの手を取って頼む。

「分かった。でもレオもちやんと損してよ！」

「え？ わ、分かった。何をすれば？」

シアンはニコツと笑うと、レオに両手をかざし、何かをぶつぶつとつぶやく。すると、レオの身体がぼうつと光った。

「これでよし。これで、レオの身体は物理攻撃無効。どんな攻撃受けても無傷だよっ！」
「物理攻撃無効？」

レオが首をひねっていると、シアンはレオのわきの下を持って、身体をひよいと持ち上げ、

「ちよつと敵の注意を引いておいて！」

と、言いながらブウンと一回転振り回すと、そのまま追手に向かってすごい速度で放り投げた。

「え——っ!？」

レオは手足をバタバタさせ、叫び声をあげながら王女の上を飛び越え、追手の先頭の男に思いつきりぶつかった。

「ぐはあ！」

ぶつかつて吹き飛ぶ二人は後続の二人にも当たり、全員ゴロゴロと転がる。

「ぐわあ！」「ぐはっ！」

まるでボウリングだった。

「シアン、ひどいなあ……」

そう言いながら、砂だらけになつた体をゆつくりと起こすレオ。

「あれ？　痛くない……」

レオは自分の身体をあちこち見ながら立ち上がる。

「こ、このガキが！　何しやがる！」

男はよろよろと立ち上がり、剣先をレオの顔の前に突きつける。

「あ、これは僕がやつたんじゃないよ！」

レオは後ずさりしながら首を振った。



王女は、手招きしているシアンを見ると、走りながら

「助けてー！」

と叫び、手をシアンの方に伸ばす。

シアンはニコニコとしながら、王女の手を取ると、
「危ないから、ちよつとこつちで待ってて」

と、いいながら手を引いて池の上を歩いて行つた。

二人は水面を歩き、足跡の波紋が点々と広がっていく。

「えっ!?! 水面……よね!?!」

驚く王女にシアンは言つた。

「冬になったら凍つて水面歩けるでしょ?」

「ええ、まあ……」

「だから、歩くたびに『今は冬だよ』つて足元の水に話しかけるんだよ。すると歩けるのさ」

シアンはニツコリと笑つて言う。

王女は初めて聞く話に驚いた。

「え!?! 本当ですか?」

「嘘だけどね、きやははは!」

シアンはすごく楽しくそうに笑い、王女は渋い顔をする。

「じゃ、こゝで待っててね」

シアンは池の中ほどに王女を立たせると、ツーツと上空へ向かって飛んで行った。
「あつ、待って……」

王女は心細げに手を伸ばし、この不可思議な少女をどうとらえたいのか困惑し、
そして足元の水面を見つめた。



レオは剣を持った黒装束の男たちに囲まれている。

『助けて』と言ったのはレオだったが、まさか放り込まれるとは思っていなかった。あ
まりにも無茶苦茶なシアンの行動にレオは心臓が止まりそうだった。

「ちよ、ちよつと待ってください！」

おびえながら両手を前にして、何とか説得しようとしたレオだったが、

「問答無用！」

そう言つて男は剣を振りかぶり、一気に袈裟^{けさ}切りに刃を振り下ろした。

とつさに腕でかばうレオ。

パキイン！

甲高い金属音がして剣は割れ、刀身はクルクルと宙を舞つて地面に刺さった。

「へ？」「あれ？」

驚くレオと黒装束の男たち。

「セイヤー！」

後ろから別の男が剣で斬りかかったが、また剣は割れて刀身は飛んで行った。

奇妙な沈黙が場を支配する。

剣が効かない少年。一体、何をどうしたらいいのかわからず、男たちは戸惑^{とまど}っていた。すると、空からバチバチバチツと激しい破裂音がして、雷のようなまばゆい閃光が辺りを照らす。

みんなが音の方向を見上げると、そこにはシアンが両手を向かい合わせにして浮いていた。そして手の間には激しい閃光が上がり、直視できない程のまぶしきで輝く。

「な、なんだありやあー！」

黒装束の男たちは声をあげながら、本能的に危険を感じ、目に恐怖の色を浮かべた。

まばゆい輝きはさらに強烈になり、天も地もすべて激烈な輝きに埋め尽くされ、みんな目を覆う。

「うわあああー！」「なんだこりやあー！」

いきなりやってきた、この世の終わりのような光の洪水にみんな恐怖に震えた。

直後、輝きはいきなりおさまる——。

みんな、恐る恐る空を見上げた。

そこでは、シアンが何やらおぞましい漆黒の球をかかえ、

「ブラックホール殲滅暗黒完成！ きやはははは！」

と、響き渡る声でうれしそうに笑う。

シアンは地球と同サイズの星を約二センチメートルくらいに圧縮し、ブラックホールにしたのだった。地面に落ちないようにコントロールしているが、その強烈な引力は常識を超える力で空間すら歪ませていた。

ブラックホール殲滅暗黒の周りにはドス黒いオーラのようなモヤが渦巻いており、紫色のスパークが時折パリパリつと閃光を放つ。

その場にいるものは皆、見たこともない恐るべき脅威に戦慄した。

1—4. 圧倒的な物理

「ま、魔女だあ！」

レオを囲んでいた者たちは、馬車の方へと一目散に逃げだした。

その様子を見ていた黒装束の男たちの頭目は、

「また、怪しい魔術師が出てきやがった……。だが、うちにも先生がいる！ 先生！ お願ひします！」

そういつて、傍らの黒ローブの男に声をかけた。

だが、男はシアンを見ながら顔面蒼白になっている。そして、

「あ、あれは違う……。あれは魔術じゃない……。魔力が一切感じられん」

と、いいながら首を振って後ずさった。

「え？ 魔術じゃなきゃ何なんですか？」

「わからん……。あえて言うなら……。物理？」

「物理……？ 何ですかそれ？」

「自然の力だ。だがあんなに桁違いの力、ありうるのか？ 信じられん……」

ローブの男は冷や汗を浮かびながら呆然^{ぼうぜん}としてた。

「先生、ごちやごちや言つてないで倒してくださいよ！ 高い金払ってるんですぜ！」
頭目はイライラしながら叫んだ。

「くっ……。知らんからな！」

そう言うのと男は杖を振り上げ、呪文を唱えはじめた。

すると、シアンに向けて巨大な真紅の魔法陣が高速に描かれ始める。高周波がキィ——
ン！ と鳴り響き、周囲の空気も張りつめてくる。

そして、魔法陣が完成すると、男は

「灼熱槍！」
フレイムランス

と叫んだ。すると、魔法陣の中央からまぶしく光り輝く巨大な豪炎がシアンに向かって一直線に飛んだ。

周りの男たちも、

「おおー！」「うわあー！」

と、歓声を上げる。

シアンはすっ飛んでくる鮮烈に輝く炎の槍を見ると、うれしそうに、

「えいっ！」

と、言いながら、ブラックホール殲滅暗黒を槍に向かって投げた。

ブラックホール殲滅暗黒は炎の槍にぶつかろうとする瞬間、ヒュオン！ と鈍く響く音を残し、跡形

もなく炎の槍を飲み込んだ。

「えっ!？」

頭目も男たちも驚き、言葉を失う。

ブラツクホール
殲滅暗黒はそのまま一直線に飛び、途中で他の男たちを追い越しながら、追い越しざまに

ヒュン！ ヒュヒュン！

と、音を立てて男たちを吸い込んでいく。

それを見た黒ローブの男は焦って叫んだ。

バーエクトシールド
「絶対防壁！」

ブラツクホール
すると殲滅暗黒に向けて巨大な黄金の魔法陣が展開し、防御態勢となった。

ブラツクホール
だが、殲滅暗黒は魔法陣をヒュン！ と、瞬時に飲み込み、黒ローブの男に迫る。

「だから嫌だったんだよお！ うわああ！」

ブラツクホール
男は断末魔の叫びを残しながら頭目と共に殲滅暗黒に飲まれて消えていった。

「そんなの効かないよ。そもそもその魔法陣、僕が考案したんだから」

ブラツクホール
シアンはドヤ顔でそう言った。

ブラツクホール
殲滅暗黒はそれだけでは飽き足らず、さらに周囲を徘徊しながら馬車も他の男も倒れてる騎士も次々と吸い込み始めた。

「うわあ!」「何だこれはあ!」

悲鳴をあげながら逃げ惑う男たちも次々と飲み込まれていく。

まさに地獄絵図が展開された。

「え……?」

レオは何が起こったのか良く分からなかった。

ゴ——ッ!

ブラツクホール
殲滅暗黒の吸引力はどんどん強まり、まるで竜巻のように周りの空気が轟音を立てながら殲滅暗黒に吸い込まれ始める。

「ヤバい! ヤバい!」

危険を感じたレオは、どんどん強くなる暴風の中必死に逃げだした。

シアンが飛んできてレオに追いつくと、

「なるべく殺さないように収めたよ」

と、ニツコリと笑って言う。

「分かった、分かったからこの風止めて!」

砂ぼこりが吹き付けてくる中でレオは頼む。

「わかったよ!」

シアンはそう言うと、ブラツクホール
殲滅暗黒に手を向け、フニフニと不思議なしぐさで動かした。

ブラックホール
殲滅暗黒は動き回るのをやめ、
吸引力も徐々に落ち、
風も収まっっていく。

1—5. 大地を穿つ大穴

「ふう、良かった……」

レオが胸をなでおろした時だった。小さな渦を巻いて吹き上がった砂ぼこりがシアンの顔を直撃してしまった……。

「ふえ……」

シアンが動かなくなる。

「だ、大丈夫？」

レオは心配した。

「ふえつくしよん！」

思いつきりくしやみをするシアン。

その拍子に^{ブラックホール}殲滅暗黒は道に落ちてしまった。

すると、^{ブラックホール}殲滅暗黒は道そのものをはぎ取り、大地をガンガン吸い込みながら一気に地中へと落ち始めた。

「あっ！」

レオが驚いている間にも^{ブラックホール}殲滅暗黒は加速しながら地中深くへと落ちて行く。ズズズ

ズー！ と激しい地響きを伴いながら大地がどんどん飲み込まれ、巨大な穴が広がっていく。

「ヤバい、ヤバい！ 星が消えちゃうー！」

シアンはそう叫びながら、急いで暗く深い穴の底へと飛び降りていった。

地響きはどんどん激しくなり、レオは立っていることもできなくなる。穴はどんどん広がり、レオの所に断崖絶壁が迫ってきた。

「うわあー！ シアン——！」

叫ぶレオ。

ズン！

激しい閃光が穴から吹き上がり、激しい衝撃がレオを襲う。

「ひい——！」

レオの周りの地割れが急速に広がっていった。

「マズいー！」

レオが真っ青になって逃げようとした瞬間、地面が崩落し始める……。

「ぐわあ——！」

地面と共に真っ逆さまに穴に落ちて行くレオ。手足をワタワタとしながらレオの身体は深い深い穴の奥へと吸い込まれていった……。

レオには全てがスローモーションのように見える。崩落していく地面と共にゆるやかに宙を舞い、穴の開口部から見える青空がどんどん小さくなっていく……。

王女を助けてつて言っただけなのに、地獄の底へと落とされる理不尽さに、レオは気が遠くなり、激しい風切り音に身を任せていた――。

直後、レオはいきなり身体がふわつと浮き上がる感覚を覚える。そして、ふんわりと柔らかいものに受け止められた。

「え？」

驚くレオ。

「セーフ！ くしゃみは危険だねっ！」

シアンが苦笑しながら言う。レオを受け止めたのはシアンだったのだ。

レオは大きく息をつくと、

「……。もう……。死んだと思ったよ……」

と、眉をひそめた。

「ゴメン、ゴメン！」

シアンはそう言いながら、レオを抱きかかえたまま深い深い穴を地上へ向けて飛ぶ。

レオはシアンの体温を感じながら、安堵に包まれた。

それにしても王女様を助けるのになぜこんな大穴が開くのか、改めてシアンのメチャ

クチャさにレオは深いため息をついた。

シアンはどんどんと上昇し、開口部を超えて上空まで一気に飛んだ。

いきなり明るくなり、ブワツと広がる黄金色の麦畑……。

「わはあ！」

レオは生まれて初めて見る上空からの風景に圧倒される。広大に広がる麦畑に、キラキラと日差しを反射しながら流れる川、遠くに見える立派な街の城壁……。それはまるでおもちゃのミニチュアのように現実感を伴わないまま、レオの視界いっぱい広がった。

そして下を見ると、ポツカリと開いた底の見えない真つ黒な穴……。そこだけ、異様な禍々しさを放って存在していた。

シアンは直径百メートルはあろうかと言うこの巨大な穴の周りをぐるっと回って飛んで様子を確認する。

道は途切れてしまい、池からの水が滝のように穴へと流れ落ちていた。もはや災害である。



王女が池から上がってきて、道からシアンたちを見あげていた。

シアンは彼女を見つけると、王女に手を振りながら徐々に高度を落としていく……。

そして、王女の前にシユタツと着地すると、

「悪い奴はとつちめておいたよ！」

そう言いながらレオを下ろした。

王女はとまどいがちにシアンに頭を下げてお礼を言った。

「た、助けていただいてありがとうございます！」

「無事でよかったね！」

シアンはニコニコしながら言う。

しかし、王女は穴の中を恐る恐るのぞき、どこまでも深く底の見えない暗黒の穴に
ののく。

「この穴は何とかならないでしょうか？ 道が切れるのは困るんです……」

王女は困惑した表情を見せる。

「分かったよ！」

シアンはニコツと笑うとツーツと穴の上空へと飛んだ。

そして両手を空へと伸ばすと、漆黒の雲が生まれ、シアンを中心にどんどん空を
覆っていった。

レオは青くなつた。またとんでもない事をやるに違いない。常識の通じないこの少
女の行動は一体どうしたらいいのか？ レオは混乱の中少し気が遠くなつた。

1—6. 全員生き埋め!?

レオは王女に、

「ヤバい、ヤバい、逃げよう!」

そう言つて、王女の手を握つて駆けだした。シアンが何かをやろうとする時は逃げた方がいいと、レオは学習したのだ。

やがて辺りは夜のように真っ暗になり、空に巨大な金色の円が描かれた。そして、中に六芒星ほうせいが描かれると、その周囲に不思議な文字が高速にびつしりと描かれていき、魔法陣を形成していった。それは神々しさすら感じられる美しい光景だった。

レオが振り返ると、魔法陣が出来上がり、そこからまっすぐ下に光芒こうぼうが放たれていった。

シアンはその光芒の中で楽しそうに浮かんでいる。青い髪をゆらし、スカートがはためき、その様子はまるで神話に出てくる天使の様だった。

徐々に光芒は強くなり、目が開けていられないくらいの激しい明るさに達した直後、シアンは両手を穴へと振り下ろす。

ズズーン!

「うわあああ」「ひいつ！」

激しい地鳴りがして大地震のように地面が揺れ、レオも王女も倒れ込んでしまう。

揺れが収まり、恐る恐るレオが後ろを振り向くと、大穴だった所には小高い丘が盛り上がっていた。

「えっ?」

レオはゆつくりと起き上がりながら様子を確認するが、それは土砂が積みあがった工事現場のようになっていた。

「うーん、これじゃ道が引けないなあ……」

シアンはそう言うのと、再度両手を振り下ろした。

ズーン!

激しい地鳴りが響き渡り、道の所だけ一直線に凹んで、切通のように成形された。

レオも王女も唾然^{あぜん}としてその恐るべきシアン^{シアン}の技に圧倒される。

「僕はね、『王女様を助けて』ってお願いしただけなんだ……」

レオは青ざめながら言った。

「ありがとう……。彼女は何者なの?」

「深淵より来た根源なる威力^{オールマイティ}って言ってたよ。神様より強いんだって」

「神様より!」

王女は丸い目をしてレオを見つめた。

「悪い人じゃないと思うんだけど、なんだか雑なんだよね……」

レオは渋い顔をして首を振った。

シアンは道の出来を見て満足そうにうなずくと、

「道をつなげたよー」

と言いながら、レオ達のそばにシユタツと着地する。

レオも王女も言葉を失ってただシアンを見ていた。

「あれ? もう大丈夫だよね?」

シアンはニコニコしながら言う。

レオと王女はお互いを見つめ合って言葉を探した。

「お、お疲れ様。でもなんでこんな盛り上がっちゃったの?」

レオが聞いた。

「うーん、吸い込んだものをそのまま戻しただけなんだけどな……。まあ、道が通ればい

いんでしょう?」

シアンはうれしそうにそう言った。

「えっ!? これ、吸い込んだ物なの? じゃあ、吸い込まれた人はどこに居るの?」

レオが不安そうにシアンに聞く。

「えっ?」

シアンは驚いたようにレオを見る。

嫌な沈黙の時間が流れた。

シアンは急に駆け出すと、手を使ってザクザクと丘を掘り始めた。

「まさか……、生き埋め……なの?」

王女は不安げに言う。

「ま、まさか……」

レオは青い顔をしてシアンを見つめた。

やがてシアンは何かを掘り当てたが……、困惑した表情を浮かべ、また埋め戻してし

まった。

遠目には誰かの腕のようだったが……。

もしや全員殺しちやっただのではないだろうか? レオと王女は蒼ざめた顔でお互い

を見つめ合った。

シアンは目を閉じてうつむき、額に手を当てて考え込んでいる。

「うーん……、うーん……」

シアンはうなり始める。

レオも王女も不安そうにシアンを見つめた。

しばらくくうなった後、

「よいしょ——！」

と、叫びながらシアンは斜め上にこぶしを振り抜いた。すると、空中に巨大な魔法陣がぼうつと浮かび上がり、そこから道の上にドサドサドサつと多くの人や馬車、馬が落ちてきた。

騎士たちは「いてて……」と言いながら、尻もちをついたまま腰をさすつたりしている。黒装束の男たちも同じように落ちてきたが、彼らはピクリとも動かなかつた。

「ふう……。これでいいかな？」

シアンは戻つてくると、ニコツと笑つて言つた。

レオは嘔然あぜんとしてポーつと彼らを見つめる。吸い込んだ人を吐き出すような魔法なんて聞いたこともなかつたのだ。なるほど、確かに神様より強いのもかもしれない。しかし、その行き当たりばつたりな雑さに、一抹の不安をぬぐえないレオであつた。

1—7. 死んでいた騎士

騎士たちは黒装束の男たちの状況を調べ、何かを相談すると、代表が王女の所へやってきて耳打ちする。

「あれ？」

レオは驚いた。この騎士は槍で滅多突きにされ、馬から落とされていたはずだ。それなのに、ケガ一つなくピンピンとしているのだ。レオはどういうことか分からず怪訝けげんそうにやり取りを見つめた。

王女は騎士の言葉にうなずくと、

「分かったわ。後始末はよろしく。私は先に帰ってるわ」

と、王族らしく堂々とした態度でそう言った。

王女は大きなブラウン色の瞳でレオとシアンを見て、

「あなたたち、ありがとう。後で宮殿に来てくれる？ お礼がしたいの……」

そう言ってニツコリと笑った。

長いまつげに整った目鼻立ち、そして透き通るような美しい肌。美しい王女の微笑みにレオはドキツとしながら、

「わ、分かりました。僕はレオ、彼女はシアンです」

そう言つて頭を下げた。

「レオにシアンね。私はオデイーヌ。一緒にお茶でも飲みましよ」

オデイーヌはうれしそうにそう言つと、馬車に乗りこむ。そして、手を振りながら何事もなかったかのように街の方へと去つていった。

王宮にご招待されて王女とお茶会。それは奴隷の少年にとつて信じられない話だった。レオは心臓がドキドキして馬車の行方をいつまでもボーつと見つめていた。



騎士たちは倒れている黒装束の男たちを縄で縛りあげていく。

「一応生きてるんだよね？」

レオはシアンに聞いた。

「レオが『殺すな』つていうから、いろいろ考えたんだよ！」

シアンはちよつと不満そうに言う。

「あ、そ、そうだよね……、ありがとう」

レオはお礼を言つた。

「でも、人助けもいいものだね」

シアンはさすががしい表情でニコツと笑つた。

「悪い奴が捕まっていく……。いい損ができたってことだよね」

「まあ、損ばかりじゃやってられないけどね」

そう言ってシアンは肩をすくめた。

「そう言えばあの人って、ケガしてたと思うんだけど……」

レオは騎士を指して言った。

「ケガ？ 死んでたよ」

シアンはあっけらかんと言った。

「え!? 生き返らせたの!？」

「あれ？ マズかった？」

シアンはキョトンとした顔で言う。

「い、いや。いいことだと……思うけど……」

「人間は死んでもしばらくは脳が生きてるからね」

シアンはそう言いながら自分の頭を指さした。

「え？ そう言うものなの？」

「一応そういうことになってるよ」

シアンはそう言ってニヤツと笑った。

「シアンと話していると何が本当だか分かんなくなるよ」

レオは首を振りながら言う。

「ふふつ、信ずる者は救われるよ。きやははは！」

シアンはうれしそうに笑った。



二人はどうやって国を作るのか、雑談まじりに話しながら街を目指した。

黄金に輝いてウエーブを作りながら揺れる麦畑の間の道を、時に笑いながら楽しく歩く。

しばらく行くと、城壁に囲まれた街が見えてくる。城門をくぐるとそこには立派な石造りの街が広がっていた。

「綺麗な街だねえ」

シアンは目をキラキラさせ、キョロキョロしながら石畳の道を歩く。

「ここはニーザリの街。もう少し行って入ったところがうちの商館だよ」

「うんうん、奴隷の権利を取り戻さないとね」

シアンがそう言うのと、レオは金の短剣を取り出して眺めながら、ゆつくりとうなずいた。



商館に着くと、ジュールダンの部屋へ行った。

レオの中では、いよいよ奴隸から抜け出せるかもしれないという興奮と、ちゃんと交
渉できるかどうかの不安がせめぎ合っていた……。

そんな緊張しきったレオをシアンは軽くハグし、

「頑張っておいで……」

と、応援した。

レオは大きく息をつくと、トントンとノックをして、

「レオです。お話があつてまいりました！」

と、叫ぶ。

「何だ?」

中からの返事を待つてドアを開けると、大麻臭いよどんだ空気かもわつと漂う。

レオはちよつと顔をしかめると、

「失礼します!」

と、中へと進んだ。

1—8. 勝負! 勝負!

ジュールダンは紙に巻いた大麻を一口大きく吸うと、レオをギロつとにらんで言った。「なんだ? さっきの事で文句でもあるのか?」

「いえ、そうではなく、僕の奴隷の権利を買い取らせてください!」

ジュールダンは目をキラツと光らせ、

「へえ……う? そんな金、どうした?」

と、怪訝けげんそうな顔で言った。

「これです!」

レオは金の短剣を両手でジュールダンに手渡した。

ジュールダンは大麻をくわえたまま、短剣を裏返したりしながらじつくりと検分する。

「なるほど。これは良い品だな……。その女にもらったのか?」

ジュールダンはアゴでシアンを指しながら言った。

「そうです。彼女にもらいました」

「悪いが、これじゃ足りんな。あと金貨百枚持つてきな」

そう言つて、ジュールダンは短剣をテーブルにおいて突つ返した。

「えっ?! 相場だったらこれでもお釣りがくるくらいですよ?」

レオは焦った。

「相場は相場。売値は俺が決める。奴隷のくせに生意気だ!」

ジュルダンはそう言っていてやらしい笑みを浮かべた。

「そ、そんなあ……」

ガツクリし、うなだれるレオ。

そんなレオの背中をシアンはポンポンと叩き、ジュルダンにニコツと笑って言った。

「賭けをしようよ!」

「賭け……?」

ジュルダンは大麻を大きく吸いながら、シアンを上から下までジロジロとなめ回すように見た。

「あなたが勝ったら金貨千枚あげる。でも、負けたらレオの条件で売ってよ」

「千枚……? お前そんなに金持ちなのか?」

「ほら」

シアンはそう言つてどこからともなく金貨を出すと、テーブルの上にジャラジャラと金貨の山を築いた。

唾然あぜんとするジュルダンとレオ。

「勝負! 勝負!」

そう言つて、シアンはニコニコと笑つた。

ジュールダンはニヤツといやらしい笑みを浮かべ、

「千枚じゃ足りんな。俺が勝つたら今晚お前に夜伽よとぎをやつてもらおう」

そう言つて、豊満なシアンの胸をいやらしい目つきで見た。

「いいよ!」

シアンはあつげらかんと返す。

「ダ、ダメだよ! シアン! 夜伽よとぎつていうのは、裸にされて、エ、エツチなことをされちゃうんだよ!」

レオは真つ赤になつて言つたが、

「大丈夫、負けなければどうということもないよ!」

と、優しくレオを見た。

「負けないだと? 何で勝負するんだ?」

ジュールダンは訝いぶかしげに言う。

「何でもいいよ? 好きに決めて」

うれしそうに言うシアン。

ジュールダンはちよつと考えて……、

「じゃあ、腕相撲な」

と言つてニヤツと笑つた。

「いいよー!」

シアンはそう言うと、ヒョロツとした腕を曲げ、わずかに盛り上がる力こぶを見せた。ジュルダンはドアを開けると、

「ウォルター! 来い!」

と、叫んだ。

ほどなく、筋肉ムキムキのごつい男がやってくる。

「ウォルター、このネーチャンと腕相撲して勝て」

「えっ? この子と……ですか!」

ウォルターはヒョロツとした女の子と腕相撲なんてどういふことか、悩んでしまつた。

「遠慮せず、バチコーン! と腕をへし折つてやれ!」

ジュルダンは発破をかける。

「わ、わかりました……」

ジュルダンは脇に置いてあつた小さな丸テーブルを持ってきて、椅子を用意し、二人を座らせた。そして、

「はい、じゃあ手を出して……」

そうやって二人の手を組ませる。

「ウォルター、手を抜くなよ! 勝ったら金貨一枚やるからな。今晚のお楽しみがかかってるんだ。絶対勝て!」

「き、金貨!? か、勝ちますよ!」

ウォルターの気合が十分に上がったところで、ジュールダンは声をかける。

「レディー!」

部屋にはピリピリとした緊張感が走る。

レオは手を合わせ、不安そうにシアンを見た。もちろん、神様より強いシアンが負ける訳がない。しかし、ジュールダンが狡猾な男だということは嫌というほど知っている。絶対ただでは負けないはずだ。嫌な予感にレオは押しつぶされそうになる。

シアンは相変わらず口元に微笑みをたたえ、勝負を楽しみにしているようだった。

1—9. アヒルピヨコピヨコ

「ゴ—！」

ジュールダンの掛け声と同時に、

「ぬおおおお—！」

ウオルターのうなり声が部屋に響く。

だが……、シアンの腕はビクともしなかった。

焦ったジュールダンは叫ぶ。

「おい！ 何やってんだ！ お前の筋肉は飾りか!？」

しかし、ウオルターがどんなに真つ赤になつて頑張つても、シアンの腕はビクともしなかった。

「うふふ、それじゃ勝つちやおうかなあ……、きやはははは—！」

シアンはうれしそうに笑い、徐々に力を入れ始めた。

ウオルターがどんとどんと押されていく。

「何やってんだお前！ 金貨だ！ 金貨パワーで頑張れ—！」

ジュールダンは青くなりながら叫ぶ。

「ぐおおおー！」

ウオルターは真つ赤になりながら渾身の力を振り絞るが、どんどん押し倒され、もうすぐ机に着きそうになった。

と、その時だった。

ガン！

ジュールダンがテーブルの足をけててテーブルが大きく揺れた。

「おつといけねえ！」

白々しくジュールダンが言う。

「今、ネーチャンのヒジが浮いたから、ネーチャンの反則負けな！」

無理筋の理屈を強引に主張するジュールダン。

「何言ってるんですか！ ご主人様の反則負けですよ！」

レオが真つ赤になって怒る。

「はあ？ テーブルけつちやいけないうんてルールはないぞ？」

ふてぶてしく言い放つ。

そして大麻をおいしそうに吸った。

すると、シアンは無言ですつと立ち上がる。

皆、何をするのかとシアンを見つめた。

直後、シアンは目にも止まらぬ速さでこぶしをテーブルに叩きつけ、耳をつんざく激しい衝撃音をあげて、テーブルは粉々に吹き飛んだ。

嘩然あぜんとする一同。

そして、無表情のまま、

「ふおおお……」

と、声を上げると、全身から漆黒のオーラをぶわつと噴き出した。オーラは暴風のように勢いよく噴き出し、書類を巻き上げていく。

シアンは両手を高々と上げ、

「きやはははー！」

と、うれしそうに笑い声をあげると、燃えるような紅蓮の瞳を輝かせ、さらに強くオーラを噴き出した。ズン！ と衝撃音と共に屋根が吹き飛び、窓ガラスがパンパンと次々と割れていった。

部屋からは青空が見え、まるで竜巻直撃状態だった。

「うわあー！」「ひい！」

「あわわわわ！ ま、魔女だあー！」

ジュールダンは腰を抜きへたり込む。

シアンは紅蓮の瞳で射抜くようにジュールダンをにらんだ。

「ひいひい！」

ガタガタと震えるジュールダン。

そして、シアンは胸の所から何か黄色い物を出す。

それはプラスチックでできた可愛らしいアヒルのオモチャだった。

シアンはアヒルの赤いくちばしにチュツとキスをする、それをジュールダンの方へ差し出す。

ジュールダンは何だかわからず、呆然とアヒルを見た。

直後シアンはギュツとアヒルを潰す。

「ホゲエエエエ！」

赤いくちばしから奇声を上げるアヒル。

すると、ジュールダンは淡い光に包まれた。

「な、なんだこれは!? う、うわああああ！」

ジュールダンがビビった直後、ジュールダンはあつという間に縮んでアヒルに吸い込まれていった。

「悪い子はおしおき！ きやはははは！」

シアンの笑い声が不気味に部屋に響く。

やがてオーラは消え去り、滅茶苦茶になった部屋の中で、アヒルが動いた……。

「な、なにをするんだ!」

アヒルがカタカタ揺れながら、可愛い甲高い声で叫ぶ。

「アヒルにしちやいけないうるもないよね?」

シアンはうれしそうに言った。

「くっ……! わ、悪かった。許してくれ。レオの奴隷契約も差し出すよ」

アヒルはピヨコピヨコと揺れながら言った。

「これ、どう思う?」

シアンはウオルターにアヒルを渡して言った。

「お、おい、何するんだ!」

アヒルが可愛い声で叫ぶ。

ウオルターはアヒルをしげしげと眺め、

「これ、どうなってるんですか?」

と、言いながら、ギョツと握りつぶした。

「ホゲエエエエ!」

アヒルが奇声を上げる。

「あ、なんか、この声クセになりますね!」

「やめろ! ウオルター! 貴様!」

アヒルが可愛い声を上げる。

ウォルターはうれしそうに再度握りつぶした。

「ホゲエエエエ！」

あまりにも滑稽な奇声に、みんな思わず笑ってしまふ。

「はっはっは！」「わはははは！」「きやははは！」

「お、お前ら……ホゲエエエエ！」

しばらくみんなでおモチヤにした後、

「さーて、じゃあ、奴隷契約書はもらってくよ」

そう言つて、シアンは金庫を力ずくでバキバキつと壊して開け、契約書の束をパラパ

ラとめくつた。

「おい、何するんだ！ 人間には戻してくれるんだらうな？」

アヒルがウォルターの手の中で、ピヨコピヨコしながら喚く。

1—10. 首輪からの自由

「あーこれこれ！」

シアンは契約書を一枚抜きだし、そしてビリビリッと破いた。すると、中から一本の細いワイヤーが現れる。

シアンはそのワイヤーを抜き出すと、レオの首にガツチリとついている金属製の首輪の穴にそつと通した。

ガチャ！

首輪は音を立ててはずれ、地面にガン！と落ちて転がった。

「やったあ！」

レオは思わず両手のこぶしを握り、ガッツポーズ。

「これで君は自由だよ」

シアンはニコツと笑った。

「ありがとう、シアン！ 恩に着るよ！」

レオは目に涙を浮かべながらシアンの手を取る。

「自由の国を作るんでしょ？ これがスタートだよ！」

シアンは優しく言った。

「うん！ 一緒に作ろう！」

レオは力強く言った。



「おじゃましました〜！」

シアンがそう言つて部屋を後にしようとする時、

「ちよつ！ ちよつと待つてくださいいい！ 戻してくださいよ！」

アヒルが可愛い声で叫んだ。

振り返るシアン。

「アヒルはあのままなの？」

レオはシアンに聞いた。

「放つておけば元に戻るからねえ」

シアンはちよつと悩みながらアヒルを見た。

「えっ!? どのくらいで戻りますか？」

アヒルが必死に聞く。

「次の日蝕にっしょくかな？」

「それって……いつ？」

レオが聞く。

「三年後……?」

「えええ！ そりやないよ、ねえさん！」

アヒルが泣きそうな声を出す。

悲壮なアヒルを見てレオが言った。

「僕は三年間あなたにいじめられ続けましたけどね？」

「……」

アヒルは言葉なくうつむく。

そして、ゆっくりと言った。

「ゴ、ゴメン……。悪かった……」

「まあ自業自得だねっ！」

シアンはニコニコしながら言う。

アヒルは目を閉じてがつくりとうなだれた。相当な苦難が予想される三年、それはジウルダンにとって生まれて初めて感じた絶望だった。

その様子を見てレオが言う。

「ちよつとかわいそう……かな？」

「そう！ かわいそう！」

アヒルは顔を上げると必死にレオにアピールする。

シアンはそんな様子をしばらく眺め、アヒルを手にしてポーッと立っていたウォルターに聞いた。

「君はどう思う？ 元に戻してあげたい？」

「え？ お、俺ですか!! うーん……」

考え込んでしまった。

「ウォ、ウォルター、今までたくさん世話してやったじゃないか！ お前からも頼んでくれ！」

アヒルは必死である。

「ご主人様は俺の事を奴隷だと馬鹿にして人間扱いしてくれませんでした。食べ物も硬いパンと残飯ばかり。正直不満だらけです」

ウォルターは淡々と言う。

「あーあ、残念でした！」

シアンはそう言うのと立ち去ろうとする。

「ま、待ってくれ！ ……。ウォルター！ お前には酒も飲ませてやったじゃないか！」

アヒルは必死に説得を試みる。

「あれ、飲み残し集めた奴ですよ？ 俺、知ってますよ」

「いや、それは……」

アヒルはうつむいてしまう。

「もちろん、感謝してるところもあります。だから、奴隷たちを人間扱いするって約束してくれませんか？」

ウォルターはアヒルをジッと見つめて言う。

「……。そうだな……。俺が悪かった……。約束しよう」

アヒルはうつむきながら神妙に答えた。

シアンはそのやり取りを見ると、

「ふうん……。それじゃ執行猶予を付けてあげる？」

そう言つて二人に聞いた。

ウォルターもレオもゆっくりとうなずく。

シアンはニツコリと笑い、自身の手を淡く光らせる。そして、アヒルの頭をなで、アヒルにも光をまとわせた。

すると、アヒルはモコモコと膨らみ始め、やがて太った若い男へと変わっていった。

「おお！ ねえさん……。ありがとう！」

ジュールダンは目に涙を浮かべながらシアンの手を取り、両手で包んだ。

「悪いことすると自動的にアヒルに戻るから気を付けてね」

シアンはほほえみを浮かべながらも、鋭い目でジュールダンをにらんだ。

「わ、悪いことというのとは具体的には……?」

「『これやったら困る人が出るな』ってこと。自分で分かるでしょ?」

「わ、わかり……ました……」

ジュールダンはうつむきながら答えた。

1—111. ケーキだよ、ケーキ！

せつかなので二人は王女様に会いに王宮へ向かった。

気持ちのいい石畳の道を二人で歩く。

「ジュールダンのアヒル、面白かったね」

レオがニコニコしながら言うと、

「ずっとあのままでも良かったのに」

と、シアンはやや不満な感じだった。

「まあまあ……、あつ！ そう言えばシアンが出してた金貨千枚、そのままじゃない？」

レオが気が付いて青い顔をする。

「えっ!? あ、そう言えば……」

シアンはハツとしてレオを見る。

「取りに戻ろう！」

立ち止まってレオが言う。

「んー、まあ、屋根ぶつ壊しちゃったしレオをここまで育ててくれたんだから、置き土産

でいいよ」

シアンはそう言つてニツコリと笑つた。

「え? 千枚だよ、千枚。家が一軒買えちやうよ?」

「ふふつ、悪いことでできなくなつたから、更生資金にも使つてもらえばいいんじゃないかな?」

「シアンは太つ腹だなあ……」

「そもそもお金なんて大したものじゃないんだよ」

シアンは軽く言う。

「僕には大したものだけどね……」

レオはそう言つて首を振つた。

「国を作るんだから、レオはお金を作る立場になるんだよ。もつと視野を広げなきゃ」

「えっ!? そ、そう言えば……。お金つてどうやって作るんだろう」

レオは考え込んでしまった。

「こつやつて作るのさ」

そう言うときシアンは空中からジャラジャラと金貨を出して、一つをレオに渡した。見ると、金貨の表面にはレオの横顔がち密に彫つてあつた。

「な、何これ!?!」

ビツクリするレオ。

「お金とはただの信用だよ。みんながお金だと思えばなんだっていいんだよ」
「うーん、難しいなあ……」

「レオは分かんなくていいよ。分かる人を見つけようよ」

シアンはそう言つて優しく微笑んだ。

「財務大臣……候補だね」

「そうそう、レオは信頼できそうな人を口説くだけでいいよ」

「うーん、できるかなあ……。まあ、やるしかないんだよね……。頑張ってみるよ」

レオはそう言つて微笑んだ。



遠くに王宮が見えてきた。豪華な装飾のついた鉄のフェンスが広大な屋敷を囲い、中には赤、白、ピンクのバラが咲き誇る美しい庭園が見える。

レオがいきなり止まつて言った。

「あつ、僕、こんな服で来ちやつた……」

「服なんて何でもいいんじゃない？」

シアンは別に興味無いようだった。

「いやいや、王宮にこんな奴隷の服じゃ入れないよ、困つたなあ……」

「じゃあ、こうしよう」

シアンは両手をレオの方に向けて何かブツブツつぶやいた。
ボン!

爆発音がして、レオの服が濃紺のジャケットにボーダーのトップスになった。

「えっ!? あ、ありがとう……、でも不思議な服だね……」

レオは初めて見るタイプの服に戸惑う。

「ユニクロで見繕ってみたよ」

「ユニクロ……?」

「僕が生まれた星の服屋さんだよ」

シアンはニコニコして言った。

「あー、違う星の服……なんだね……」

レオはこんな服で王宮に入っていいものかどうか悩んだが、奴隷の服よりはマシだと思いなおした。



門まで来ると、衛兵が槍を持って立っていた。

レオは事情を説明すると、しばらくして初老の男性が迎えに現れた。

「こちらでお待ちします」

男性はうやうやしく二人を応接室まで案内してくれた。

パールホワイトを基調とした王宮は豪華絢爛なつくりで、あちこちに彫刻が彫られ、金の装飾が施されていた。

陽の光が差し込む明るい応接室には大きなテーブルがあり、小さなケーキがたくさん並べられたトレイがいくつか並んでいた。

「お、ケーキだよ、ケーキ！」

シアンはうれしそうに言う。

レオは緊張して頬をこわばらせながら、男性の引く椅子に腰かけた。

ティーカップが用意され、メイドがそれぞれお茶を注いでいく。

「食べていいのかな？」

シアンがうれしそうにレオに聞く。

「ダメだよ！ オディー又待たないと！」

「え——」

シアンは不満そうだった。

1—1 2. クリーム王子

ほどなくしてオデイーヌが現れる。

「レオにシアン、来てくれてありがとう」

オデイーヌはニツコリと微笑んで言った。

「いえいえ、お招きありがとうございます」

レオがそう言うと、シアンは、

「これ食べていい？」

と、さっそく食い意地を優先させた。

「も、もちろん、どうぞ」

引き気味のオデイーヌ。

「どれにしようかなあ……」

そう言いながらシアンは取り皿にいろんな種類のケーキを山盛りに盛った。

「いただきませーす！」

そう言うతోフォークで刺してパクパクと食べ始めた。そして、

「うま〜っ！」

と、目をつぶり、幸せそうな表情を浮かべる。

その豪快な食べっぷりにレオもオデイーヌも圧倒された。

「あれ？ 食べないの？」

シアンは口の周りにクリームをつけたままレオに聞いた。

「た、食べるよ」

苦笑いするレオ。

レオは小さなショートケーキを一つとって食べ、

「うわっ！ すごい美味しいね！」

と、言って笑った。

「どうぞたくさん召し上がれ」

オデイーヌはうれしそうに言う。



ガチャ！

いきなりドアが開いた。

豪華な装飾が施された服を身にまとった若い男が入ってくる。

「お、お兄様！ どうされたんですか？」

オデイーヌは驚く。王子が来るなんて話は聞いていなかったのだ。

王子は仏頂面で見返し、ケーキをパクついているシアンを見ると、近づいた。「おい、お前だな。怪しい魔法を使う魔女というのは？」

王子は顔をのぞき込むようにして言った。

シアンはチラツと王子を見て、

「僕は魔女じゃないよ、シアンだよ」

そう言うのと、王子を無視してフオークでケーキを刺して食べようとした。

「無礼者！」

王子はフオークのケーキをはたき落とした。

点々と床を転がるケーキ。

凍り付くれオとオデイーヌ……。

二人にとって超人的な力を持つシアンを怒らせることは、もはや恐怖でしかなかった。

シアンは、バン！ とテーブルを叩きながら立ち上がる。

ティーカップが転がり、紅茶がポタポタとテーブルからしたたった。

そしてシアンは全身からブワツと漆黒のオーラを噴き出すと、燃えるような紅蓮の瞳を輝かせ王子をにらんだ。

王子は気圧され、後ずさりし、腰の剣に手をかけながら喚く。

「な、なにをやる気だ！ 俺は王位継承順位一位の王族だぞ！ 不敬罪だ！ 犯罪だ！」
しかし、シアンは怒りをあらわにしながらフォークを王子に突きつけ、にじり寄る。
オデューヌは立ち上がって叫んだ。

「お兄様！ ダメ！ 彼女は王族とか法律とか超えた存在なの。謝って！」

シアンは漆黒のオーラが部屋中を暴れまわり、カーテンがバタバタと暴れ、花瓶が倒れた。

「あ、謝るだ！ なぜ俺が謝らねばならんだ！ ふざけんな！」

テンパった王子はそう言うのと剣を抜く。

しかし、シアンは表情一つ変えず真紅に瞳を輝かせながら王子に迫る。王子は気圧され後ずさりしたが、部屋の隅に追い詰められ、

「くっ！ 無礼者め！」

そう言うのとシアンに斬りかかった。

王子の剣は鋭い軌道を描いて一瞬でシアンに迫る。だが、シアンは表情一つ変えることなく、指先で持ったフォークでこともなげに受け止めた。

「へっ!？」

焦る王子。

シアンはもう片方の手を転がってるショートケーキの方にむけると、ふわりと浮き上

がらせる。そして次の瞬間、ケーキが王子の顔に向かってすつ飛んでいき、パンツ！と顔をクリームだらけにして王子を吹き飛ばした。

「ぐはあ！」

無様に転がる王子。

そしてそれを、仁王立ちしながら見下ろすシアン。

レオもオディーヌもあまりの事に言葉を失っていた。

王子はゆつくりと起き上がり、顔のクリームをハンカチで拭きながら、

「き、貴様、俺にこんなことしてただで済むと思ってるのか？」

と、喚く。

「食べ物で粗末にしちやダメって教わらなかったの？」

シアンは王子をにらんで言った。

「ケーキ一つで大げさな！」

「ふうん、あんたケーキ作れるの？」

「えっ!? お、俺はケーキ作るのが仕事じゃないし……」

「できないのね？ なら謝りなさい！ ケーキに、作ってくれたパティシエに！」

王子は反論できずプルプルと震え、

「ふざけんな！ 覚えてろよ！」

そう喚くと部屋を飛び出していった。

1-13. ヘッドハント

シアンは、ふう、と息をつくとき、オーラを引つ込め、瞳も水色に戻った。

「王子様怒らせちゃってマズくないですか？」

レオが心配になってオデイーヌに聞く。

「うーん、今のはお兄様の方が問題だけど、王族はプライドを優先させる存在だから……面倒な事になるかも……」

「シアン、じゃあ、お暇いとましてドラゴンの所へ行こうか？」

「えっ!? まだケーキ食べ終わってないのに!？」

シアンはケーキを皿に盛りなおしながらそう言った。

「ちよつとまって!?! あなたたちドラゴンの所へ行くの!?!」

オデイーヌは可愛い目を大きく開いて言った。

「うん、僕たち二人で奴隷や貧困のない『自由の国』を作るんだけど、どこに作ったらいいかドラゴンに聞こうと思ってるんだ」

レオはニコニコして言う。

「自由の国にドラゴン!? あなた達本当にとんでもない人たちね!」

オデューヌは目を輝かせて興奮気味に言った。

「僕は物心ついた時にはもう奴隷だったんだ。朝から晩まで働かされ、理不尽な暴力を受け続けてきたの。僕だけじゃない。街外れには浮浪児が溢れてるし、こんなのはおかしいんだよ」

レオは淡々と言った。

「そ、そうね……。ごめんなさい、そうなってしまったのは私たち王族の問題でもあるわ……。」

オデューヌは痛い所を突かれたように焦りながら答えた。

「僕はその辺、良く分からないけど、苦しい人、困ってる人を集めて、新天地でみんなが笑顔で暮らせる場所を作っちゃえばいいんじゃないかって思うんだ」

「そんなこと……、できるの?」

「だってこの国だって奴隷たちが支えてるでしょ? だったら奴隷たちだけで国作ったら今より良く回るよね?」

「……」

オデューヌは圧倒され、言葉を失った。『支配階級は搾取しかしてない』という批判ともとれる言葉に返す言葉が無かったのだ。

「シアン、そうだよね?」

「コンセプトはその通りだし、インフラは僕が作ってあげる。後はルールを決め、オペレーションを具体化する仲間集めだよな」

シアンはケーキをつつきながら言った。

「オデューヌも一緒にやらない？」

レオはニコツと笑って聞いた。

「えっ!?! わ、私!?!」

焦るオデューヌ。

それを見てシアンは笑った。

「レオ、君はすごいな。王族をヘッドハントしようなんて普通思いつかないよ」

「だって、なんだかオデューヌは窮屈そうなんだもん。楽しいこと一緒にやろうよ」

レオは澄んだ瞳で淡々と口説く。

「そ、そうね……。確かに王族の暮らしは窮屈よ。しきたりに儀式、それからマナー、マナー、マナー。そして私の王位継承順位なんて下の方だし、どうせ政略結婚させられるんだわ……」

オデューヌは苦々しい顔をしてうつむいた。

「なら、一緒に行こうよ」

レオはそう言って右手を差し出した。

「……」

オデューヌはその手をジツと見つめる。

そして、目をつぶり、大きく息をつく……。

「後ろ盾は……、シアンとドラゴン……ってことよね？」

「そう、世界最強だよ」

「軍事はOKってことよね？ 経済は？」

オデューヌが聞くと、シアンは手をフニフニを動かした。

ドシャァー！ と大量の金貨がテーブルの上に落ちてきて、シアンはドヤ顔でオデュー

ヌを見る。

オデューヌは言葉を失い、ただ、金貨の山を見つめていた。

「それに……、申し訳ないんだけど、もうオデューヌも関係者なんだ」

レオはオズオズと切り出した。

「え？」

「この国づくりが失敗するとこの国もこの星も消えちゃうんだ」

「へっ!？」

啞然とするオデューヌ。

「ゴメンね。でも、奴隷や貧困を放置していたのはみんなの責任だから、みんなの問題か

なつて思うんだ」

「消えちやうつて、誰が消すの?」

レオは申し訳なきように、ケーキをパクついているシアンを指さす。

オデューヌは大きく目を見開いてシアンを見て……、そして、ガツクリとうなだれた。「ゴメンね。だからオデューヌにも協力して欲しいんだ。そしたら成功できる気がするんだ」

レオはゆつくりと丁寧に言った。

オデューヌは大きく息をつき……、そして、いきなり両手でテーブルをバン！ と叩いた。

そして、レオをキツとにらんで言った。

「いいわ！ 今日、シアンには助けられたし、貧困を放置してたのは確かに王族の問題だわ。やるわよ。何やったらいいの?」

「ありがとう!」

レオはもう一度右手を出し、オデューヌは一瞬苦笑して、そして、レオの目をしっかりと見ながらガツシリとその手を握った。

シアンはケーキを口いっぱいほお張つて、モグモグとさせながら二人の握手をうれしそうに見ていた。

1—14. 騎士こん棒

「オデイーヌは何が得意？」

「そうね……。国際情勢や外交の情報持つてるし、本もたくさん読んできたわよ」

「それは頼もしいなあ。お金の仕組みも分かる？」

「経済学ね、ちゃんと勉強したわよ！ 銀行に証券に信用創造……」

「うわあ、それはすごいね。シアン、どうかな？」

ケーキをパクついていたシアンは、

「うん、外交と財務担当かな？ 王様にはどう説明する？」

そう言つてオデイーヌを見る。

「うーん、こういうのはどうかしら？ ドラゴンの領地に我が国ニージーを代表して研

修に行くつて形にするの」

「なるほど、研修ね。いいかも」

「じゃあ、財務大臣と外務大臣はオデイーヌね。よろしく！」

レオはうれしそうに言った。



ドタドタドタと、廊下の方から足音が響いてきた。

レオとオディーヌは顔を見合わせて不安な表情を浮かべる。

バーンとドアが開き、王子が戻ってきた。今度は騎士団一行を連れてやってきたのだ。

「王族を侮辱する魔女め！ ニーザリ最高の剣士を連れて来た。成敗してやる！」

ドヤ顔の王子。

シアンはそんな言葉を無視し、ひたすらケーキを楽しんでいる。

王子は、隣の鎧を着こんだアラフォーの剣士とアイコンタクトを取ると、剣士が前に出てきた。

「お嬢さん、お手合わせをお願いします……」

シアンはチラッと剣士の方を見て、

「ふうん、勝負するんだ？」

そう言うと、立ち上がり、フォークで刺したケーキをパクツと食べ、ニヤツと笑って見せた。そして、フォークを指先でクルクルつと回し、

「どこからでもどうぞ」

そう言つてうれしそうに笑った。

「お嬢さん……、剣は？」

劍士は怪訝けげんそうに聞いてくる。

「僕はこれで十分」

そう言つてフォークを指先でピン！ と弾き、空中をクルクルと回転させると親指と人差し指でつまみ、劍士に向けた。

劍士はバカにされたとムツとし、劍をスラつと抜いて構える。

ニコニコしてフォークを構えるシアン、全身に気合みなぎを漲らせ中段に構える劍士……。部屋中に緊迫した空気が満ちる。

劍士は細かく劍をゆらし、タイミングを計る。シアンはそれに合わせて指先で持ったフォークをまるで指揮者のようにゆらす……。

レオもオディーヌも手に汗を握つて推移を見守つた。

すると、劍士は脂汗をたらたらと流し始める。

「どうした！ 何やつてる！」

王子が喚く。

「くっ！」

劍士がそう言いながら軽くステップを踏み始める。

シアンはフォークを振りながら、ニコニコとうれしそうにそれを見ていた。

しかし、劍士は斬り込む事が出来なかつた。シアンのフォークの動きが劍士の劍の動

きに完全にシンクロしていたのだ。フェイクを入れてもフェイントを入れても遅れることなくついてくる……。

人間は腕を動かそうと思ってから筋肉が反応するまで百分の五秒かかる。動きを見て、判断して、合わせようと思つたらもつと遅れる。にもかかわらず、全く遅れることなく完全にシンクロしている。シアンが剣士の動きを事前に読んでいるとしか思えなかつた。そして、そんなことができるとしたら……それはもはや人間ではないし、とても勝てるような相手じゃないのだ。

やがて剣士は汗びっしりになり、剣を下ろし、頭を下げて言った。
「参りました……」

シアンはそれを聞くとうれしそうにうなずいた。

「おい！ お前！ ふざけんよ！ 何もやってないじゃないか！」

王子は剣士を叱責する。

「彼女は私の動きをすべて見切っています。とても人間技には思えません。少なくとも人では勝てません」

剣士はそう言うとうなだれた。

「もういい！ お前ら一斉に斬りかかれ！」

王子は周りの騎士に命令した。

レオとオディーヌは真つ青になって逃げ、五、六人の鎧をまとつた騎士たちは一気にシアンに斬りかかる。

シアンはニヤツと笑い、先頭の騎士の足元に素早く滑り込んで斬撃をかわすと、足首をガシツと持つて持ち上げる。

「うわあー！」

喚く騎士。

あまりにも異様な出来事に騎士たちの動きが止まる。すると、シアンはつかんだ騎士をまるでこん棒のように振り回した。

「ぐわあー！」「ひい！」「やめろおおー！」

阿鼻叫喚となる室内。

ブウンと振り回され打ち付けてくる騎士に、後続の騎士たちはかわす間もなく打ち倒されていった。

1—15. ドラゴン大暴れ

「きやははははー！」

シアンはうれしそうに笑いながら、騎士をブンブンと振り回し王子に迫った。

「ひいー！」

真つ青になってしやがみこむ王子だったが、あえなく騎士をぶち当てられて、

「うぎやあー！」

と喚きながらゴロゴロと転がった。

シアンはそれを見ると満足げに騎士をポーンと放り投げた。そして、腰に手を置き、

ドヤ顔で

「悪い子にはお仕置き！ きやははははー！」

と、満足そうに笑った。

しかし、シアンは振り返り、滅茶苦茶になったテーブルの上を見て蒼ざめる。

ケーキは騎士を振り回した時に全部吹き飛ばされてしまっていたのだ。

「やつちやった……」

と言うとシアンは、唾然とした表情で固まる。そして、

「あ、ああ……」

と声にならない声を出しながらひぎからガツクリと崩れた。



「これは何事だ！」

いきなり入ってきた男が叫んだ。男は金をあしらった豪華な服をまとつて威厳のあ
る表情で睥睨した。

オデューヌは駆け寄って、

「お、お父様！　これには訳が……」

そう言った。その男は王様であつた。

剣士も王様に近づいてひざまずいて言った。

「若様を諫められませんでした。申し訳ございません」

事情を聞いた王様は、部屋の隅で痛そうにしてうずくまっている王子に声をかけた。

「お前が仕掛けてやられたのか？」

「だ、だって、あの女無礼なんでもん……」

王様は深く息をついて首を振ると、おつきの部下に対処を指示し、シアンの所へ行つ
た。

「愚息がご迷惑をおかけしたようで申し訳ない」

そう言つて王様はシアンに頭を下げた。

「僕もケーキダメにしちやつた。ごめんなさい」

シアンもしよんぼりして謝つた。

「ケーキなら新しいのを用意させよう。ちよつと話を聞かせてもらえないか？」

「え？ いいの？ ありがとう！」

シアンはうれしそうに答えた。



レオ達は別の応接室に案内され王様とのお茶会となつた。

「君たちはドラゴンの所へ行くんだつて？」

王様が聞いてくる。

「はい、シアンが案内してくれるんです」

レオが答える。

「ドラゴンはなかなか我々の前には姿を現してくれない。なぜ、君たちは会えるのかな？」

王様は鋭い視線を投げかけてくる。

シアンは、ケーキを美味しそうに食べながら言う。

「ドラゴンは僕の友達なんだ」

「友達……。君は何者なのかね？」

「僕はシアンだよ！ きやはははは！」

うれしそうに笑うシアン。

「お友達なら、呼んだら来てもらおうこともできるかね？」

「いいよ！ 今、呼ぼうか？」

シアンはケーキを頬張りながら言った。

「えっ？ それはぜひ！」

王様は興奮ぎみに言う。

「でも……。この部屋に呼んだら建物壊れちゃうね……」

そう言つてシアンは部屋を見回した。

「中庭ならどうかかな？」

王様は窓の外を指さした。

「うんうん、じゃあ、呼んでみよう！」

シアンはそう言つて立ち上がつて、フオークを掲げた。



中庭へ移動すると、そこには赤白ピンクのバラが咲き乱れた庭園があり、真ん中には東屋あずまやが建つていた。すでに陽は傾き始め、長い影が伸びている。

シアンは目をつぶって何かをぶつぶつとつぶやき、両手を顔の高さでフニフニと動かす。そして、

「レヴィア！ カモーン！」

と、叫んだ。

すると、ボン！ と、爆発が起こり中庭を煙が覆う。やがて煙が晴れていくと、上空に巨大な黒い影が現れた。

それは厳ついウロコに覆われた巨大な恐竜のような生き物で、背中には大きな羽が生え、手には巨大な鋭い爪が光っている。

ドラゴンは辺りを見回すと、

「誰じやいきなり！ 失礼極まりないわ——！」

と、叫ぶと、口から真紅の豪炎を噴き出した。

「うわあー！」「キャ——！」

悲鳴が上がり、美しかったバラ園はあっという間に炎に包まれる。

「た、たすけて——！」」「逃げろお！」

王宮は阿鼻叫喚の地獄絵図となった。

ドラゴンは怒り狂い、グギャアアア！ と、身体の底に響く激しい重低音で咆哮ほうこうを放った。

バラ園は焼け野原となり、東屋も焼け落ちていく。

「痴れものが——！」

ドラゴンは王宮中に響く恐ろしい声で叫ぶ。

王宮中は大騒ぎとなった。

1—16. 金髪のドラゴン

すると、シアンが前に出て、

「やあ、レヴィア、久しぶり。元気そうだね」

と、ニコニコしながらドラゴンに声をかけた。

「ぬっ！」

レヴィアと呼ばれたドラゴンは、シアンを見つめる。

「僕だよ」

シアンはにこやかに言う。

するとレヴィアは急に恐縮した声で、

「こ、これはシアン様！ お呼びになられたのはシアン様でしたか！ これは大変に失

礼をいたしました……」

そう言つて目をつぶり、急いで頭を下げた。

「うんうん、ゴメンね、急に呼んじやつてね」

「いえいえ、いつでもどこでも呼んでくださって構いません！ 光栄です！」

レヴィアは必死に答える。

「この王様がね、レヴィアに会いたいんだって」

そう言ってシアンは王様を紹介した。

王様は恐る恐る前に出て、

「ここ、ニーザリの王をやっている者です。ドラゴン様にお会いできて光栄です」
そう言ってうやうやしく頭を下げた。

「あ、ああ……。そう、王様……」

レヴィアはちよつと事情がのみ込めない様子だった。

「実は王家の守り神としてドラゴン様に後ろ盾になって欲しくてですね……」

王様は必死に営業する。

「あー、悪いが、我はどこかの国に肩入れする事はできんのじやよ」

レヴィアはそう言って首を振る。

「そ、そうですか……」

残念がる王様。

すると、オディーヌが駆け寄って言う。

「初めまして、私はこの国の王女です。私とお友達になって下さらないかしら？」
「と、友達？」

レヴィアは困惑する。

するとシアンはニコニコしながら言った。

「あ、それいいね！ そうしよう！ レヴィアとオディーヌは友達！ 王様、いいでしょ？」

「わ、私はそれは喜ばしいことだと……思います」

意図をつかみかねる王様は首を傾げつつ言った。

「で、お友達の方に研修に行くっていうのもいいよね？」

シアンは畳みかける。

「け、研修!?」「へっ!?!」

王様とレヴィアは同時に驚く。

「そう、私、ニーザリ王国を代表してレヴィア様の所で研修したいんです！ いいでしよ、お父様！」

オディーヌはここぞとばかりに王様にプッシュした。

「え？ お前、行きたいのか？」

驚く王様。

「ぜひ、お許してください！」

オディーヌは王様の手を取ってせがんだ。

「お、お前が行きたいなら……、いいが……」

「ありがとう！ お父様！」

そう言ってオディーヌは王様の頬にキスをした。

レヴィアはシアンに小声で聞く。

「研修って、何をすればよろしいのでしょうか？」

「大丈夫、大丈夫。僕も付いて行くからね」

「えっ!? シアン様も!？」

レヴィアの厳ついウロココの額に冷や汗が見えるようだった。

「ちよつと作戦練るからさ、君も人型になつてよ」

シアンがそう言うのと、

「わかりました……」

そう言つて、ボン！ という破裂音と共に女子中学生のような金髪おかつぱの女の子

が現れた。サリーのようなアイボリーの布を身にまとつた彼女は、

「よ、よろしくなのじゃ」

と、可愛い声で照れながら言つた。

みんなそのあまりの容姿の変わりように絶句する。

「ね、可愛いでしょっ？」

シアンはそう言つてレオにウイंकをした。

「なんだかギャップがすごいね……」

レオは困惑しながらそう言った。

「じゃあ、レヴィア！ 作戦会議やるから酒でも飲めるところ行こうよ！」

シアンはニコニコしながらレヴィアに言う。

「え？ どこ行くんですか？」

金髪おかつぱの女の子はビビりながら聞く。

「僕この星知らないからさ、レヴィアの行きつけの店行こうよ！」

「えっ？ 行きつけ……ですか……？」

「何？ 何か困るの？」

シアンが顔はにこやかなまま鋭い視線でにらむ。

「あ、いやいや、行きましよう！ 王都にいい店があるんです！」

「じゃ、ヨロシク！」

シアンはそう言ってレヴィアの背中をバンバンと叩いた。

レヴィアは苦笑いを浮かべながら、指先を空中でシュツと一直線に動かす。すると、空間の裂け目ができ、レヴィアはそれを両手で広げた。そこには別の街の風景が展開している……。

2—1. 十六歳の旅立ち

「えっ!? 何これすごい!」

レオが驚きの声を上げる。

「向こうは王都じゃ、通つてごらん」

レヴィアは優しく言う。

レオはオデイーヌに声をかける。

「本当にいく? やめるなら今だよ」

「うふふつ、いきなりこんな魔法すごいわ! これよ! こういうチャンスを私は待つ

ていたのよ!」

オデイーヌは興奮してそう言うのとレオの手を取った。しかし、その手はかすかに震え

ていて、レオは心配そうにオデイーヌを見た。

オデイーヌは王様に向かって、

「お父様、それでは行ってきます。詳細が決まったらお手紙書くわね」

「えっ!? もう行っちゃうのか? 準備は?」

王様はオロオロして言う。

「お父様、チャンスの女神には前髪しかないのよ。来た瞬間につかめなかつたら二度とつかめないわ!」

オデイーヌは自分に言い聞かせるようにそう言って、レオの手を引いて一番に裂け目をくぐって行つた。

それは十六歳のオデイーヌにとって、生まれて初めて自ら選び取つた未来であり、親の庇護ひごを離れる親離れであつた。

「ああ……、オデイーヌ……」

うろたえる王様にシアンは、

「大丈夫、僕が見ておくからさ」

そう言つてニツコリと笑う。

レヴィアは、

「シアン様が大丈夫と言つたら、なんでも大丈夫じゃ。たとえ死んでも生き返るくらい大丈夫じゃ」

そう言つて王様の背中をパンパンと叩く。

王様はうなだれてゆっくりと首を振つた。



四人で王都の街を歩き、にぎやかなレストランまでやつてきた。

「シ、シアン様、ここではないかがですか？」

レヴィアは緊張しながら言う。

「ちゃんと美味しいんだろぅね？」

シアンは微笑みをたたえたまま目を光らせて聞いた。

「お、王都ではここが一番かと……」

レヴィアは冷や汗をかきながらそう言うと、テラス席に陣取ってみんなを座らせる。
そして、

「おかみさーん！」

と、店の中に声をかけた。

すると、小太りのおばさんが伝票を片手に出てきて、

「おや、レヴィちゃん、人連れてくるなんて珍しいねえ、お友達かい？」

そう言ってみんなを見回した。

「何？ レヴィアいつもボツチなの？ プククク……」

そう言つてシアンは冷やかした。

「だから嫌だつたんですよお……」

ガツクリとするレヴィア。

「レヴィちゃんお友達紹介してよお」

おかみさんはうれしそうにせっつく。

「このお方は我の上司？ シアン様、そして子供二人は……誰だっけ？」

レヴィアは説明に詰まる。するとシアンがレオを指し、

「彼が王様で、彼女が外務大臣、僕が防衛大臣で、レヴィが國務大臣だよ」と、うれしそうに言った。

「うわあ、楽しそうねえ」

おかみさんはそう言つて笑顔を見せた。



ほどなくして飲み物が出てきたが、レヴィアにだけ酒樽さかだるがどんと置かれた。

「ちよつと何？ それ？」

シアンが真顔で突つ込む。

「あ、我はいつもこれなんです……」

レヴィアは小さくなりながら言う。

「これから大事な話するの！ その樽は僕によこしなさい！」

シアンはそう言つて酒樽を奪つてパーン！ と上のフタを割つた。

「それでは、素晴らしい出会いにカンパリー！」

シアンはそう言うのと、うれしそうに酒樽をゴツゴツとみんなの木製のジョッキにぶつ

けた。

そして、酒樽を持ち上げると、傾けながらゴクゴクとエールを飲み始める。

みんながじーつと見つめる中、どんどんと樽を傾けていき……、あつという間に全部飲み干してしまった。

「クーッ！ 美味しい！」

目をぎゅつとつぶりながら言い放つシアン。そして、

「おかみさーん！ 樽をおかわりー！」

と、叫んだ。

みんなはお互いの顔を見合わせて、困惑の表情を浮かべる。

「あのお、大事な話というのは？」

レヴィアが恐る恐る聞く。

「え？ 何だっけ？ レオ、ちよつと説明して！」

すっかり赤ら顔になったシアンは、うれしそうにレオに振った。

2—2. 欲望の生き物

レオはいきなり振られ、せき込んだが、丁寧に話し始めた。

「えーとですね、僕たちで新しい国を作ろうと思うんです」

「さっきの何とか大臣とかの話か？」

レヴィアは眉間にしわを寄せて聞く。

「そうです、そうです。奴隷や貧困のない自由な国をですね、作りたいんです。それで、どこに作ったらいいかレヴィア様にお伺いしたいんです」

「自由な国？ そりやまた難易度の高い話じゃのう……。お主、その難しさを分かっているか？」

「僕には分かりません。だから、分かる人に教えてもらいたいんです。レヴィア様、ぜひ、教えてください！」

レオはそう言つてまっすぐにレヴィアを見た。

レヴィアはどう答えていいかちよつと悩む。するとシアンが、
「国づくりに失敗したら、この星消す契約になつてるんだ」

と、嬉しそうに言つた。

「えっ!? ちょっと!? マジですか!?!」

レヴィアはびっくりして立ち上がる。

「マジもマジ、大マジよ! ね、レオ?」

そう言つて赤い顔でにこやかにレオを見るシアン。

「はい、そういうお話になってます」

レオはニコニコして言った。

「いや、ちよつと……、ええっ!?!」

レヴィアは困惑して頭を抱える。そして、レオを見ると、

「お主……、やってくれたな……」

そう言いながらガツクリと崩れ落ちた。

「いいじゃん、手伝つてやんなよ!」

やや絡み酒となつてシアンが叫ぶ。

「は、はい……。消されたら……困ります……」

レヴィアは目をつぶつたまま、そうつぶやいた。

「それに、レヴィアにも手伝つてやる理由あるんだよ」

そう言つてシアンはジト目でレヴィアを見た。

「へ?」

レヴィアは改めてレオをジツと見て、少し驚くと、目を閉じて大きく息をつき、ゆっくりとうなずいた。

「なんで自由な国は難易度高いんですか？」

レオは改めてレヴィアに聞く。

レヴィアはうんうんとうなずくと、丁寧に説明を始めた。

「人間は欲望の生き物じゃ。国は国民の欲望が生み出すエネルギーを使つて産業を起し、社会を回し、欲望に合わせた社会制度を整備し、人々をまとめ上げるのじゃ。そして、欲望ベースじゃから権力の勾配や富の勾配が前提として社会に組み込まれる。それは根源的に奴隷や貧困を生む構造となつておる。つまり、奴隷や貧困のないエコシステムを作るには欲望ではない別の力学を用いて、平等の概念を国民全員が持ちながら社会を回さねばならん。これには国民全員の高度な教育が大前提じゃ。さらに、権力者からの富の分離など、ありとあらゆる工夫が必要なのじゃ」

レヴィアは肩をすくめる。

「そういう社会を実現した例はあるんですか？」

オデイーヌは身を乗り出して聞いてくる。

「この星には無い。じゃが、別の星で実現した例はある。ただ……、それでもなかなか貧困はゼロにはできんのじゃ。これは人の業じゃな」

レヴィアはそう言つて首を振る。

「じゃあ、僕たちが実現しようよ！」

レオはうれしそうに言う。

「いや、お主、聞いたつたか？ と——つても難しいんじゃないぞ？」

「でも、不可能じゃないよね？」

レオはニコニコして言う。

レヴィアは目をつぶつて動かなくなった。

「はい、おかわりよー」

おかみさんが二つ目の樽を持ってきて、シアンの前にドスンと置いた。

「キタ——ッ！」

シアンはうれしそうにそう言うのと、また上のフタをパーン！ と割つた。

そして、レヴィアを見ながら、

「レヴィアさー、もつと前向きに手伝つた方がいいと思うよ。この星消えちゃうよ？」

そう言つて、また樽を持ち上げると傾けて飲み始めた。

レヴィアは片目をそつと開けて、ゴクゴクとおいしそうにエールを飲むシアンを見つ

め、

「おかみさん！ 我にも樽じゃ——！」

と、
叫んだ。

2—3. 王都解放戦線

すつかり酔って、調子に乗ってきたレヴィアは、肉に豪快にかぶりつきながらレオに聞いた。

「で、人口は何人にするんじや？」

「えっ？ ニーザリと同じくらい……かな？」

そう言つてオデイーヌをチラツと見た。

「ニーザリは登録市民が約七万三千人です。奴隷や未登録者を入れると十万人くらいかと……」

オデイーヌは丁寧に説明する。

「ほほう、お主、凄いな。確かにあんなところで王女にしておくのはもったいないのう」

そう言つてレヴィアはニヤツと笑つた。

「十万人なら……、そうじゃな、ワシの家の東側の山地をならして平地にしたら入るじやろう」

「それ、どこ？」

すつかり酔っぱらつて眠そうなシアンが聞いてくる。

「ここから南西に五百キロくらいのこと……」

「あー、宮崎ね」

そう言つてシアンはあくびをした。

「ミヤザキ……、ですか？」

オデイーヌは怪訝けげんそうな顔をして聞く。

「あー、シアン様の星ではそう呼ぶんじゃないよ」

「台風がたくさん来るけど暖かくていい所だよ」

シアンが横から言う。

「た、台風……。大丈夫なの？」

レオは不安げに聞いた。

「ワハハ、単に風が強いただけじゃ。すぐに慣れる」

「はあ……。でそのミヤザキの山をならす……。つてことですか？」

「そうじゃ、十キロ四方程度をならして、出た土砂で海に人工島を作る」

「え!? そんなことできるんですか!？」

「このくらいシアン様なら一瞬じゃよ」

「レヴィア、よろしく」

シアンは眠そうに、うつらうつらしながら言う。

「えっ？ シアン様も手伝ってくださいよお」
懇願するレヴィア。

「星消す方が簡単なんだよね……」

そう言つてシアンはあくびをした。

「……。わかりました……。とほほほ」

と、その時だった。いきなりシアンとレヴィアはカツと目を見開くと、それぞれ通りの方に素早く腕を掲げ、何かをつぶやいた。

金色の魔法陣が二つ、空中にブワツと展開され、その直後何かが通りで爆発する。耳をつんざく爆発音が街中に響き、辺りのものがごとごとく破壊されていった。いきなりやってきた地獄絵図に皆パニックに陥る。

「うわあー！」「キャ——！！」

さらに街灯の柱が倒れてきてレオ達のテーブルを真つ二つに割った。

「ひいー！」「うおお！」

料理もジョッキも樽も全部吹っ飛んでいく。

辺り一帯阿鼻叫喚の惨状に叩き落とされた。通りの方では多くの人が倒れている。

「レヴィアは救護、僕はぶちのめしてくる」

シアンはそう言うと、茜色がほのかに残る夕闇の空へツーツと飛び上がった。そし

て、目をつぶってジーっと何かを感じ取る。

風が吹き、舞い上がった爆煙がゆっくりと流れていった……。

「みーつけた！」

シアンはうれしそうにそう言うと、街外れの方向に両手を向け巨大な真紅の魔法陣を展開した。夜空にひとときわ禍々しく輝く魔法陣に、レオとオディー又は圧倒され戦慄を覚えた。

直後、魔法陣が閃光を放って夜空をまばゆく照らし、青白い激烈な光線が魔法陣から一直線にほとばしった。そして、遠くの空がまるで巨大な雷が落ちたように激しく光り輝く。

「きゃはははー！」

一帯にシアンの笑い声が響いた。

レオとオディー又はまるで戦場に来たような恐るべき力の行使に言葉を失っていた。しかし、周囲の人はその様子に気が付かない様だった。何らかの認識障害をかけているのだろうか。

ズン！

激しい爆発音が街全体に轟いた。

シアンは満足そうにうなずくと、辺りを飛び回って被害状況を見て回っていく。

「一体何があつたの？」

レオはオデイーヌに聞く。

「多分、テロリストによるテロだわ」

オデイーヌは、通りに倒れている多くの人たちを見て声を震わせながら言った。

「テロリスト？」

「王都では今、『王都解放戦線』というテロリストが暗躍しているって聞いたわ。王都の支配者層に対して反感を持っている人がこうやって無差別に市民を襲うのよ」

「一体何のために？」

「自分たちの主義主張が認められないことに怒りを覚えて、暴れて注目を集めたいんじゃないかしら？」

「そんな子供みたいなこと……」

「これが国というシステムの現実よ。私たちも国を作るということは、テロリストと対峙たいじしなくちゃならなくなる日も来るかもしれないわ」

オデイーヌは青い顔をして言った。

「そうか……。でも、やめないよ……」

レオはキュツと歯を食いしばり、通りの混乱をジツと見つめた。

2-4. レストインピース

レヴィアは通りに倒れている人たちを、手当たり次第に次々と治癒魔法で治していく。

「はい、お主はもう大丈夫じゃ!」

「すみません!。うちの人もお願いします!」

血だらけの婦人がレヴィアに頼み込む。

「いや、まず、お主からじゃろ」

そう言つてレヴィアは青白い顔をした夫人に手のひらを向け、何かをつぶやいた。すると、夫人は淡い光に包まれる。

「あ、ああ……」

恍惚こうこつとなる婦人……。やがて夫人の顔には色が戻ってくる。

「はい、で、旦那さんはどこ?」

「ここ、ここちです!」

すると、シアンがツーツと降りてきて、

「僕に任せて!」

そう言うと、両手を天にあげて街の上空に巨大な緑の魔法陣を描いた。

「へ？」

レヴィアは唾然^{あぜん}として空を見つめた。

直後、優しい金色の光が街中に降り注ぎ……辺り一帯の人たちはみんな光をまとい、輝きだした。

「な、なんだこりや!?!」「うわああ……」

ざわめく人々。

道端で倒れている人も光をまとい、やがてむつくりと起き上がり始める。

やがて、光はおさまり、魔法陣も薄くなつて消えていった。

「これでよし!」

シアンはニツコリと笑った。

「もしかして……全員治したんですか?」

「そうだよ?」

さも当たり前であるかのようにそう言うと、上機嫌でレオ達の方へ戻っていく。

レヴィアは、楽しそうに歩くシアンの後姿を見ながら圧倒され、軽く首を振った。

「キャ——!」

教会の方から叫び声が響いた。

レヴィアは不審に思って声の方へ行くと、シスターが血相を変えて飛び出して来る。「ど、どうしたんじゃ?」

レヴィアが聞くと、

「死者が動き出したんです! ゾンビです、ゾンビ!」

と、叫びながら逃げて行つた。

レヴィアが建物の中をのぞくと、棺の中の男がむつくりと起き上がって周りを見回している。

レヴィアは、

「アチャー……」

と、言つて

「レストインピース!」

と、唱え、動き出した死者を光に包む。

やがて死者は、満足そうな微笑みを浮かべながらまた棺へと横たわつた。

「ふう、シアン様の力はものすごいんじゃが……、雑で困るわい」

「どしたの? 何が雑?」

「ひいっ!」

いつの間にか後ろにシアンが居て、ビビるレヴィア。

「何かあった？」

「あ、いや、死者が生き返ってしまってます……」

「え？ 生き返らしちゃマズかったんだっけ？」

「事件の前に死んでた者はそのままにしておかないと……」

「そうなの？ レヴィアは細かいなあ！ きやははは！」

シアンはレヴィアの背中をパンパン叩きながら屈託のない顔で笑った。

「こ、細かい……、ですか……」

レヴィアはぐつとこらえて渋い顔をした。



レオとオディーヌはレストランの後かたづけをしていた。窓ガラスは全部バリバリに割れ、椅子やテーブルは割れたり転がったりしてメチャクチャだった。

シアンは戻ってくると、

「ありやりや」

と、言いながら被害の様子を一通り把握する。そして、割れた窓ガラスを枠から取り除き、枠の上に白い小さな円盤をぽつぽつと置いて行った。レオは何をしているのかと不思議そうにシアンを目で追う……。

一通り置き終わると、シアンは目を閉じて何かを唱えた。すると、白い円盤はオレン

ジ色に鈍く光りながら薄く大きく広がってあつという間に窓枠を覆い、後には綺麗な窓ガラスが残った。メチャクチャに壊れたお店も窓ガラスが直ったら、ずいぶんマトモに見えるようになった。

シアンはそれを見ると満足そうにうなずいて、おかみさんに、

「窓、直しておいたよ〜」

と、声をかけた。割れた窓ガラスの破片をホウキで集めていたおかみさんは、

「へっ!! あれ? 本当だ……」

と、あぜん啞然とする。

「それで、エールをね、樽で何個か欲しいんだけど。いくつももらえる?」

シアンはニコニコしながら聞いた。

「え? えーと、二つなら……」

「じゃあ、お会計ね」

シアンはそう言つて金貨を十枚おかみさんに渡した。

「へっ!! こんなにたくさん要らないよ!」

驚くおかみさん。

「余つた分は近所の人におごつてあげて」

そう言つてシアンは奥から樽を二つヒョイと持ち上げると、

「また来るね〜」

と言つて、外へと出て行く。

「あ、ありがとうねー！」

おかみさんは戸惑いながら声をかけた。

2—5. 静謐な神殿

レオは樽を持つて出てきたシアンを見ると、

「えっ？ まだ飲むの？」

と、あきれたように言った。

「二次会だよ二次会！」

そう、うれしそうに答えた。そして、戻ってくるレヴィアを見つけると、

「レヴィア！ お前んち行くぞ！」

と、声をかけた。

「へっ!? う、うちですか？」

「お前、いい所住んでるんだろ？ 招待しておくれ」

ニコニコしながらシアンは言った。

「う、うち、何もありませんよ？」

レヴィアは冷や汗をかき、両手のひらをブンブンと振りながら答えた。

「えーと、宮崎ね……」

シアンはレヴィアの言うことをスルーし、目をつぶって何かをやっている。

「あー、分かった、分かりました！　ちゃんとご招待します！」
レヴィアが焦って言う。

「え？　もう魔法陣展開しちゃったよ？」

「その魔法陣にうちの神殿耐えられないのでやめてください！」

レヴィアは泣きそうになりながらシアンに手を合わせる。

「え？　入り口作ろうと思ったただけなんだけど？」

「いや、その魔法陣だと山ごと吹き飛ばすので本当にやめてください」

そう言ってレヴィアは指先を空中でスツと動かして空間の裂け目を作ると、両手でグツと広げた。

「シアン様、どうぞ」

するとシアンは

「樽が入らないよ！」

そう言ってピンク色の大きな魔法陣をブワツと展開し、そのまま空間の裂け目を巨大な丸い穴としてぶち抜いた。そして、レオ達の方を見て、

「はい、二次会に行くよ〜！」

と言いながら穴を通って行った。レオ達もシアンに続いて行く。

レヴィアは、

「これ……、どうやって閉じるのかのう……」

と、不思議そうにポツカリと開いた穴を不思議そうに眺めた。



穴の向こうは神殿だった。鍾乳洞のような巨大な地下の空間に作られた神殿は、純白でグレーの筋が優美に走る大理石で全面埋め尽くされており、静謐せいひつで神聖な雰囲気ふんぎに満ちていた。周囲には幻獣をかたどった大理石の像が配され、ランプの揺れる炎が陰影を浮かび上がらせている。

「うわあ！ すごくおい！」

レオがそう言つて感激していると、オデューヌは

「ねえ、あつちの方に明かりが見えるわ！」

そう言つてレオの手を引つ張つて行つた。

神殿の出口の先は洞窟どうくつになっていて、少し行くと茜色の夕焼け空が見えてきた。外に繋がっていたのだ。しかし、洞窟の出口は断崖絶壁となっていて、下には湯気ゆけを上げる火口湖かこうこがあり、ほのかに硫黄の匂においがする。神殿は火山の火口の脇わきに作られていたのだつた。

茜色から群青色ぐんせいしょくにグラデーションを描く空には宵の明星せいせいが明るく光り、静かな夜の訪れを彩つていた。

オデイーヌは瞳に夕焼け空を映しながら言った。

「ねえ、国づくりが失敗したらこの星が消されるって本当……なの？」

「うん、勝手に決めちゃってごめんね」

「それって、私もみんなも全員死んじゃう……ってことだよな？」

「そうなると思う」

「責任重大だわね……」

オデイーヌは天を仰いで大きく息を吐く。

「ゴメンね。でも、逆にだからこそうまくいくと思ってるんだ」

「え？」

「だって、この星の人全員が協力せざるを得なくなつたんだよ？」

レオはそう言つてニヤツと笑う。

「そ、そうなるわ……ね」

「レヴィア様も本気にならざるを得なくなつたもん」

「確かに……」

「そして、『貧困のない世界』にして困る人なんて誰もいないはずだよな？」

「お金持ちは困るかも？」

「それは困ってもらつていいんじゃない？」

レオはニコニコしながら言った。

オデューヌはちよつと複雑な表情をしながら、

「王族としてはそこはあまり肯定したくないけど……、でも、父も、貴族のみんなもあまり幸せそうじゃないのよね……。あんなに財宝持つてるのに」

「え？ あんなに毎日ぜいたくしてるのに？」

「ぜいたくなんてすぐに慣れちゃうのよ。しきたりにマナーに権力争い……、みんなウンザリしているわ」

「もつと格差をなくした方がいい、つてことじゃないかな？」

「本当はそうだわ。でも、一度得たものを失う恐怖は強烈なの。貴族は私たちの挑戦を全力で反対するでしょうね……」

「でも、失敗したら滅ぼされちゃうから、協力せざるを得ないんじゃないかな？」

「んー、総論としてはそうなんだけどね、ずるがしこいのよ？ 奴らは」

「うーん、その辺は外務大臣にお願い……させて」

「ふう、まあ、仕方ない……わよね……」

「僕はね、お金も権力も要らないんだ。ただ、みんなに笑顔でいて欲しいだけなんだ」

レオはまつすぐな瞳でオデューヌを見た。

「みんなが笑顔……。確かにそうね。レオが言うことは正しいわ。後はそれをどう実現

するか……ね」

「多分、世界には頭いい人いっぱいいるんだから、そういう人たちの知恵を集めたら何とかなるよ」

レオはそう言つて屈託のない顔で笑つた。

「……、そうね」

オデューヌは静かにそう答えた。

2—6. 国一番のウイスキー

「二次会だよ」

シアンが呼びに来る。

神殿の真ん中に大きなテーブルが広げられ、エールの樽が並べられている。そして、どこから出したのか、おいしそうな料理が並んでた。

レオとオデューヌはジュースのジョッキ、シアンとレヴィアは樽を持った。

「おバカさんたちに邪魔されたんで飲み直し！ カンパーイ！」

シアンがそう言つて樽を持ち上げる。

「カンパーイ！」「カンパーイ！」「カンパーイ！」

シアンもレヴィアも景気よく樽を傾けながらエールをゴクゴクと飲んだ。

「ねえ、飲んだお酒はどこへ行くんだらうね？」

レオは小声でオデューヌに聞く。あんなに飲んだらお腹が膨れそうなのに、見た目は全然変わらなかつたのだ。

「二人のやる事を常識で考えちゃダメよ」

オデューヌは何だか嬉しそうに言った。

「プハ——！ 美味いっ！」

シアンは一気に樽を空けると、目をギョツとつぶってうれしそうに言った。

「シアン様、ペース早すぎですよ……」

レヴィアはまだ半分くらい残った樽をドンとテーブルに置いた。

「次はウイスキーにするか！」

シアンは頬を赤く染めて上機嫌で言った。

「え？ それはウイスキーを出せってことですか？」

「レヴィちゃんなら美味しいの持つてるでしょ？」

シアンはうれしそうに言う。

レヴィアは目をつぶってうなだれ、しばらく逡巡逡巡した後、吹っ切れたように言った。

「分かりました！ 出しましょう！ 三十年物！ 我の秘蔵のウイスキーを！！」

「うんうん、いいね！」

そして、レヴィアは空中に切れ目を入れると、そこからウイスキーのピンを慎重に取り出した。

「キタ——！！」

盛り上がるシアンはピンを受け取ると、まじまじとラベルを読む。

「今、水と氷を用意しますからね……」

そう言ってレヴィアは水割りセットをかいがいしく用意する。

しかし、シアンはそんなレヴィアをしり目に、ゴクゴクとそのままラツパ飲みをしてしまう……。

「へ!？」

レヴィアが気が付いた時はもうほとんど飲みつくされてしまっていた。

「プハ——!—— 最高!——」

シアンは飲み干して言った。

それを見たレヴィアは、

「あ……ああ……」

と声にならない言葉を発して動かなくなった。

「あー!—— 美味かった!——」

シアンはそんなレヴィアを気にもせずうれしそうに笑う。

「わ、私も……、飲みたかったのに……」

レヴィアはガツクリとうなだれる。

シアンはちよつと焦って言った。

「え? あ、ゴメンね。今コピー出すからさ……」

「コピーじゃダメなんです! オリジナルが一番美味しいんです! うわあああん!——」

そう言つてレヴィアはテーブルに突つ伏した。

「ゴ、ゴメンよお」

青くなるシアン。

「もう知りません!」

レヴィアはテーブルに突つ伏したまま、動かなくなつてしまった。

シアンは気まずそうな顔をしてレオとオデイーヌを見る。

オデイーヌは、シアンと目を合わすと、

「王宮にはもつといいウイスキーあつたと思ひますよ。用意しましょうか?」

と、レヴィアに声をかける。

すると、レヴィアはガバつと起き上がり、

「いいのか!」

と、うれしそうに聞いた。

「ええ、一本くらいなら……」

「よしそれだ! 取つてきて!」

そう言つてレヴィアは空中を指で切り裂くと両手で広げた。切れ目の向こうは王宮だった。

「じゃあ、ちよつと行つてきます」

オデイーヌはそう言つて切れ目をくぐり、タツタツタと小走りに駆けて行つた。

「王宮じゃからな、国一番のウイスキーがあるはずじゃぞ！」

ワクワクしながらレヴィアはオデイーヌの帰りを待つ。

ほどなくして、オデイーヌはビンを一本大切そうに持つて戻つてきた。

「これでいいですか？ お酒の事良く分からなくて……」

レヴィアはビンを受け取るとラベルをジツと見る……。

「おお、これは！ 四十五年物じゃな！」

そう言つてうれしそうに笑つた。

「レヴィア、僕にも〜」

シアンはニコニコしながら言う。

レヴィアは渋い顔をして、

「半分ずつにしましょう」

と、シアンをジト目で見た。

「分かつたよ！」

シアンはうれしそうに笑う。

2—7. 渋谷スクランブル

レヴィアはジョッキに半分ずつ丁寧に分けるとシアンに渡し、

「それじゃ、改めてカンパーイ！」

と、声を上げた。

「カンパーイ！」「カンパーイ！」「カンパーイ！」

みんなでジョッキをぶつける。

そして、レヴィアもシアンもゴクゴクとウイスキーを飲んだ。

「ねえ、ウイスキーってこうやって飲むものなの？」

レオは小声でオデューヌに聞く。あんな強いお酒をジョッキで飲む人など初めて見たのだ。

「違うと思うんだけど……、二人のやる事を常識で考えちゃダメよ」

オデューヌは嬉しそうに二人を見つめながら言った。

「プハ——！ 美味いっ！ 最高じゃ！」

レヴィアは恍惚とした表情で言った。

「こっちの方が美味しい！」

シアンも嬉しそうに言う。

「やはり王宮の酒は違うのう！」

レヴィアはオディーヌを見てうれしそうに言った。

「お世話になるので、このくらいはやらせていただきます」

オディーヌは丁寧^{マツリ}に答えた。そして、続ける。

「それですね、一つお願いが……」

「ん？ なんじゃ？ 何でも聞いてやるぞ」

レヴィアは上機嫌に言う。

「さつき、『貧困のない国がある』っておっしゃってたじゃないですか」

「ああ、まあ、完ぺきではないがな」

「そこに視察に行きたいんです！」

オディーヌは身を乗り出して言った。

「へ!? 行きたいのか？」

「目標を明確にするうえですごい参考になると思うんです」

「いや、それは……管理^{セントラル}局が……」

と、レヴィアが難色を示していると、シアンが言った。

「いいよ！ 今すぐ行くこう！」

「えっ！ シアン様、そ、そんなの管理局セントラルの許可が下りませんよ！」

「レヴィア、管理局と僕、どっちが強い？」

シアンはニヤツと笑って言う。

「そ、それはシアン様ですよ。シアン様に勝てる者などこの宇宙にはいないのですから……」

「ならいいじゃない、行くよ！」

「えっ、報告書誰が書くと思ってるんですかあ？」

レヴィアは泣きそうになって言った。

「王宮のウイスキー飲んだろ？ 美味しかったろ？」

「いや、それとこれとは……」

「さあ！ レッツゴー！」

シアンはそう言ってうれしそうにジョッキを高く掲げた。

次の瞬間、四人は夜の渋谷のスクランブル交差点に居た。四方八方から押し寄せる群衆、そして目の前に展開される煌びやかな巨大動画スクリーン。レオもオディーヌも何が起こったのか全く分からず、雑踏の中呆然ぼうぜんと立ち尽くした。

やがて信号が赤になって人がはけていき……、車がパツパー！とクラクションを鳴らした。

「危ないよ、早くこっちー！」

シアンが二人を引つ張つて歩道に上げる。

「な、何ですかこれ!？」

オディーヌは初めて見る東京の風景に驚きを隠せずにした。

「ここは日本、貧困のない国だよ」

シアンはうれしそうに言った。

ガガガガガガガ！

鉄橋の上を山手線が走り、続いて逆方向から成田エクスプレスが高速で通過していく。

「うわあー！」

レオは目を真ん丸にして後ずさりする。

「人がたくさん乗ってるわ……」

オディーヌはビックリして言う。

すると、二階建ての巨大な観光バスが優雅に交差点を曲がっていく。

「何なの？ ここは……」

二人は身を寄せ合つて辺りをキョロキョロした。

「お、君可愛いね、ちよつとお茶でも飲もうよ」

ちやらいカッコした若い男がオデイナーに声をかけてくる。

「ナンパは間に合つとる！」

レヴィアは男をにらみつけて言った。

「何？ きみも可愛いけどちよつとまだ早いかな？」

「ぶ、無礼者が！」

レヴィアが手を上げると、シアンがそれをつかんで止めた。

「お兄さん、そこまで。これ以上ちよつかい出すとお仕置きだぞ！」

シアンはそう言つて男をにらみつけた。

「おお、君も可愛いねえ。どんなお仕置き？ 二人でゆつくり……」

男は懲りずにシアンを口説きだす。

シアンは何も言わず、素早く男の額にデコピンをかました。

「ぐわっ！」

男は吹き飛ばされて道路わきの植栽に埋まる。

そして、口から泡を吹いてガタガタと震えだした。

「はい、移動するよ！」

シアンはそう言つてレオとオデイナーの手を取つて、センター街の方へと進んで行った。

2—8. 電子決済

「あの人はどうなったの？」

「ちよつとお仕置きしただけ。しばらくしたら正気に戻ると思うよ。もう二度と声かけようと思わなくなつてゐるだろうけど。きやははは！」

そう言つてうれしそうに笑つた。

オデイーヌはすれ違う人のファッションに興味深そうに観察しながら、シアンの後をついて行く。太もものぞく短いスカートに厚底の靴だったり、極彩色のパーカーだったり、オデイーヌの目はキョロキョロとせわしく動く。一人一人素材も色も形もみんな違う服をまとつていて、綺麗だったり、カッコよかったり、難解だったり、服装を見ていっただけでオデイーヌは圧倒されていたのだ。

「これ食べよう！」

シアンは立ち止まり、道端のイチゴのスイーツショップを指さした。大きなイチゴがいくつも串に刺さり、飴でコーティングされてとても可愛い。

「あー、はい。お主らも食べるか？」

レヴィアはレオとオデイーヌに聞く。

二人とも遠慮がちにうなずいた。

「じゃ、四本おくれ！」

レヴィアはそう言ってイチゴ串を受け取った。そして、i P h o n e を機械にかざしてピピッと鳴らす。

「まいどあり〜」

オデイーヌはその様子を見て驚いて聞いた。

「えっ!? 今のでお金を払ったんですか?」

「そうじゃよ、電子決済」

そう言つてレヴィアはイチゴにかじりつき、

「おお、これは美味しいのう」

と、ペアツと明るい顔をした。

「もしかして、その道具の中にお金が入ってるんですか?」

「これはただの端末じゃ。お金のデータはサーバーと言つて遠い所の機械の中で管理されておる」

「それはつまり……、価値の創造……ですか?」

「お、良く分かつとるのう。現金にしちやつたら持ち主だけの所有物じゃが、サーバーに置いておけば保管者もその価値を間接的に利用できる。実質的に金の量が増えるん

「じゃ」

「すいご……」

「金融工学の一つじゃな。この国は銀行や証券や金融商品で高度に金の価値を何重にもふくらまし、現金の五十倍もの量のお金が社会を駆け巡って高度に繁栄したんじゃ」

「うわあ……。それ、国づくりには絶対必要ですね」

「ま、そうじゃろうな。後で教科書をあげよう」

「あ、ありがとうございます！ やっぱり来てよかった！」

オデイーヌはうれしそうに笑った。

「よし、展望台行くぞー！」

あつという間に食べ終えたシアンはそう言つて歩き出した。

「あー、ちよつと待つて！」

レオは急いでイチゴを頬張り、シアンを追いかける。

「あのお方はせっつかちじゃのう……。でもまあ展望台はいい選択かも知れんな」

そう言いながらレヴィアはオデイーヌと一緒に追いかけた。



ポーン！

高層ビルの四十五階にある展望台にエレベーターがいた。

ドヤドヤと他の客と一緒に降り、エスカレーターを上る一行。すると、ガラス窓の向こうに煌びやかな東京の夜景が広がっていた。

「すつ、すつ……」

レオもオデューヌも目を真ん丸くして見入った。

六本木ヒルズにオレンジ色にライトアップされた東京タワー、あちら側には新宿の高層ビル群、見渡す限りびっしりとビルで埋め尽くされ、宝石箱をひっくり返したような煌びやかな夜景が続いている。

「これが東京じゃよ。一千万人が住む巨大な都市じゃ」

レヴィアは二人の後ろから説明する。

「一千万人!？」

レオは驚いて振り返る。

「そうじゃ、ニーザリの百倍じゃな。ちなみにこの国全体では一億人以上じゃ」

「一億人……。もう想像できない量だね……」

「そんなに多いのに、一人一人はかけがえのない存在として人権を保障されて暮らしている。まあ、よくできた国じゃよ」

「王様は何してるの?」

「王様は……。あっちのほうに皇居というお城があつてな。そこに住んどるよ」

「やっぱり王様がこの国を治めているの?」

「それが違うんじゃない。王様はいるだけで実権はない」

「え!? じゃ、誰が治めているの?」

「国民が選んだ人たちが数年ごとに変わりながら治めているんじゃない」

「すごい! 理想だね!」

「じゃが……、それでも問題はまだまだ山積みみたいじゃない」

「いや、でも、奴隷や貧困に悩まされない国……最高ですよ!」

「うん……まあ、そう……かもな。とりあえず、このくらいの体制を整えば国づくりも完成と言つていいんじゃない」

オデイーヌが横から聞く。

「実権のない王様なんて、上手くいくものですか?」

「この星ではそれがスタンダードじゃよ。多くの国で王様は君臨するけど統治はしないんじゃない。そして、どこでも国民は王様が大好きじゃ」

「そ、そうなんですな……」

オデイーヌは夜景を見つめながらつぶやくように言った。

2-9. 即死する少女

「さー、三次会だ！ 飲むぞー！」

シアンはうれしそうに併設のバーにみんなを引っ張っていく。

「レヴィア！ スパークリングワインをボトルでね！」

そう言つてシアンは夜景が見える特等席に陣取つた。

「シアンさんはここで生まれたんですよね？」

オデューヌが聞いた。

「そうだよ、四年前にね。あの塔のふもと辺りで」

そう言つてシアンは東京タワーを指した。

「よ、四年前?! じゃ、シアンさんは……四歳？」

「うふふ、バレちゃったか。きやははは！」

シアンは楽しそうに笑つた。

「え？ でも……、私よりは年上……に見えるんですが……？」

困惑するオデューヌ。

「シアン様に時間などあまり関係ないのじゃ」

そう言いながら、レヴィアは持ってきた飲み物とホットドッグをテーブルに置いた。

「じゃあ、東京の夜景にカンパニー！」

シアンはうれしそうに乾杯の音頭を取る。

「カンパニー！」「カンパニー！」「カンパニー！」

シアンはスパークリングワインをキューッと一気飲みすると、

「クーツ！ 綺麗な夜景見ながら飲む酒は格別だねっ！」

と、喜色満面で言った。

「四歳なのにお酒大好きなんですね」

オデイーヌが聞く。

「なんだかうちのパパたちが、何かあることに酒ばっかり飲んでてね、それが遺伝したみたい」

「神様とお酒は切っても切り離せませんか」

レヴィアが言う。

「神様!? シアンさんのお父様は神様なんですか？」

オデイーヌは驚いて聞く。

「えーと、うーんと……神様のリーダー？ なのかな？」

シアンは首をかしげながら答える。

「リーダー？　じゃあ、神様がたくさんいらっしやる？」

「そうだね」

「じゃあ、シアンさんも神様ですか？」

「僕はシアンだよ」

そう言つてニコニコと笑つた。

「シアン様は神様を超越されてるのじゃ。例えば、今もこうやつてここにいらっしやるように見えて、他の星で戦つてたりするんじゃ」

「え？　レヴィア見えてるの？」

シアンが不思議そうに聞く。

「なんとなく様子で分かるのです」

「ふーん、今ちようど、レジスタンスの悪い奴を見つけ出して衛星軌道上で交戦中」

シアンはうれしそうに言った。

「えっ!?　シアンは身体がたくさんあるの？」

レオは驚く。

「管理してる星が百万個あるから一つじゃ足りないんだよ」

ニコニコするシアン。

「ふへ——」

レオは絶句する。レオは『今までに何個も星を消してきた』と言っていたシアンの言葉の背景が何となく分かったような気がした。

「よし、敵が突っ込んでくるぞ。殲滅してやる。ガンマ線バースト用意！」

シアンがノリノリで言った。

レヴィアが焦って言う。

「ちよ、ちよっと待ってください！ ガンマ線バーストって、宇宙最大の爆発現象のことじゃなかったでしたっけ!？」

「そうだよ？ 物理攻撃無効の戦艦で突っ込んでくるんだもん。試しに撃ってみようかなって」

「ダメダメ！ ダメですって！ そんなの撃ったら太陽系ごと吹き飛ばしますよ！」

「え？ そんな？」

「そうですね、太陽が生み出す百億年分のエネルギーを二十秒で一気に放出するんですよ？ 何光年離れてたって全て焼き尽くされるはずですよ」

「ああ……もうダメだ、もう止まらないみたい……」

シアンはそう言うと、ビクンビクンと身体を痙攣させた。

そして、しばらく放心状態になってしまった。

「シ、シアン……、大丈夫？」

レオが心配そうに聞く。

レヴィアは、

「ダメって言いましたよ、私は……」

そう言っつて肩をすくめた。

やがてシアンは目をパチパチとさせると、スパークリングワインのビンを買つつかみ、一気飲みをした。

そして、ビンをガン！とテーブルに置くと、

「いやー、レヴィアの言う通りだったよ！ きやはははは！」

と、うれしそうに笑った。

「え？ どうなつたんですか？」

「星がね一瞬で蒸発しちゃった。僕も射出口の裏でシールド重ねて隠れてただけど瞬殺だったよ」

シアンは自分が死んだことを報告しながら、ケタケタと笑った。

「え？ シアン死んじゃったの？」

レオがビクビクしていると、シアンは

「ふふっ、良くあることだよ」

と言っつてニヤッと笑った。

2—10. 宇宙の根源

「シアン様は時空を超え、命の法則も超えられるのじゃ」

レヴィアは達観したように説明する。

「なんでそんなことができるの？」

レオがシアンに聞く。

「この世の理ことわりを知ってるからだよ」

シアンはホットドッグをほお張りながら答える。

「え？ 知ってるだけ？」

「そう、知ってるだけ」

「知るってそんなにすごいことなの？」

「この世界は情報でできているからね。知るということは操れるということだよ」

「うーん、どういうことかなあ……」

首を傾げ悩むレオ。

「世界がどうやってできているか知っているから、そこに干渉できるってことですか？」

オディーヌが聞く。

「君は良く分かっているねえ」

シアンはニコニコして答えた。

「え？ どうやってできてるんですか？」

「じゃ、特別に見せてあげよう！」

そう言うときシアンはシアンは両手のひらを上に向け、何かをつぶやく。

すると光が周囲から集まってきて、手の上でクルクルツと渦を巻いて……消えた。

「ほら、これがこの宇宙エッセンスの根源だよ。全宇宙はここにあるんだ」

シアンはニッコリと笑いながら言った。

しかし……、そこには何も見えない。

「何も……、見えないんですが……」

オディーヌは困惑しながら答える。

「しようがないなあ、じゃ、ビジュアライズしてあげるね！」

そう言うときシアンが目をつぶると、光が渦巻いていた辺りから虹色に輝くリボンが高速で噴き出してきた。

「うわあー」「わっ！」

驚くオディーヌとレオ。

リボンはどんどんと噴き出され、テーブルも床もあつという間に輝くリボンで埋め尽

くされていく。

オディーヌは自分の周りにもワサワサとやってきたリボンをじっと観察する……。

「あれ？ これ、数字……だわ」

リボンはよく見ると1と0の文字が無数に組み合わさってできており、文字ごとに赤、青、緑で色付けされて輝いていた。虹色に見えたのはこれらの組み合わせだったのだ。

「そうだね、宇宙^{エッセンス}の根源はこの無数の1と0の数字の集合体なんだ」

「え？ 数字……？」

レオは驚いてリボンをジッと見つめた。

「そう、この世にあるものは全てこれで構成されているんだ」

シアンは両手を広げ、満足そうに言う。

「あれ？ この数字、リズムがあるね……」

レオがリボンのいろいろな所を見ながら言った。

1と0の数字は時折変わるがそこには一定のリズムがあったのだ。

「おお、良く気づいたね。そう、宇宙^{エッセンス}の根源はダイナミックに躍動しているんだよ」

数字が変わるたびに色も変わるため、虹色のリボンはリズムミカルにきらめきを放っている。

「まるで歌を歌っているみたいだ」

レオはうれしそうに言った。

「そう！ 僕たちの世界は唄^{うた}でできているんだよ」

シアンはそう言うのと両手をパアツと高く掲げ、宇宙^{エッセン}の根源^スを宙に放った。

宇宙^{エッセン}の根源^スは窓をすり抜け、虹色に輝くりボンをどんどんと吹き出しながら渋谷の空高く飛んでいく。それは上質なイルミネーションとなり煌めきながら東京の夜空を彩った。

「すごい……。シアンはあの数字を理解しているから何でもできる……ってことなんですね？」

オデューヌは宇宙^{エッセン}の根源^スの煌めきに目を奪われながら聞いた。

「そうだよ。この宇宙のすべてはあの歌う数字なんだ。数字を理解し、数字を操作する事でこの宇宙の事は自由にできるんだ」

「すごい……」

オデューヌは絶句する。

宇宙^{エッセン}の根源^スの煌めきは、やがて静かに消えていった。

「他にそんなことできる人はいるの？」

レオが聞く。

「僕だけだね。でも、パパはあの数字のあり方を規定できる。だから、パパと戦えば勝てるけど、本質的には、パパの手のひらの上からは出られないんだ」

「何……言ってるんだかわからないよ……」

レオは困惑した。

「無理に理解せんでいいぞ。人間には到底理解できん世界じゃからな」

レヴィアはそう言って静かに首を振った。

「そう言えば、さつき蒸発させちゃった星の人たちはどうなっちゃったんですか？」

オデイーヌが心配そうに聞く。

「あ、あの星？ もう元に戻しておいたよ」

「え!? 蒸発させた星を戻せるんですか？」

「この世の理を知ってるからね」

シアンはニコニコしながら言う。

オデイーヌとレオは顔を見あわせ、言葉を失ってしまった。

2—11. ドラゴン遊覧飛行

「さて、せっかく来たんだから東京を案内してあげよう」

そう言つて、シアンはみんなを引き連れて屋上へと移動した。

地上二百三十メートルに吹く風はさすがに強かったが、レオもオディーももうれしそ
うに三百六十度の夜景のパノラマを堪能する。

「じゃあ、レヴィア、僕たち乗せて飛んでよ」

無茶振りするシアン。

「え!? こゝ、こゝこでですか?」

レヴィアは観光客がそれなりにいる屋上を見回して言った。

「大丈夫、大丈夫。飛び立っちゃえばこつちのもんだよ」

「我が乗せなくたって、普通に飛べばいいじゃないですか!」

「僕が乗りたいんだよ」

シアンはニコニコしながら言った。

レヴィアは目をつぶり、大きく息をつくど、

「……。じゃあ、すぐに乗ってくださいよ」

そう言つて少し離れると、ボン！と爆発音を放つて巨大なドラゴンへと戻つた。

「キヤ————！」「うわあ！」「ば、化け物だあ！」

辺りが騒然とする。

「きやははは！ やつぱりレヴィアはこうじゃないと！」

うれしそうなシアン。

「いいから早く乗つてくださいい！」

レヴィアの重低音の声が響く。

シアンはレオとオディーヌを抱えると、ヒョイツとレヴィアの背中に飛び乗つた。

「出発進行！」

シアンは叫ぶ。

レヴィアはバサツバサツと巨大な翼を大きくはためかせると、一気に夜空へとジャンプして離陸した。

「うわあ！」「きやあ！」

レオとオディーヌは背中のウロコのとげになっているところにしがみつき、振り落とされないように必死に耐える。

「飛び立つたぞ————！」「なんだあれは!?!」

騒然とする屋上の人たちをしり目に、バサツバサツとさらに翼を羽ばたかせ一気に高

度を上げるレヴィア。

東京に突如現れた、ファンタジーな怪物の軽やかな身のこなしに見る者は言葉を失い、ただ夜空に飛び去って行くさまを呆然ぼうぜんと見ていた。

「きゃははは！ いいね、いいね！」

シアンは大喜びである。

「落ちないで下さいよ！」

レヴィアは重低音を響かせながら不機嫌そうに言う。

どんどんと高度を上げていくと、旅客機が飛んでいるのが見えた。羽田空港への着陸体制に入っている。

「お、挨拶しよう！」

シアンははしゃいで言う。

「え!? 危ないですよ」

「いいから、いいから！」

そう言うとシアンは、レヴィアの巨体をボウツと光らせて勝手に操作し始めた。そして旅客機へと舵を切った。

「うわ——！」

制御を奪われたレヴィアは喚く。

ほどなく旅客機のそばまでやってきて編隊飛行となる。灯りの点った窓がズラツと並び、乗客の姿が見える。

「うわっ！ 人が乗ってるわ！」

オデイナーが驚く。

「この星では、遠くへ行くときはこうやって飛行機で行くんだよ」

シアンは乗客に手を振りながら説明する。

「こんな大きなもの、どうやって飛んでるんですか？ 魔法？」

「この星には魔法はないよ」

「え!? 魔法がない!？」

「魔法は後付けなんだよね。魔法がある星の方が特殊なんだよ」

オデイナーは絶句した。子供の頃から当たり前のように存在し、便利に使われていた魔法が誰かに後付けされた存在だったとは、想像もしていなかったのだ。

徐々に旅客機に近づいて行くと、乗客もドラゴンに気がついたようで、皆驚き、スマホを向けたり大騒ぎしている。

「シアン様、これ以上はヤバイですよ！」

「じゃあ、次はビルでも見ますか」

そう言って眼下に見えてきた品川の高層ビル群へと舵を切った。

一気に急降下する一行。

「ひいー!」「きゃあ!」「おわあ——!」

叫ぶ三人をしり目に、

「きゃはははー!」

と、シアンは楽しそうに笑いながらさらに加速する。

グングンと迫る高層ビル。

「そりゃー!」

シアンはビルの間を巧みに通過していく。

残業しているフロアでは明かりが灯り、働いている人がパソコンを叩いている。

「この辺はオフィスビルだねー」

そう言いながら地面スレスレを通過し、今度は徐々に高度をあげながら品川駅前を飛ぶ。

帰宅途中の多くのサラリーマンたちはドラゴンに気がつかなかったが、子供が見つけて指さして叫んだ。

「ママー! 恐竜だ!」

母親は何を言っているのかと、呆れたように指の先をたどりながら、

「何言ってるの、恐竜なんていない……!」

と言いかけて固まった。

シアンは母子連れに手を振り、

「ひいー！」

と叫ぶ母親のすぐ上を、ビュオオと轟音をあげ、通過していく。

「ヒヤッハー！」

シアンはそう叫ぶと今度は一気に高度を上げる。

「ママ！ 僕もあれ乗りたい！」

子供が叫んだが、母親は言葉を失っていた。

轟音に気がついたサラリーマンたちは、ドラゴンの巨体が飛び去っていくのを見ながら啞然とする。

みんな足を止め、ザワザワとするが、もうドラゴンはスマホでは撮れないほどに小さくなっていった。

2—12. 戦略爆撃機B29

「働く人はああいう所で仕事したりするんだ」

シアンはレオとオデイーヌに説明した。

「書類仕事……ですか？」

オデイーヌが聞く。

「うーん、今はもうパソコンだねえ」

「パソコン？」

「情報を処理する機械があつて、他の人と連絡とつたり、調べ物したり、資料作つたりするんだ」

「それ、一つ……もらえませんか？」

「えっ？ うーん……。まあいいか……。いいよ！ 後で最新型一台あげよう」

シアンはちよつと悩んだが、オデイーヌを見てニッコリと笑つて言った。

「ありがとう！」

オデイーヌはうれしそうに笑つた。

「シアン様！ 前！ 前！」

レヴィアが叫ぶ。

「へ？」

よそ見をしていたシアンが前を見ると、高層ビルが目前に迫ってきていた。

「ひいー」「キャ——！」

悲鳴が上がったが、ビルにぶつかる直前、ドラゴンの巨体はワープしてまた別の夜空を飛んでいた——。

「いやー、危なかった！ きやはははは！」

シアンはうれしそうに笑ったが、三人は無言だった。

しかし、先ほどまでとは違って真つ暗である。ただ、静かに満天の星空がレオ達を照らしていた。

「あれ？ こゝも東京？」

レオが不思議そうにシアンに聞いた。

「そのまま東京なはずだけどなー」

シアンはそう言つて辺りを見回すと、遠くを飛んでいた飛行機から何かが次々と投下されていく。

ピュ—— ツ！ ピュ—— ツ！

それは激しく光りながら暗い地面へ向かつて真つ逆さまに落ちていき、直後激しい爆

発をともなつて巨大な火の手が上がった。

ズーン！　ズーン！

激しい衝撃音が夜空に響いた。

「えっ!?　何あれ!?!」

驚くレオ。

「戦略爆撃機B29じゃ……。我々は東京大空襲の時のアーカイブの中に来てしまったようじゃ……。」

「あ———！　レオ達に見せる候補を探してた時の奴だな……。来るつもりなかったのに……」

シアンは額を押さえた。

「え？　爆弾で街が焼かれるってこと?」

「そう、東京も昔はこうやって爆弾で焼き尽くされて十万人が殺されたんだよ」

「十万人!?　それがこれから殺されるの?」

レオは真つ青になって聞く。

「まあ、アーカイブだから現代に直接つながってる訳じゃないけど、これから爆弾が雨のように降ってみんな焼き殺されちゃうんだ」

「そ、そんなあ……。ねえ、止められないの?」

レオはシアンの腕をつかんで聞いた。

「これは歴史だからねえ……」

「でも、今あそこにいる人たちは苦しい思いをするんだよね？」

「まあ、それは……、そうかな」

「ねえ、とめて」

レオは懇願する。

「南からB29が約三百機飛んできます。高度約三千メートル。搭載してる爆弾は……全部で千六百トン、四十万発ですね。殺る気満々ですよ」

レヴィアは淡々と言う。

「守る軍隊は何やってるの？」

レオが悲壮な顔をして聞く。

「対抗できる軍力はもうほぼ壊滅されちゃったんじゃないよ」

「じゃあやられっぱなし？」

「そうなるのう」

「なんでそんなことに？」

「国というのは無数の人の集まりなんじゃ。賢くまとめ上げて正しく導かないと多くの国民が死ぬって言うことなんじゃ。そしてそれは簡単じゃない。シアン様がお主らに

見せたかったのはそう言う現実なんじゃ」

レヴィアは重低音の声で淡々と言った。

やがて次々と後続のB29が焼夷弾を投下していく。

ピュ————ッ！　ピュ————ッ！

無慈悲な爆弾の雨が降り始める。

「あ————ッ！　みんな殺されちゃうよお！」

レオが叫ぶ。

あちこちで上がり始めた火の手が夜空を焦がし、B29の編隊を浮かび上がらせた。

銀色に鈍く光る機体は四機の巨大なプロペラを回し、爆弾を満載して不気味に淡々と

東京湾からやってくる。それはまさに十万人の命を奪いに来た死神だった。

「ねえ、とめて、シアン！　お願い！」

「しようがないなあ」

シアンはそう言ってニヤツと笑いながら、胸のところから黄色いアヒルのおもちやを取り出した。

2-13. 殲滅のアヒル

「へっ!? 介入するんですか!？」

焦るレヴィア。

「可愛いレオの頼みだからね」

そう言うのと、うれしそうにアヒルの赤いくちばしにチュツとキスをしてB29の方へ放つ。アヒルはふわふわと頼りなげに風に揺られながら、三百機のB29を目標して飛んで行った。それを確認したシアンは、ドラゴンの身体を急旋回させて全力で逃げ始める。

戦略爆撃機対アヒル、その滑稽で異様な対比。アヒルは不気味な恐ろしさをたたえながらB29へと迫っていった。

「シ、シアン様、何するつもりですか!？」

ビビるレヴィア。

「アヒルさんにね針の穴サイズのワープホールを作ったんだ」

「針の穴……。もしかして……」

「ガンマ線バーストをね、もう一度試してみようかと思って」

「や、やつぱり！ さつき星を蒸発させたばかりじゃないですか！」

「針の穴サイズだから大丈夫だって」

シアンはニコニコしながら言う。

「ダメですって！ うわあああ！」

レヴィアは必死に追加で加速して逃げる。

「シールド！　せめてシールド張ってください！　東京が蒸発しちゃいますよ！」

「えー、オーバーだなあ……」

「いいからすぐ！　お願いします!!」

懇願するレヴィア。

「じゃあ……。ホイっとな！」

そう言うと、シアンは両手の上に直径一メートルくらいの金属球を出した。そして、それを、

「それいけ——!!」

と、言いながら市街地の方にもすごい速度で投げる。

金属球は高速で回転し、ブワーツと円盤状に広がりながら飛んでいく。そして、市街地の上に着くころには直径十数キロメートルくらいのシールドになり、爆撃されている一帯を覆った。

シールドは宙に浮いていながら頑健で、落ちてくる焼夷弾をすべて受け止め、焼夷弾はシールドの上をゴロゴロと転がりながら火を噴いている。

「アヒル、要らなかつたんじや……」

レオが恐る恐る言うと、

「何言つてるの？ ガンマ線バーストはロマンだよ！」

と、シアンはわけわからないことを叫んだ。そして、続けて、

「十、九、八……」

樂しそうにカウントダウンを始めた。

B29はさらに爆弾を盛大に降らし始める……。

レヴィアは周囲に強固なシールドを張り、必死に備えた。

「三、二、一」

「ひい——！！」

レヴィアが叫ぶと同時に、東京は激烈な光に包まれる。

アヒルから放たれたガンマ線バーストは、サーチライトのように先頭を飛ぶB29に当たると瞬時に蒸発させ、大爆発を起こす。そしてガンマ線で爆発的に生成された電子対は激烈な熱線を生成し、周りのB29三百機も瞬時に蒸発させた。それはまさに一瞬の殺戮劇だった。

アヒルは自らも吹き飛びながら、激しいエネルギーを東京全体に放ち、死神どもをプラズマにまで分解しきつたのだ。

「うわあああ！」「キヤ——！」

全てが激烈な光で埋め尽くされる中、レオもオディーヌもかがみこんで必死に耐えた。

「きゃはははー！」

シアンだけは絶好調に笑っている。

しかし、激烈なエネルギーはB29を葬っただけにとどまらなかった。熱線を浴びた東京湾は瞬時に沸騰し始め、房総半島の山林は一斉に火を噴いた。

発生した巨大な衝撃波は東京上空に広がり、やがて激しくシールドに激突し、シールドをしたたかに鳴らす。

ガンマ線バーストはすぐに終わりを迎えたが、巨大なキノコ雲が東京湾上空を覆い、成層圏まで一気に吹き上がる。

燃える山林がキノコ雲を不気味に映し出していた。空襲は止められたものの別の地獄絵図が展開してしまった。

そして襲ってくる猛烈な豪雨。バケツをひっくり返したかのような激烈な雨がシールドに叩きつけ、シールドの縁では滝となって流れ落ちた。

「シールド張ってなかったら死者百万人でしたよ……」

レヴィアはぐったりしながらつぶやく。

「針の穴だけなんだけどなあ……」

シアンはそう言いながら腕を組んで首をかしげた。

「アーカイブがめちやくちやになっちやいましたよ……」

「まあ、ガンマ線バーストの研究だと思えば……」

「そういうの、誰もいない所でお願ひします」

レヴィアはトゲのある声で言った。

「はい、じゃあ戻ろう！」

そう言ってシアンは手を上げて何かをつぶやいた。

2—14. 幸せの記憶

一行はレヴィアの神殿へと戻ってきた。

「いやー、楽しかったー！」

シアンはごく満悦の様子だったが、三人はゲツソリとして無言だった。

「さーて、寝るかー！」

そう言うのとシアンは手を上げる。ボン！ と爆発音を伴いながら、丸太でできたコテージが神殿の広大な広間に出現した。

「へっ！ ちょっと、シアン様、ここ、私の寝床なんですけど……」

「レヴィアも人型になってよ、一緒に寝よう！」

そう言いながら、シアンはレオとオディーヌを連れてコテージの中へと入って行った。

「あ……」

レヴィアはそれを見ると、重低音のため息をつき。渋々また金髪のおかっぱ娘になっ
てついて行った。

コテージの中は2LDKとなっていて、広いダイニングキッチンに、ベッドルームが

2つだった。一つはツイン、一つはダブルである。

「レオは僕と寝よう！」

そう言つてシアンは、レオを連れてダブルベッドの部屋へと入つて行つた。

シアンはピヨンと飛んで、ベッドにダイブする。

ベッドを見たレオは、

「え？ ベッド一つしかないよ……？」

と、シアンに聞く。

「いいじゃない、一緒に寝よ！」

寝転がつたシアンはそう言つてベッドマットをポンポンと叩く。

「えっ？ いや、そのう……」

赤くなるレオ。

「なあに？ 僕を襲う？」

シアンはニヤリと笑う。

「そ、そんな事しないよ！」

「じゃあ、こつち来て……」

「歯磨きとかしないと……」

レオが渋ると、ボン！ と爆発音がしてレオの服がパジャマに変えられた。

「生活魔法で汚れは全部落としておいたから、もう寝ても大丈夫だよ」
そう言つてシアンはニコツと笑つた。

「あ、ありがとう……」

レオは恐る恐るベッドに乗つて横になる。

「はい、もうちよつとこつち」

そう言いながらシアンはレオに毛布を掛けた。

シアンの優しい温かい香りに包まれてレオは赤面する。

「今日はお疲れ様。明日からは忙しいよー」

そう言いながらシアンは部屋の明かりを消した。

レオはドキドキしていたが、疲れもあつて、すぐに眠りに落ちて行つた……。



レオは夢を見ていた。

優しい大好きなママと、ガツシリとしたひげを蓄えた男性……。だが、男性は顔のところが光つていて誰だかわからない。でも、温かい声でレオの事を呼んだ。

そして、ママに右手を、男性に左手を持つてもらつてブランコのようにゆらしてもらつた。心が温かくなつてくる。

やがて空が明るくなり光芒が射した。すると、ママも男性もその光に導かれるように

天へと登っていく。

レオは追いかけてようとするが、身体が動かない。ママも男性も優しく手を振りながら小さくなり天からの光に溶けていった……。

「ママ——！」

レオが叫ぶ。

気がつくくと、レオは温かく柔らかい物に包まれていた。

「ん？」

寝ぼけ眼で温かいものを触って……、レオは目が覚めた。

レオはシアンと抱き合うように寝ていたのだ。

「あわわわ……」

レオが離れようとする、

「なあに？ ママが恋しくなった？」

薄暗がりの中でシアンがほほ笑みながらレオを引き寄せ、ぎゅっと抱きしめた。

「シ、シアン……、ちよ、ちよつと……」

ドギマギするレオ。

「ママ……、呼んであげようか？」

シアンは優しい顔でレオをのぞき込む。

「えっ!？」

あまりに意外な提案にレオは絶句する。

小さな村で宿屋を営んでいたレオの母親は戦火に焼かれ、かなり前に亡くなっていた。レオはその時に捕まり、奴隷として売られていたのだ。

早朝に裏山から見た、燃え上がる宿屋がレオの脳裏にフラッシュバックする……。

「う……、うう……」

レオは呼吸が速くなりながら、何とか自分を保っていた。

「レオ……、久しぶり……」

シアンがレオを見つめて言った。

「え?」

レオが混乱していると、

「私よ、ママよ……」

そう言つて愛おしそうにレオの頬をなでた。

「ママ……?」

「大きくなつたわねえ……」

シアンに憑依ひょういしたレオのママは目に涙を浮かべて言う。

「ほ、本当にママなの?」

するとママは静かに歌い始めた。

『聖なる光をくまといく♪ 軽やかにく舞えく♪ レオく♪』
綺麗な歌声が緩やかに部屋の中に響く……。

「ママ——！」

レオはママに抱き着く。

子供時代によく歌ってくれた替え歌の童謡。それは二人しか知らない幸せの記憶だった。

2—15. 救世の短剣

「うっうっうっ……」

肩をゆらして泣くレオを、ママは涙をこぼしながら抱きしめる。

しばらく部屋には嗚咽おえつの声おえつが静かに響いた。

「ゴメンね、辛かったろ……」

ママは優しくレオの頭をなでた。

「うん……。僕、ずっと辛かった……」

「ゴメンね……」

「ううん、ママのせいじゃないよ……」

そう言つてレオはママに頬ずりをした。

「レオはなんだかすごい事を始めたのね。やっぱりあの人の血ね」

「え？ 見てたの？」

「レオの事はずーっと見てたわよ。いい仲間巡り合えてよかったわね」

「うん……。責任重大だけどね」

「もし、行き詰ることがあつたら短剣を使いなさい」

「え？ 短剣？」

「そう、あれはあの人の形見……、特別な短剣なのよ」

「ふうん、知らなかった……」

「あなたのパパはとてすごい人だったのよ……。この世界を……救ったの……」
そう誇らしく言って……。悲しそうに目を閉じた。

「世界を……救った？」

「そう、命がけでね……」

「それで、うちにはパパがいなかったのか……」

「短剣は大切にするのよ」

ママは愛おしそうにレオの頬をなでて言った。

「わかった！」

「ああ、もう行かないと……」

「えっ!? もう行っちゃうの？」

「ゴメンね、ずっと見守っているわ……」

ママは悲哀のこもった目でレオを見る。

「いやだ、ママ！ 行かないで！」

レオはママにしがみついた。

「さようなら……」

そう言うともママの身体は、何かが抜けたように急に脱力した。

「いやだよー！」

必死に叫ぶレオ。

シアンがポんポんとレオの背中を叩く。

ママとは違う叩き方に、レオにはもうママがいなくなってしまったことが分かってしまった。

「うっ……うっ……」

レオはただ涙を流した。

シアンは何も言わず、レオをギュツと抱きしめた。

親と死に別れ、奴隷として売られた少年。その心に澱おりのようにたまった絶望と悲しみは、簡単に癒せるようなものではない。

シアンは目をつぶり、ただ、震えるレオの身体を温める。

薄暗い部屋にはレオの嗚咽がいつまでも響いていた。



「朝ですよ〜」

オデイーヌがレオ達の部屋のドアを開けると、寝相の悪い二人はまだ寝ていた。

毛布は床に落ち、伸ばしたシアンの腕はレオの顔の上に乗っかっていて、寝苦しそうだった。

「ほら、起きて！ 朝食にするわよ！」

オディーヌは、シアンの腕をどけてあげながら二人に声をかける。

「うーん、もうお腹いっぱい……」

シアンが寝ぼけて変なことを言う。

オディーヌは起きない二人にちよつとイラつとして、

「私たちはお腹すいたので、起きて！」

そう言つてシアンの頬をぺちぺちと叩く。

「うーん……」

シアンは腕をピューツと動かして寝返りを打った。その時、指先に沿つて空間が裂けて切れ目が顔をのぞかせる……。

「へ!？」

慌てるオディーヌ。

すると、その空間の向こうから漆黒の指がニョキニョキと出てきて、ググつと空間の裂け目を広げた。

「キャ———!！」

そのあまりの異様さにオディーヌは後ずさりする。出てきたのは漆黒の霧の化け物だった。

全身が闇の霧^{きり}でできた異形の存在は、シアンを見つけると赤い目を光らせていきなりシアンの細く白い首を両手でキューツと締め上げる。

「グエツ！」

寝込みを襲われたシアンは、変なうめき声を上げ、目を覚ます。

化け物はさらに凄^{こわ}い力でシアンの首を締め上げた。

シアンは真紅の目を光らせ、

「ウウ——ツ！」

とうなり声をあげると、手のひらを化け物に向け、激烈な閃光を放つ。

ビヨヨヨ——！ と、異常な高周波音が響き渡り、部屋は鮮烈な光に埋め尽くされた。

「うわあ！」

異様な展開にレオも起きて、ベッドから転がり落ちる。

部屋には焦げ臭いにおいが充満する。

「グギヤアア！」

化け物は閃光を浴び、苦しそうにしながら空間の裂け目へと逃げ帰っていく。

「ケホツケホツ……、待ちな！」

シアンはのどを押さえながらそう叫ぶと、裂け目の中には上半身を突っ込んで何やら攻撃を仕掛け続けた。裂け目からは激的な閃光がほとぼしり、激しい爆発音が響いてくる。

レオは寝ぼけ眼でオデイナーと目を合わせ、お互い呆然としていた。

「もー、油断も隙も無いんだから！」

シアンは裂け目から出てくると、プリプリとしながら言った。

「でも、その裂け目作つたのはシアンですよ？」

オデイナーが突っ込む。

「え？ 僕？」

ポカンとするシアン。

「寝返りを打ちながら空間を切つてましたよ」

「え？ あ？ そうだった？ で、朝食は何？」

と、言つてニコニコしながらオデイナーを見る。

オデイナーは軽いノリにちよつと面食らいながら、

「レヴィアさんがテーブルで待つてます」

そう言つて部屋の外を指さした。

2—16. スタバで朝食を

「レヴィアおはよ〜」

レオは目をこすりながらテーブルのところへ行つた。

「おはよう、よく眠れたかの？」

レヴィアはコーヒーを飲みながら微笑んで言う。

「うん、ママにも会わせてもらっちゃった」

「ママ？ あ、そう……、それは……良かったのう……」

レヴィアはちよつと言葉に詰まりながら答え、目をつぶつてため息をついた。

「あれー？ 朝食は？」

シアンは頭をボリボリとかきながら、やってくる。

「朝食、何が良いですか？ 相談しようと思つて……」

レヴィアはちよつと緊張した声で答えた。

「あー、スタバ行くか、スタバ」

「えっ!? スターバックスですか？ どのの？」

「田町だよ、田町。別にシアトルでもどこでもいいけど……」

そう言いながらあくびをするシアン。

「じゃあ、そうしましょうか」

「それじゃ転送するよ」

シアンはそう言つて右手を挙げる。

「ちよ、ちよつと待つてください、その服装で行くんですか？」

ピンクのウサギ模様のふわふわパジャマ姿のシアンを指さして言った。

「レヴィアは細かいなあ……」

「いや、細かくないですつて！」

シアンは目をつぶつて四人を転送させた。



一行は国道十五号線沿いの歩道に移動した。

シアンは胸元がV字に開いた白ニットのトップスに、カーキ色のタイトスカートをはいていた。

「これならいいでしょ？」

ニコツと笑うシアン。

「……、バツチリです」

レヴィアは渋い顔で答えた。

「ねえ、僕は？」

レオがパジヤマ姿で聞く。

「ゴメンゴメン！」

シアンはそう言うのと、ユニクロのボーダーシャツに着替えさせた。

◇

「では、スタバにレッツツゴー！」

シアンはそう言つて、大きなガラス扉を押し開けた。

「いらつしやいませー」

若い女性の声が響く。

「うわあ、すごおい！」

オディーヌが声を上げる。ピンクのドーナツに緑のクリームバー、色とりどりの食べ

物が並んだガラスのショーケースが目に入ったのだ。

レオとオディーヌはガラスをのぞきこんで一生懸命品定めをする。

「チーズタルトがお勧めですよ」

店員がニツコリとしながら声をかける。

するとシアンは、

「じゃあ、この列とこの列、全部一つずつください」

そう言つて大人買いする。

「え？ お持ち帰りですか？」

驚く店員。

「ここで食べるんでスコーンは温めて」

シアンはニツコリとして言つた。

「わ、分かりました……」

「僕はペンティアメリカノ、ホットね。みんなもコーヒー？」

シアンはそう言つて見回す。

すると、レオが

「僕は……ミルクがいいな」

と、恥ずかしそうに言つた。

◇

通りに面した、全面ガラス張りの壁のそばに席を取る一行。

国道十五号線は産業道路であり、たくさんトラックや自動車が行きかっている。

「うわあ、すごいね……」

レオはその交通量に圧倒される。

「物流は国の要かなめじゃからな。国づくりというのは道も輸送手段も重要じゃぞ」

レヴィアはそう言ってコーヒーをすすする。

「そんなの空間繋げちゃえばいいよ」

シアンは呑気にコーヒーをすすりながらいう。

「ええっ!? そんなの管理局セントラルに怒られますよー」

「僕がいろいろ言っただけで伝えて」

そう言いながらシアンはピンクのドーナツをパクリと食べた。

「……。報告書が……」

「レヴィアは細かいなあ、『シアンにやれって言われた』とだけ書いとけばOKだよ」

シアンはそう言って、レヴィアの背中をバンバンと叩いた。

「……。本当にそう書きますからね?」

レヴィアはジト目でシアンを見る。

シアンはうなずきながらスコーンに手を伸ばした。

「空間繋げるってどこ繋げるの?」

レオが聞く。

「主要都市の倉庫になるじゃろうな。各都市に倉庫借りて、そこをうちの倉庫とつなげる。そうしたら輸出入が一瞬でできる……。なんか怖いもの」

「ちよつとやりすぎかな? 利用期間に制限つけようか? 三十年間だけとか」

シアンはそう言ってコーヒーをすすった。

「三十年……、それならいいですな」

レヴィアはうんうんとうなずいた。

3—1. 宇宙サイズの蜘蛛

隣の席の二人連れが何やら揉めている。

「それは女神様に失礼です！」

金髪碧眼へきがんの少女が大学生風の男に怒った。

レヴィアはチラッとそちらを見ると、

「あれ？ 異世界人じゃな……」

と、つぶやいた。

「異世界人って、私たちみたいなの？」

オデューヌが小声で聞く。

「そうじゃ……、あー、ミネルバのところの子じゃな。さすが田町、いろんな星の人がおる」

「この街はそんなに特別なんですか？」

「宇宙を司る組織つかさどがあるんじゃないよ。いわば全宇宙の中心じゃな」

「全宇宙の……中心……」

あまりに壮大な話にオデューヌは絶句する。



「それで、今日は何するの?」

シアンはニコニコして言う。

レオはミルクを飲みながら、

「土地を整備したいなと思うんだけど……」

「おお、国土ね。レヴィアでできる?」

「はいはい! ちゃんと考えましたよ。あの辺は標高五百メートルくらいの山が連なっており、地下に太いパイプを通してですね、液化化させて土砂を全部海へと流してしまおうと思っております」

レヴィアは自信ありげに言った。

「どのくらいかかるの?」

「一週間もあれば」

「僕が10分でやってあげるよ」

「へ!?!」

「蜘蛛くもでドーン! って」

「蜘蛛くも……ですか? 十キロ四方の山地ですよ?」

「まあ、見えてよ」

シアンはうれしそうに言うが、レヴィアは渋い表情をしていた。



神殿に戻ると、シアンはみんなをコテージに入れ、コテージごと転移させて国土予定地の上空に跳ばした。

「うわあー！」

窓からの景色にレオが驚く。

青々とした山々の稜線と谷が、編み込まれるように連なりながら海まで続いている。家もなければ人の手が入った形跡もない。

「この山地が僕たちの国になるの？」

レオはシアンに聞いた。

「そうだよ、見ててごらん」

シアンはニコツと笑ってそう言うと、

『クモスケ』カモーン！」

そう叫んで、澄み切った青空に向かって両手をフニフニと動かした。

すると上空空高く、真っ青な青空の向こうから、白く霞みながら何か巨大なものが下りてくる……。

「蜘蛛……、なの？」

レオが不思議そうに聞くと、シアンは、

「そうだよ、可愛い奴だよ」

そう言つて嬉しそうに笑つた。

下りてきた蜘蛛はどんどんと大きくなり、その異常な巨大さをあらわにする。確かに形は蜘蛛だつた。

しかし、それでもまだはるか彼方上空、青空の向こう側なのだ。

「え？　すごく大きくない？」

レオはビビる。

さらに下りてきて、ようやく青空のこちら側に見えてきたときには、足の太さだけで数キロメートルはあろうというところでもないサイズになつていた。

「ええっ!」「ひゃあ!」「うわあ……い!」

一同、あぜん唾然としながらその超巨大蜘蛛の姿に圧倒される。

やがて蜘蛛は海の上に降り立ち、その衝撃で津波が発生して海岸線を巨大な波が洗つていく。そして、程なく衝撃波がコテージを襲つた。

ズン!

という音と共にコテージが大きく揺れる。

「うわあ!」「キャ——!」

叫び声が響いたが、シアンは気にもせず、
「全長253キロメートル、僕のペットだよ」

と、うれしそうに紹介した。

「ペ、ペット……」

レオは絶句した。

蜘蛛はあまりに巨大すぎて、上部はまだ宇宙にいる。直径数キロの足は雲をはるかに超え、宇宙までまっすぐに伸びているのだ。

その圧倒的なスケールに一同は言葉を失い、ただポカンと口を開けて宇宙まで届く巨大構造物を見つめていた。

「さて、整地しよう。クモスケ、カモン！」

そう言つて、シアンはクモスケに指示を出した。

太さ数キロもある足がゆっくりと持ち上げられ、山地の方へ移動してくる。見た目ゆっくりではあるのだが、それはあまりに大きすぎるからであつて、実際の速度は音速を超えている。

そして、山地上空から一気に足を下ろし、蜘蛛の足は山地にめり込んだ。

直後、衝撃波と共に轟音が響き、コテージは大きく揺れ、ビリビリと振動する。

「ひいー！」「うわあ！」

レオとオデューヌは窓枠にしがみつき、何とか耐える。

蜘蛛がゆつくりと足を持ち上げると、そこには直径数キロの巨大なクレーターができていた。

3—2. クモスケの逆襲

「よしよし」

シアンは満足そうにそう言うと、さらにクモスケに指示を出してクレーターの隣に足を下ろした。

再度揺れるコテージ。

また、クレーターが増えた。

「ちよつと待つてください、これじゃ穴だらけで土地としては使えないですよ」
レヴィアが突っ込む。

「うーん……。じゃ、ちよつと均なしてみるか……」

シアンはそう言つて、目をつぶつた。

クモスケは下ろした足をそのままに海の方へとズズズズ！ と動かしていく。
巨大なU字の谷が海まで伸びる。

「谷でも使いにくいですよ」

レヴィアがクリームを入れる。

「じゃあ……」

シアンはさらに複雑な指示をクモスケに与える。しかし、クモスケは止まったまま動かなくなった。

「おい、クモスケ！ どうした！」

シアンはそう言ってフニフニと両手を動かした……。

すると、クモスケはいきなり足をコテージへと向かって高速に動かし始める。

「へっ!?!」

焦るシアン。

グングンと迫ってくる巨大な足はもはや迫る絶壁だった。

「うわあー!」「ひやあー!」「ひええー!」

悲鳴が響き渡るコテージ。

「こんちくしょう!」

悪態をつきながらシアンはコテージを転移させ、間一髪直撃を免れる。

「何すんだよお!」

プリプリと怒るシアン。

勢いよく飛んだクモスケの足は、そのまま向こうの火山に直撃した。

「へっ!?!」

蒼ざめるレヴィア。

「あそこって、もしかして……」

オディーヌが冷や汗を垂らしながら言う。

クモスケの足はレヴィアの神殿ごと火山を吹き飛ばし、後には巨大な穴が広がって下からマグマが湧き出していた。

「ありやいや……」

シアンは額に手を当てる。

「ちよつと！ 困りますよ！ あそこ、二千年も住んでたのに……、うわあああ！」

ひざから崩れ落ち、泣き出してしまいうレヴィア。

シアンはしゃがんでレヴィアの背中を優しくなでながら言った。

「ゴメンゴメン、ちゃんとした神殿作ってあげるからさ」

「あそこが気に入ってたんです！ うっ……うっ……うっ……」

レヴィアは涙をぼたぼたと落とした。

「ゴメンよお……。でも、火山もう無くなっちゃったからなあ……」

シアンも困り果てる。

レオはそつと泣きじやくるレヴィアにハグをした……。

コテージにはレヴィアのすすり泣く声が響く。

シアンはいろいろと考え、

「じゃ、この山に復元してあげるよ。パルテノン神殿みたいな荘厳な奴をバーンと建ててその下にさ」

と、提案した。

「パルテノン神殿？」

「こんな奴」

そう言つてシアンは白亜の柱が整然と並んだ神殿の立体映像をポンと出した。

「……。まあ……。綺麗……。すな」

「これをそこの山に建てて、地下にいままでの神殿のコピーを移築。これならいいしよ？」

シアンはニコニコして言った。

レヴィアはしばらく腕を組んで考え込む。

「これ、凄く綺麗だね……」

レオは瞳をキラキラさせながら立体映像をのぞき込んだ。

「お主はこういうの……好きか？」

「うん！」

レオはニコニコしながら言った。

「まあ、それなら……。こういうのもいいかもしれんな……」

レヴィアは目を閉じて、受け入れた。

シアンは金髪おかつぱのレヴィアの頭を優しくなでて、

「ゴメンね……」

と、謝った。

「いや、お見苦しい所をお見せしました……」

レヴィアは泣きはらした目をぬぐいながら頭を下げた。

シアンはスクツと立つと、

「クモスケは退場！」

そう言って、巨大蜘蛛に両手を向け、何かをつぶやいた。

すると蜘蛛は浮き上がり徐々に上空へと上がっていく。

途中、足を動かして衝撃波を放ちながら抵抗していたが、シアンの力には敵わず、宇

宙へと帰って行った。

3—3. 都市計画

「で？　これどうするんですか？」

オデイーヌがシアンに聞く。

眼下にはボコボコに荒らされた地面が広がっていた。

「これは……うん……」

レヴィアもその無残な姿に引いている。

「大丈夫、こうするんだよ」

シアンはそう言うと、両手を地面に向けて、

「クリアグラランド！」

と、叫んだ。

すると、閃光が走り、天も地も激しい光に覆われ、レオたちはたまらず目を覆った。

ズン！　ズン！　と激しい重低音が響き渡り、コテージもビリビリと震える。

しばらくして光が収まり、レオたちが恐る恐る様子を見ると、十キロ四方のボコボコの荒れ地は真つ平たいちの更地となっていた。

「へ？」「え？」「うわあ！」

驚く三人。

「これで完璧でしょ？」

シアンはうれしそうに言った。

「最初から……、これで良かったのでは？」

レヴィアは肩を落としながら言った。

「うーん、コマンド一発ってロマンが無いんだよねー」

首をかしげるシアン。

レヴィアは目をつぶり、首を振った。

「あそこはクレーターが残ってるよ」

レオが指さす。

「あそこは湖にするんだ。水源近いからあそこに水をためると便利そう」

と、シアンは答えた。

確かに削られた山のガケからは水が湧き出し、クレーターに流れ込んでいくのが見える。

「じゃあ、クモスケ湖だね！」

レオはうれしそうに言った。

「あんな奴の名前なんか付けなくていいよ！」

シアンはプリプリしながら答える。

「じゃあ、脚あしの湖？」

「うーん……、まあ、レオが好きに決めて」

シアンは興味なさそうだった。

「よし、じゃあ『脚の湖』で！」

「変な名前……」

オデューヌは渋い顔でつぶやく。



「島はどうするんですか？」

レヴィアはシアンに聞いた。

シアンはニコツツと笑うと、海の方に両手を向けて、

「デヴァイラン！」

と叫んだ。すると、海がいきなり盛り上がっていく。やがて、津波が辺りの海岸を洗い、同時に五キロ四方ほどの広大な四角い埋め立て地がせりあがって、現れた。

「うわあ！ もう何でもアリだね……」

レオが驚いて言う。

「私のやる事、ない気がするのう……」

レヴィアは首を振りながらつぶやいた。

「何言つてんの、これからが大変だよ！ 上下水道、道路に橋に建物！ やる事いっぱい！」

シアンはうれしそうに言った。

そして、コテージを地面に着陸させる。

丸太でできた素朴なコテージはスーツと地面の方に下りてくると、速度を落としながら……でも最後は派手に地面とぶつかってズン！ と音を立てて大きく揺れた。

レオとオデューヌは外に駆け出す。

茶色の地面はどこまでも真つ平に広大な平野を形作っていた。

「うわ——！！」「すごおい！」

二人は目をキラキラさせて辺りを見回し、両手をあげて、

「ここが僕らの国だ！」「やった——！！」

と、叫んだ。

まだ何もないただ広いだけの土地だったが、二人には夢のいっぱい詰まった希望の大地に見える。ここに多くの人が夢を紡ぐ希望の王国を打ち立てるのだ。

レオもオデューヌもうれしくてうれしくて、手を繋いでピョンピョンと飛び跳ねた。



シアンは棒で地面にガリガリと四角を二つ描いて言った。

「はい、王様に大臣！ 区画を決めてね〜」

「区画？」

レオが首をかしげると、オデイーヌは、

「土地の使い方ってことよね？ 住宅地とか商業地とか……」

「そうそう、島の方は工業と貿易、こつち側は農地、住宅地、商業地、公園かな？」

シアンは棒で地面をつつきながら言う。

「なるほど、じゃあ、住宅は海沿いに……」

レオがそう言うのと、

「海沿いは風が強いからおすすめせんぞ」

と、レヴィアが突っ込んだ。

「うーん、じゃ、公園？」

レオがそう言いながら、ガリガリと棒で線を引いて『こうえん』と書いた。

「次は商業地かしら？」

「じゃ、この辺はお店とかだね」

レオは商業地を書き足した。

「その周りが住宅地で、周辺は公園作って、残りは全部農地……かしら？」

オデイナーは、首をかしながら言う。

「良いと思うぞ。じゃあ、道を引いてごらん」

「道？ うーん、どう引いたらいいんだろう……」

「貸して！」

そう言うと、オデイナーは棒を手に取り、大胆に一本、ガリガリと二つの四角を貫く線を描いた。

「これが幹線道路。昨日見た国道十五号線みたいな道よ！」
自信たっぷりにそう言った。

3—4. 最初はタワマン

「まあ、それは正解じゃろうな」

レヴィアもうなずく。

「へえ、オデイーヌすごい！」

レオはうれしそうに笑った。

「そして次はこうよ！」

気を良くしたオデイーヌは幹線道路に直角に、商業地を貫く線を引く。

「うんうん、いいね！」

レオはこぶしを握って喜んだ。

「でも……。この次は難しいわ……」

「そう言う時はこうじゃ」

レヴィアは棒を取ると、中心部は碁盤の目状に、周辺部は放射状に線を引いた。

「なるほど、さすがレヴィア様！」

オデイーヌは笑顔で言った。レヴィアは上機嫌で、

「一辺が十キロだから、太い道は五百メートルおきにするか……」

そう言いながら一旦線を足で消して再度描きなおす。

「そして、細い道を補完的にこうじゃ……」

そう言つて緻密に線を描き込んでいった。

「わあ！ すごい、すごい！」

レオは大喜びである。

「はい、じゃあ、次は建物ね。最初はタワマンからー」

そう言つてシアンは、レゴブロックみたいな四角い棒を二十本出してレオに渡した。

「え？ タワマン？」

棒を受け取りながら首をかしげるレオ。

「五十階建ての高層住宅だよ。これ一本で五千人が住めるんだ」

シアンはニコニコしながら言う。

「え!! ちょっと待つてください。ここにタワマン立ってるんですか!？」

焦るレヴィア。

「だつて十万人住むんでしょ？」

「うちの星では最高が五階建てなんです。ちょっとオーバーテクノロジー過ぎません

？」

レヴィアは冷や汗を浮かべながら言う。

「レヴィアは細かいなあ……。ドラゴンなんだからガハハハ！　って笑ってればいいんだよ」

「ガハハハ……。ですか……」

そう言ってる間にも、レオはタワマンを住宅地に建て始めた。

「綺麗に並べたいね」

レオは目をキラキラさせながら、タワマンの棒を近づけたり離したりして配置に悩む。

「商業地を囲むようにしたらどう？」

オデイーヌが声をかける。

「そうだねえ……。商業地には何を建てるの？」

レオがシアンに聞く。

「何建てようかねえ、ショッピングモールにオフィスビルにスタジアム……。それから美術館？」

「学校は？」

オデイーヌが聞く。

「学校は住宅地の公園側がいいんじゃないかな？　病院も」

そう言いながら、シアンはいろんな形のブロックを取り出して地面にバラバラと転が

した。

「わあ！ すごい！」

レオは喜んでブロックを見ながらイメージを膨らませていく。

「この長細いのは何？」

オデューヌがシアンに聞く。

「これはオフィスビルだね。僕たちの事務所や会議場とかも中に作ろうかなくて」

「ずいぶん……、高いビルですね」

「二百階建てだよ」

シアンはニコニコして言う。

「シアン様、それはさすがに……」

レヴィアは渋い顔をして言った。

「君はガハハハ！ って言ってなさい」

シアンはレヴィアをにらむ。

「……。ガハハハ……」

レヴィアはうなだれながら言った。

この後、倉庫や工場などのブロックも並べていった。



ブロックを並べ終わると、シアンは満足そうに街並みを眺め、
「それでは動かしてみよう」

と、言つて両手を地面に向けた。

すると、プロジェクションマッピングのように地面に映像が投影される。それは自動車走り、人が動いているシミュレーション画像だった。人はタワマンからたくさん湧き出して、それぞれショッピングモールやオフィスビルに行き、また、バスに乗つて工場の方へ移動していく。

「わあ！ すごい！」

レオはキラキラした目で人の動きを追つた。

「あれ？ ここで人がたまつちやつたわ」

商業地への太い道で、渡ることができずに多くの人がたまつてしまつている。

「横断歩道では数万人はさばけんのじゃな」

レヴィアが言う。

「じゃあ、立体交差だな」

そう言つてシアンは板を商業地域の道の上にかぶせる。

すると人の流れも車の流れもスムーズになった。

「この板は何ですか？」

オデイナーヌが聞く。

「ここは二階の高さがずーつと続く通路だよ。下には道がそのまま通ってるんだ」
「バツチリだね」

レオはうれしそうに言った。

3—5. チートな風力発電

「ずいぶんとコンパクトな街になりましたなあ……」

レヴィアが腕組みしながら街を眺める。

「タワマンに詰め込んだからね」

シアンが言う。

確かに住宅地がタワマン二十本で終わってしまっている、都市の主要機能は一キロ四方にほとんど入ってしまったている。

「これ……、上手くいきますか？」

レヴィアは首をかしげながら聞いた。

「さあ？ やってみよう！」

シアンはそう言うのと両手をバツとあげた。

すると、一行の周りのあちこちから轟音が上がり、タワマンが二十本、ニヨキニヨキと下から生えてきた。

「へっ!?」「すごい！」「うわああ！」

驚く三人。

生えてきたタワマンはきつちり五十階、青空にどこまでも高く伸び、威容を放ちながらみんなを囲んだ。各階には丁寧^{テイジヤウ}に作られたペランダがあり、紺色を基調としたタイル張りでスタイリッシュなデザインが見事だった。大きな窓ガラスが陽の光を反射しその存在感を際立たせる。

「空からも見てみよう！」

シアンはそう言うと、レオとオデューヌを両脇に抱えてツーつと飛んだ。タワマンの間をすり抜けながら徐々に高度を上げていく。

「うわあ〜」「見事ね……」

二人とも先進的なビルの作り、デザインに虜^{とりこ}となる。

角部屋は全面ガラス張りで中の様子が少し見える。中にはすでに家具が配置されており、すぐにも住み始められそうだ。

どんどんと高度を上げていくと、さっき置いたブロック通りの配置になっているのが分かる。ただっ広い平原に建つ二十本のタワマン。それはさっきまで何もなかった原野をあっという間に先進都市へと変えてしまった。

「これが……僕の国……?」

レオがつぶやく。

「どう? 気に入った?」

シアンがニコニコしながら聞く。

「うん！ 最高！ 僕は丸太小屋を、みんなで作っていくのかと思ってたんだ」

「ははは、いまから丸太小屋四万戸に変える？」

「いや、これがいいよ。新しい国なんだもん、こうでなくっちゃ！」

レオはうれしそうに答える。

「確かにこれ見たらみんな驚くわ。新しい事をやろうとしていることがビシビシ伝わってくるし、とてもいいかも……」

オデーヌは瞳をキラキラさせながら言った。

二人ともタワマンの威容に感動しながら、しばらく林立するタワマン群を見入っていた。



「もう住めるの？」

地上に戻ってきたレオはタワマンを見上げながら聞いた。

「住めちゃうんだなこれが」

うれしそうにシアンは言った。

「いやいや、電力無かったら住めませんよ。上下水道も……」

突っ込むレヴィア。

「レヴィアは細かいなあ……」

シアンはそう言いながら、海の沖の方に両手を向けて何かつぶやいた。すると、上空はるか彼方から何かが下りてくる。

「あれは何？」

レオは海の方を見あげ、手で日差しをよけながら聞く。

「風車……なの？」

オデューヌは不思議そうに言う。

「そう、風力発電だよ」

そう言いながらシアンは三本羽根の風車を次々と十本、沖に建てた。

「ちよつと……、大きくないですか？」

レヴィアが不思議そうに聞く。

「高さ一キロメートル、一本で百MWの発電量だよ。」

シアンはドヤ顔でいう。

「一キロ!? 技術的にそんなもの作れるんですか?」

「物理攻撃無効属性つけたから、台風来ても大丈夫だよ」

ニコニコしながらそう言うシアン。

「……。チートだ……。ガハハハ……」

思わず天をあおぐレヴィア。

続いてシアンは、ツーッと飛びあがって道の予定地の上へ行くと、エイツ！　と言つて両手を道に沿つて振り下ろした。すると、ズーン！　という地響きが起こり、人が入れるくらいの大きな溝が何キロにもわたつて一直線に通つた。続いて赤い魔方陣を展開すると、溝へ向けて鮮烈な熱線を照射しはじめた。

「ぎやはははー！」

うれしそうな声が響き渡り、溝からはジュボボボボ！　という土が溶ける音と共に焼け焦げた臭いが漂ってくる。

「これは……何？」

レオが怪訝けげんそうな顔をしてレヴィアに聞く。

「共同溝じゃな、電気、水道、光ファイバーなどを通すんじゃないらう」

シアンは飛び回りながら次々と道に溝を掘つては熱線で固めていく。

しかし、主要幹線道路だけでも数百キロメートルに及ぶ。それは大変な作業だった。三人は超人的なシアンの工事を眺めていた。

「これが出来たらあそこに住めるんですか？」

オデューヌはレヴィアに聞く。

「浄水場と下水処理場と、後は風車からの電気の配線じゃなあ」

レヴィアがそう答えると、シアンがツーツと飛んできて言った。

「じゃあ、それ、レヴィアよろしく！」

「えっ!?! 規格とかは？」

「適当に決めて。日本クオリティでよろしく! きやははは！」

そう言つてまた飛び立っていった。

啞然あぜんとするレヴィア……。

しかし、シアンばかりに活躍させてもいられない。ドラゴンとしての誇りもあるのだ。子供たちにはいい所を見せておかねば。

「ぬーん、浄水場……十万人分じゃろ? どのくらいのサイズじゃ? 一人毎日二百リットルとして……、商業施設が……、うーん……」

レヴィアはぶつぶつとそうつぶやきながら、『脚の湖』の方へと飛んで行った。

3—6. 寿司の洗礼

昼過ぎには主要部の電気と水道が開通したので、一行はタワマンに入る。

大理石造りの広いエントランスには間接照明が上品に並んでおり、脇の壁面には滝のように水が流れ、まるで高級ホテルのロビーのようだった。

「うわあああ……」「すごい……」

レオもオディーヌも瞳をキラキラさせながら歩く。

「こつちだよ」

シアンが案内する先にはエレベーターホールがあった。

ポーン！ とエレベーターがやってきて、レオが恐る恐る最上階のボタンを押す。

高速に上昇するエレベーター。

「耳がツーンとするね……」

レオがシアンに言う。

シアンはそつとレオの頬をなで、耳を治した。

ポーン！

あつという間に五十階に着く。

長い廊下の角部屋まで行ってドアを開けると、豪華なメゾネットづくりのパーティールームになっていた。窓の向こうには海が見え、風力発電の巨大な風車とどこまでも続く水平線が広がっている。

「うわあー！」

レオは走って窓に張り付くと、しばらく真つ青な海を眺めていた。

オディーヌは辺りをキョロキョロと見回しながら、皮張りのソファアに無垢一枚板の大きなテーブル、シックな間接照明など豪華な調度品に圧倒されていた。そして、

「どこの部屋もこうなの？」

と、シアンに聞いた。

「ここは特別な共用のパーティールーム。他の部屋はこんなに広くないよ。でも、家具はここと同じだよ」

「全部この家具なの!? すごい……贅沢ね……」

そう言って絶句した。

もちろん、王宮の家具や調度品は金をあしらってあつたりして豪華ではあるが、オディーヌにはシンプルでシックなこの部屋の方が上質に感じられてしまった。

スラムの人たちがこんな素敵な部屋で贅沢な家具を使うようになる。それは特権階級として君臨していた王族としては、なかなか受け入れがたい思いがあるようだ

た。



「お昼にするぞー」

レヴィアはそう言つて、シアンに頼まれた握りずしを持ってきてテーブルに並べた。
「うわあ、綺麗……。でもこれは……。何？」

レオが聞く。

「これは生の魚じゃな」

「えっ!? 魚は生で食べちゃダメなんだよ!」

驚くレオ。

「わはは、日本の寿司はその辺考えて作られとるから安全じゃよ」

「いただきますーす!」

シアンが大トロをつまんでパクリと一口でいく。

「えっ!? 手で食べてる!」

レオはビックリ。

そして、シアンは目をギュツとつぶって、

「うほお……。うまああ……」

と、恍惚とした表情を見せる。

「寿司は手で食べてもいいんじゃないが……我は箸はしで行かせてもらう」

レヴィアはサーモンを取って食べた。

「サーモンから行くの？ おこちやま？ プクク……」

シアンが冷やかす。

レヴィアはモグモグと味わいながら、

「おこちやまでもいいんです！ 美味しい物から行くんです。そもそも、最初はタイかヒラメが王道ですよ？」

と、言い返した。

「ふーん、そうなんだ……」

そう言いながらシアンはまた大トロをつまんだ。

「あー！ ダメですよ！ 大トロは一人一つです！」

レヴィアが突っ込む。

「ふーん、そうなんだ……」

そう言つてシアンはパクリと食べた。

「もお……。お主らも早く食べて！ 全部喰いつくされちゃうよ！」

レヴィアはレオとオディーヌに言った。

「じゃあ一つ……」

レオは恐る恐るカンパチを手で取り、醤油をつけて食べる……。

「……、ぐっ！」

レオは急に真つ赤になって洗面台に走った。それを見たシアンは、

「レヴィア、ワサビ抜かなきゃ……」

そう言いながらサーモンをつまんだ。

「え？ 私のせい？」

レヴィアは少し困惑し……、トボトボとせき込んでいるレオのところへ行き、背中をさすった。

「えっ？ 何があつたんです？」

オデイーヌはシアンに聞く。シアンはマグロのネタをはがして、緑色のワサビを見せた。

「この香辛料がね、美味しいんだけど辛いんだよ。オデイーヌも辛いのが苦手ならはがして食べて」

「そ、そうなのね……」

オデイーヌはそう言うのとマグロの赤身を持ち上げ、しげしげとワサビを眺めた。

そして、丁寧にワサビをはがし、マグロの赤身を恐る恐る食べる……。

「あら……。美味しい！」

オデイナーは目を輝かせて言った。

「美味しいですよ。僕、ここの寿司はお気に入りなんだ」

そう言つてシアンはニコツと笑うと、えんがわをつまんだ。

3—7. 動かせる内臓、肺

食後に緑茶をすすりながら、みんな無言で作りかけの街を眺めた。

澄みとおる青空にポコポコと浮かぶ白い雲。そして燦燦さんさんと照り付けてくる太陽は壮観なタワマン群を宮崎の大地に浮かび上がらせる。朝には山だらけだった土地に林立する高層ビル群、それはとても現実離れた夢物語の様な風景だった。

「ここに十万人が住むんだね……」

まだ実感がわかないレオがつぶやく。

「そうだよ、これがレオの描いた夢の形だよ」

シアンが言う。

「なんだかちよつと……怖くなっちゃうね……」

「あれ？ そんなこと言っているの？」

シアンは意地悪な顔で笑った。

「あつ、もちろんやるよ！ 最後までやり抜くよ」

レオは焦って言い、シアンはうなずきながら、愛おしそうにレオの頬をなでた。

「でも……、こんな建物、どうやって出したの？」

不思議そうにレオは聞く。

「え？ 世の中にはいろんな人がいてね、こういう建物のデータを緻密ちみつに設計する事に人生をかけちゃう人がいるんだよ」

「これはその人の作品……なんだね？」

「そうそう。その人が作って公開しているのを持ってきて具現化させたんだ」

「具現化……。シアンがそんなことをできるのは、宇宙の理ことわりを知ってるから？」

「そうだよ」

「この世界は0と1の数字でできてるって……言ってみましたよね？」

オディーヌは横から聞く。

「そうそう、君たちも全部0と1だよ」

シアンはニヤツと笑いながら言った。

「それ……。全く実感わかないですよね。もちろん、渋谷で見せてくれた宇宙エッセンスの根源が紡いでいるというのはなんとなくわかるんですが、自分も世界も数字だというのがピンと来なくて……」

「うんうん、じゃあ、こうしたらいいかな？」

シアンは手を打ってパン！ と大きな音を立てた。

すると世界はすべてが色を失い、真つ白な世界に描かれた線だけの世界が展開した。

テーブルも部屋もタワマンも海も大地も、全てのものが線だけで雑に描かれたワイヤーフレームになったのだ。それはまるで工事現場の鉄骨だらけの風景の様な無味乾燥な世界に似てるかもしれない。ただ、シアンだけはいぜんとして綺麗な女の子のままだった。

「え!? これは一体……」

オデイーヌは自分の手を見たが、手も指も針金づくりのロボットのよう線に描かれた姿になっていた。

「これがこの世界の本当の姿だよ」

「本当の……、姿？」

オデイーヌは指を動かしてみた。すると、線が動き曲がるし、触ると感覚もある。しかし、ただの線画だった。

「この世は0と1で記述された情報でできている。普段見えているのはただの虚像さ」

そう言ってまたシアンはパン！ と手を叩き世界は元に戻った。

「虚像の方がきれいだけどねっ。きやはははは！」

うれしそうに笑うシアン。

「虚像……、偽物の世界ってこと？」

「偽物じゃないよ、でもうつろいやすい夢みたいな世界ってこと」

そう言つてシアンは置いてあつたスプーンを一つとると、エイツと言つて、それを二つに増やして見せた。

「えっ!?! 増えた!?!」

驚くオデイーヌ。

「情報だからいくらだつてコピーもできるし……、ほらっ」

そう言いながらシアンは、スプーンをお玉サイズに大きくして見せた。

「うわあ……」

オデイーヌは唾然^{あぜん}としてその巨大スプーンをながめた。

「属性を『金』にすれば……」

すると、スプーンは金色になつた。

「ええっ!?! まるで……魔法ですね……」

「情報でできた世界つてこういう世界なんだよ」

にこやかにシアンはそう言つた。

「それ、私にもできますか?」

「もちろんできるよ。ただ、そのためにはこの世界の本当の姿をしっかりと知らないと

ダメなんだ」

「それはどうやったら分かりますか?」

するとシアンはオデイーヌの胸をポンと軽く叩き、

「全てはここにあるよ」

そう言つてニコツと笑つた。

「胸……ですか？」

「胸じゃなくて心。オデイーヌは頭で考えすぎ。心で世界をとらえてごらん。全て分かるから」

「こゝ、心……ですか……」

悩むオデイーヌ。

「まずは呼吸法だな」

「呼吸？」

「人間でね、唯一動かせる内臓、それが肺なんだ。だから肺を動かす呼吸は人間の根源にアクセスするスイッチになるんだよ」

シアンは人差し指を立てて優しく説明する。

「えっ!? そんな事初めて知りました」

「ふふっ。頑張つてごらん」

シアンはうれしそうに言つた。

「ねえ、僕もできる？」

レオが聞く。

「もちろん！ 特にレオは……すでにカギを持っているからね。比較的簡単だと思うよ」

「え？ カギ？ 何の？」

「まあ、そのうちに気がつくんじゃないかな？」

シアンはニヤツと笑い、お茶をすすった。

レオはキツネにつままれたような顔をして考え込む。物心ついてからずっと奴隷だった自分が、なぜ王女も持っていないようなカギを持っているのか……。カギとは何か……いつか分かる時がやってくる。それは楽しみでもあり……。一抹の不安を予感させた。

3—8. MacBook Pro

「シアンって凄いわ。何だってできちゃうんですね」

オデューヌは感嘆して言う。

「いやいや、人間についてはダメだね。人間は複雑すぎるから簡単なデータ処理じゃどうしようもないんだよ」

シアンは肩をすくめる。

「そうか、だから国づくりでも人については僕がやるんだね」

レオが横から言う。

「そうそう。人間はコピーしたりできないからね。今いる人たちの心を動かさないとダメで、そういうのに僕は向いてない。そこはレオとオデューヌに期待してるんだ」

そう言つてニッコリと笑つた。

「あれ？ 私は？」

レヴィアが寂しそうに突つ込む。

「あー、もちろん！ レヴィちゃんにも期待してるよー」

シアンは焦りながらレヴィアの肩をポンポンと叩いた。

「いいですよ……、私になんて気を遣わなくても……。ちゃんと二人をサポートしますから……」

すつかりいじけてしまうレヴィア。

「そうそう！ パルテノン神殿！ レヴィちゃんに合わせてアレンジしといたよー！」

そう言つてシアンはテーブルの上に、純白の柱がきれいに並んだ神殿の模型を出した。それはパルテノン神殿をベースにして、屋根にドラゴンの意匠を加えた荘厳なものだった。

「うわあー」「素敵……」

レオとオデイーヌは思わず声が出る。

すねたレヴィアはチラツと眺め……。

口元をちよつとニヤけさせながら、

「悪く……ないかもしれないですね……」

と、淡々と言つた。

「またまた、嬉しいくせに」

シアンがレヴィアのほほを指先でツンツンとつついた。

「うしし、いいものですな」

レヴィアはそう言つて相好を崩す。

「そしたら、エーイ！」

シアンは山に向かって両手を開いた。

直後、山の稜線が爆発し……、爆煙がゆつくりと流れていくと、白亜の神殿が煌めく。

「うおおお！」

レヴィアは思わず叫ぶ。

木の生い茂る山の稜線にいきなり現れた神殿は、澄み通った宮崎の青空の元で陽の光を浴び、林立する純白の柱を美しく浮き上がらせる。屋根のところのドラゴンはタワマンと同じオレンジ色のタイルがあしらわれ、街の風景ともなじんでいた。

「綺麗……」

オデイーヌはウツトリとして眺める。

「うちの国のシンボルですわね！」

レオはうれしそうに言った。

「うむ、私の威光が隅々にまでいきわたるのう」

レヴィアは上機嫌だった。

「あそこにはどうやって行くんですか？」

オデイーヌがシアンに聞いた。

「え？ 行けないよ？」

「へ!？」

驚くレヴィア。

「だって、一般人には近づくこともできない白亜の神殿って方がカッコいいじゃん」
「どこからも見えるけれども誰にも行けない……。確かにイイかも……」

レオがうなずきながら言う。

「え？ 誰も……こないの？ そ、そうなの？」

レヴィアはそう言っつて、寂しそうに肩を落とした。

◇

「さて、午後はどうしようか？」

シアンがみんなに聞いた。

「スタジアムとかを建てようよ！」

レオがうれしそうに両手を上げる。

「うんうん、商業地ね」

「病院と学校もですな」

レヴィアが言う。

すると、オデューヌは、

「あの一、パソコンを一つ欲しいのですが……」

と言った。

「あ、そうだね。じゃあ、オデューヌはパソコンで調べものしてて」

そう言ってシアンは、MacBook Proの16インチモデルとパソコン操作の本をドサドサツと出した。

「うわっ！ あ、ありがとうございませす！」

オデューヌはずっしりとした鈍く銀色に輝くMacBookを手に取り……、どうしたらいいのか分からず困惑する。

「どれ、基本を教えてやろう」

レヴィアはMacBookを取り上げると、パカッと開いて電源ボタンを押した。



夕方になって宵闇が迫ってくる頃には街の整備はほぼ終わった。

道には街灯がともし、シヨツピングモールやオフィスビル、消防署に美術館など各建造物にはライトアップが施されており、静かな夜の訪れの中で街は綺麗に光のハーモニーを奏で始める。

大通りには大きなイチョウ並木が整備され、丁寧なライトアップが上質な街の雰囲気を出している。

パーティールームに集まった一行は街を見下ろしながらその光のハーモニーを感慨

深く眺めていた。

「綺麗だね……」

レオはそつとつぶやく。

すると、一台のバスが静かに大通りを走ってきてバス停に留まった。

「あれ？ 誰かいるの？」

オデューヌが驚く。

「あれは自動運転じゃよ。テスト運行させとるんじゃ。ぶっつけ本番では怖いから
う」

「自動運転……、何でもアリですな……」

オデューヌはゆっくり首を振った。

レオが描いた自由の国は、こうしてたった一日で主要機能を備えてしまった。もちろん、ハードウェアが整っても動かし、使う人がいなければただのゴーストタウンである。国づくりはいよいよ勝負所へと差し掛かっていく事となる。

3—9. ヒレステーキ 280g

「あー、疲れた——！ お腹すいたよ——！」

シアンはそう言つてソファアに倒れ込み、手足をバタバタとさせて暴れる。

「あー、何食べますか？」

「ウーバーイーツでみんな好きな頼もう！」

シアンが元気に答える。

「へ!?! 出前ですか!?!」

「田町のうちの会社に届けてもらえばいいじゃん！ レヴィアは頭固いんだからあく」

「いや……、あそこ、全宇宙の最高機関ですよ？ 出前なんて届けさせちゃったら消され

そうですが……」

「んなことないよ。みんな使ってるよ」

そう言いながらシアンは寝つ転がつてiPhoneをいじる。

「じゃ、会社からの引き取りはお願ひしますよ。私なんか気軽にけるようなところ

じゃないんですから……。怖い怖い……」

レヴィアはそう言つてブルツと体を震わせた。

「はいはい……。あ、僕これ！ ヒレスステーキ 280g（ライス無）ね」
シアンはそう言つて情報をレヴィアの iPhone に送つた。

「ステーキ！ ステーキいいですね！ 私もこれにしようかな……」

レヴィアは肉の写真を食い入るように見つめる。

「えっ、僕もステーキがいいな……」

そう言つてレオはレヴィアの iPhone をのぞき込んだ。

「あはは、280gはお主じゃ食べきれんぞ」

するとオディーヌは、パソコンを見ながら

「私はリブローズがいいな」

と、言つた。

「へ？ 自分で検索したのか？ お主、もうそんなことまでできるのか？」

「ふふっ、午後にパソコンを必死に頑張つたんです」

そう言つてニコツと笑つた。

「あつ！ そうだ、サラダもどこかで頼んどいてね」

シアンはそう言つと、大きくあくびをしてソファで居眠りの体制になる。



三十分ほどして、レヴィアはシアンを起こす。

「シアン様、料理届いたそうですよ〜」

シアンは豪華なソフファーで気持ちよきそうにすやすやと寝ている。

返事がないので、困惑しながらシアンをゆらすレヴィア。

「シアン様〜!」

するとシアンは、

「むうーん!」

と言いながら、寝返りを打ってピュツ! と目にも止まらぬ速さで腕を振った。

と、その瞬間レヴィアの前髪がパラパラッと舞い、後ろの窓ガラスがパキツ! と

言つて斬られた。

「へっ!?」

焦るレヴィアが振り返ると、正面に見えるタワマンがズズズズと重低音を響かせながら動いているのが見えた。

レオとオディーヌもあわてて窓に駆け寄り、タワマンを見た。

タワマンは中層階を斜めに切断され、切れ目に沿つて滑り落ちていつている。

「ああつ!」「壊れちやう!」

二人とも唾然あぜんとしてその恐ろしい崩壊の様子をただ見守っていた。

やがてタワマンは上部がゆっくりと崩落し、爆発音を伴いながらバラバラになつて地

面に散らばった。

直後、激しい地震のように床が揺れ、三人は床にしゃがみこむ。

「キャ——！」「うわあ！」

テーブルのマグカップは床に落ちて転がった。

「シアン様を起こすのはこれからは禁止じゃ……。とほほ……」

レヴィアはそう言つて、短くなつてしまつた前髪を指先でつまんだ。



全然起きないシアンをあきらめて、レヴィアは田町の会社へとおもむく。

会社は高級マンションの中にあり、レヴィアは緊張しながら呼び鈴を押した。

「はーいー」

若い女性の声がする。

「シアン様のお使いですね、料理をとりに来ました」

「あら？ どうぞ」

そう言つてガチャツとロックが開いた。

恐る恐るドアを開けると、奥から品の良い女性が現れ、

「どうぞ、上がってください。ただ……」

と、言いにくそうにしている。

レヴィアはスリッパに履き替え、奥に進むと、ステーキの匂いが漂ってくる。

「あれ……?」

怪訝そうな顔で広間に入ると、会議テーブルで会社の人たちがステーキを食べていた。

「へっ!?!」

見ると中にはシアンがいて、美味しそうにヒレステーキにかぶりついている。一体何が起こったのか分からず、レヴィアは呆然とその様子を眺めていた……。

3—10. シャトーブリアン

「シ、シアン様……？ なぜ……？」

「あれ？ レヴィアどうしたの？」

シアンはニコニコしながら聞いてくる。

「どうしたって、そのステーキを取りに来たんじゃないですか……」

「へ？」

シアンは不思議そうな顔をする。

すると神々しいまでに美しい隣の女性が、ジト目でシアンを見て言った。

「シアン、分身誰か忘れてない？」

するとシアンは手を叩いて、

「あつ！ そうだった、そうだった！ 寝ぼけてたよ、ゴメンね」

そう言つて頭をかいた。シアンは同時に複数存在しているので、たまにこういう同期ミスが起こる。ステーキを注文したまま寝てしまった分身の行動が、共有されていないなかつたのだ。

「私の分が無くなつちやつたじゃないですかあ……」

レヴィアはしよんぼりとうなだれる。

「起こしてくれば良かったのに」

シアンは無邪気にそう言う。

「起こしましたよ。そしたらタワマンぶった切られたんです」

レヴィアはちよつとムツとして答える。

「へ？ タワマンを？」

「真つ二つになつて崩壊しちゃいましたよ」

「それは、大変な事だね……、アチャー……」

シアンは確認したらしく、額に手を当てた。

「後で直しておいてくださいよー」

レヴィアはトゲのある声で言った。

すると、隣の女性は

「ごめんなさいね。松坂牛のシャトーブリアンを用意させてるから許して」

そう言つて手を合わせてウインクした。

「こ、これはヴィーナ様、恐縮です」

レヴィアはビビリながら頭を下げた。

彼女はシアンの同僚で、少し怖い女神様だった。

「では、帰りますよ。あの人が自分で起こしといてくださいね！」
レヴィアはシアンにそう言つて、タワマンへと帰つて行つた。



レヴィアがパーティールームに戻つてくると、すでにテーブルの上にはステーキが並んでいた。熱々の黒い鉄板プレートが四つ、ジュージューと美味しそうなおいしそうな音を立てながら煙を上げている。

「いただきますーすー！」

シアンがいの一番に席に着くと、ナイフでステーキを切り始めた。

「おうー！ やわらかーいー！」

歓声を上げるシアン。

ステーキは表面はカリツと軽く焦げるように焼かれているが、切り口は鮮烈な赤い色のままで、美味そうな肉汁がじわつと浮かんでいる。

「あつー！ 僕もー！」

レオ達もやってきてテーブルを囲む。

「シアン様、こちらでも食べるんですか？」

レヴィアはジト目でシアンを見る。

「別腹だからねー！」

そして肉汁が滴るしたたぶ厚いレアの松坂牛をほおばり、

「うほお！ こっちの方が美味しい！」

と、歓喜の声を上げ、恍惚とした表情を浮かべた。

それを見たみんなは、負けじとステーキにかぶりつく。

「えっ!? これ本当に牛肉ですか？」

オデイーヌがビックリしてレヴィアに聞く。

「これは松坂牛、日本最高級の牛肉じゃよ」

「こんな柔らかくて芳醇なステーキ生まれ初めて……。王宮でも食べられないわ

……」

オデイーヌも恍惚として旨味しびに痺れている。

「かーっ！ 美味いっ！」

レヴィアも感激する。

「レヴィア！ 酒だよ酒！」

シアンがせつつく。

レヴィアはモグモグとほお張りながら空間を切り、中から赤ワインを出した。

「こんなに美味しい牛肉にはこういう重い赤ワインが良さそうですね」

そう言いながら指先で器用にコルク栓を抜くと、ワイングラスに注いでシアンに渡

す。シアンはクルクルつとワイングラスを回し、空気を含ませると、ふんわりと立ち上ってくるスミレの香りにうつとりし、クツと飲んだ。

そして、目を大きく見開くと、

「いやこれ、最高だね……」

そうつぶやくと幸せそうな表情を浮かべ、目をつぶった。



その後本かワインを開け、ずいぶんいい気分になったころ、シアンがレオに聞いた。

「で、国名はどうするの？」

「えっ？ 国名……そうだよね、決めないと……。みんなが喜んでるイメージの名前がいいんだよね……」

そう言いながらレオは首をかしげた。

するとオディーヌはMacBookを叩いて候補を探す……。

「喜び……ねえ……、ジョイ、デライト、アレグリア……？」
と、つぶやいた。

「アレグリアか……、少しひねってアレグレア……」

レヴィアが首をひねりながら言う。

「それはひねったうちに入らないって！」

シアンが笑う。

渋い顔のレヴィア。

レオが続ける。

「じゃあアレグリト……、アレグリル……、アレグリス……、ん!? アレグリスはいいかも!」

レオはうれしそうにみんなを見回す。

「あつ、大切なことなんだからじっくり考えて!」

慌てるオデューヌ。

「僕はいいと思うよ」

シアンは赤ら顔でそう言つて、ワイングラスをキューつと空けた。

「喜びの大地、アレグリス……ね。いい感じじやな」

レヴィアはちよつと渋い顔で言つた。

「意味も音もいいんだからこれにしよう!」

レオはうれしそうにグツとこぶしを握つた。

3—11. アットホームな職場です

「で、明日は何するんだい？」

レオは、

「えっとね。日本のネットに人材募集広告を出そうと思うんだ」

そう言っつてニコツツと笑った。

「へ!?! 日本に?」

驚くレヴィア。

「だって、『IT分かる人いないとこの国回せない』つてオデイナーが言うんだもん」

オデイナーが続けた。

「国の管理は結局情報の管理で、そのためには情報システムが不可欠ですよね? それつてこの星の人には無理ですよ」

「いいね!」

赤ら顔のシアンはサムアップしながら上機嫌に言った。

「いやいやいやいや、そんなの管理局セントラルに怒られますし、そもそも地球の管理者が許すわけ
ないですよ!」

レヴィアが立ち上がって断固とした調子で言った。

『『いい』って』

シアンが答える。

「へ!？」

「ヴィーナさんが『構わない』って言ってるよ」

シアンはニコニコしながら言う。

「え? あ……、そ、そうですか……」

レヴィアはそう言いながらゆっくり腰を下ろした。

「それでですね、国民全員にスマホを配りたいんですが……、大丈夫ですか?」

オディーヌは恐る恐る言う。

「いいよー!」

シアンは即答する。

「いやいや、スマホ配ったら基地局建ててSIMカードや番号管理システム動かさないと

ならないですよ?」

レヴィアが眉間にしわを寄せて言う。

「ん、任せました!」

シアンは酔いの回った声で返す。

チャー企業でWebサービスを開発していたが、無能な上司にわがままな顧客という環境にウンザリとしていたのだ。

異世界は大好きなラノベで毎日のように親しんでいるものの、さすがに虚構であると割り切っていた。しかし、もし、これが本当の動画であるとしたら異世界は本当にある事になる。それは思いもかけなかった事態であり、零は仕事が手がかず、何度も何度も飛んでくるドラゴンの動画を食い入るように見入っていた。

そして、しゅんじゅん巡しゅんした後に、零は意を決すると応募フォームに必要事項を記載し、送信ボタンを押したのだった。

3-12. ITエンジニア採用面接

翌日、零のところにGmailのアドレスからメールがあつた。Zoom面接の案内だった。日程をいくつかある中から選んで返信すると、すぐに確定の返事が届く。いたずらにしては手が込み過ぎていると思ひ、零はドキドキしながら面接の時間を待った。

面接時間がやってきた。パソコンにはパーテイルームのテーブルに並ぶ四人と零の映像が並ぶ。

「よ、よろしくお願ひします……」

インカムをつけた零は緊張しながら切り出す。

「私は採用担当のオディーヌです。今回はご応募ありがとうございます。GitHub見させていただきましたが、素晴らしい技術力ですね」

オディーヌはニコツと美しい笑顔で話した。

「あ、いや、それほどでも……」

零は謙遜する。

「それでは志望動機について教えてください」

「異世界に興味がありまして、もし動画みたいなどころがあるなら行ってみたいなど

……。それから、新たな国づくり、とてもやりがいがありそうだったので」

「あの動画はあるがママをiPhoneで撮っただけです。現実ですよ」

「では、異世界は本当にあると……?」

「あるというか、私たちからしたら日本が異世界なんですけどね」

苦笑するオデイナー。

「あ、そ、そうですよね」

「ちよつと技術的な質問いい?」

シアンが横から口を出す。

「は、はい」

シアンはパソコンを手元につけてくると、GitHubの画面を共有し、そこからソースコードを一つ選んで拡大した。

「ここの処理だけ、DB叩くならこう書いた方が正しくない?」

そうやってシアンはチャットにソースコードを打ち込んだ。

「あつ! ……。でも、このテーブルはこうクエリかけた方が、出てくるデータの順番が都合がいいんです」

「ふーん、なるほどね……」

シアンはそう言っとうなずき、パソコンを元の位置に戻した。

「何か質問はありますか？」

オデューヌが聞く。

「設立準備委員会というのは何人いるんですか？」

「これで全部じゃ」

レヴィアが答える。

「え？ 見たところ皆さんお若いようですが、この四名だけで国づくりを？」

困惑する零。画面に映っている四名はどう見ても全員十代だった。

「街の様子は動画で見たじゃろ？ あれ何日で作ったと思う？」

「何日って……四人ですよ？ 何年かかっても無理……そうですが……」

「一日じゃ」

「へっ!？」

「一日で街を作れるメンバーなんじゃよ」

レヴィアはドヤ顔で言った。

「そ、それは感服しました……」

零は圧倒される。林立するタワマンに巨大スタジアム、一体どうやったら一日で作れるのか？ 本当だとしたら異世界とは常識の通じないすさまじい所……。零は背筋がゾクツとした。

「メンバーは豪華ですよ」

オデイナーはニツコリと笑って言った。

「あ、治安とかは大丈夫ですか？ 魔物が出たり盗賊が出たりは……」

「治安は大丈夫。うちの軍事警察力は宇宙一、米軍を瞬殺できるくらい最強じゃ」

レヴィアは目をつぶり、ちよつと気が重そうに言った。

「米軍を瞬殺!? この四人で……つてことですよ……ね？」

「実質一人じゃがな」

レヴィアは淡々と言い、シアンは、

「きやはははー!」

と、笑った。

零はこの荒唐無稽な話をどう考えたらいいのか悩む。とは言え、ウソを言っているような感じではない。ドラゴンが火を噴いていたが、あの不可解なエネルギーを使えば本当に米軍を瞬殺できるかもしれない……。でもドラゴンが米軍を？ それはまさにファンタジーの世界の話だった。

「他に質問は？」

オデイナーが聞く。

「えーと……。一度参加したら異世界に行きつばなしですか？」

「基本そうなります。ただ、止むに止まれぬ理由があったらその時は帰れます。異世界の事は一切口外してはなりません」

「守秘義務……ですね」

「そうです」

「職場はどこになりますか？ その部屋ですか？」

「あー、どうですかね？ ここでもいいし、タワマンの好きな部屋でもいいし……」
「オフィス使おうよ！」

レオが言った。

「え？ ああ、あのビルもう使えますか？」

オデイーヌがシアンに聞く。

「ん？ ネットさえつなげればOK。レヴィアよろしく！」

と、シアンはレヴィアに振る。

「わ、わかりました……」

レヴィアは渋い顔でうなずいた。

「ということ、動画で出てた超高層ビルのオフィスになりました」

オデイーヌはニコツと笑って言った。

「そ、それは凄いですね。分かりました。ありがとうございます」

零は頭を下げる。

「どうですか？　うちで働いてくれますか？」

オデューヌは少し上目遣いで瞳をキラッと光らせて言った。

零はその美しいまでの鋭い視線にゴクツとツバを飲む。この答一つで採否が決まる事を本能的に感じたのだった。ここですぐに『はい』と言えなければ不採用だろう。しかし……、異世界など地球の常識が全く通じないはず。どんなリスクがあるか分からない。命の危険だつてあるだろう。

零はうつむいて逡巡する。夢見ていた世界に飛び込むなら今この瞬間しかない。全てを捨て、命の危険を冒してでも行くか……。零はグツと奥歯をかみしめた。

ふうつと大きく息をつく、零は腹を決め、バツと顔を上げる。そして、

「ぜひ働かせてください！　必ずやご満足いただく結果をお見せいたします！」

そう、明るい顔で言った。

オデューヌはニコツと笑うと、

「結果はまたメールでお知らせします。本日はありがとうございました」

そう言って丁寧に頭を下げた。

果たして、翌日零のところに採用通知メールが届いたのだった。

こうして日本のITエンジニアがジョインする事になった。

3—13. 少年の外交

「次は移民の受け入れじゃな」

レヴィアが言った。

「スラムのたくさんの人たちに来てもらわないとね」

レオはニコニコして言う。

「しかし、どうやって周知し、どう来てもらうか……うーん」

レヴィアは腕を組んで悩む。

「お父様に相談してみるわ！」

オデイーヌが言う。

「王様、いいって言うかな？」

レオは心配そうにオデイーヌを見つめる。

「スラムの貧困層たちは犯罪の温床となったりして、国としても手を焼いていたから協力してくれると思うわ」

「良かった！」

「でも……、そんな犯罪の温床となってる人たちを連れてきちゃったら、この国壊れちゃ

わなにかしら……」

「うーん、衣食住を保証してあげれば変わると思うんだけどね……」

するとレヴィアが、スマホみたいな小さな装置をレオに渡して言った。

「そういうお主らにこれをプレゼントしよう」

「え？ これは何？」

「ウソ発見器じゃ。こうやってグラフが出て、ウソだったら赤の方に振れ、本当だったら緑の方に振れるのじゃ」

「これって……どう使うの？」

レオは不思議そうに言った。

「試しに『レヴィア様は凄いい』って言ってごらん」

レヴィアはニヤツと笑って言った。

「分かったよ。レヴィア様は凄いい！」

レオがウソ発見器に向かってそう言うと、グラフは緑に振れた。

「おお、お主は良い子じゃなあ……」

レヴィアはうれしそうにレオの頭をなで、レオは少し照れた。

「じゃあ、レヴィア様嫌い！」

レオがそう言うと、グラフは赤に振れた。

「うむうむ」

レヴィアはご満悦だった。

「そしたら、これを入国審査に使えばいいってことですよね？」

ウソ発見器に感心しながらオデイーヌは言った。

「そうじゃな。『犯罪を犯しません』って宣誓させて、赤くなつた人には入国をお断りすればいい」

「でも、考えを改めたら入れてあげたいよね」

レオは言う。

「そうじゃな、毎日パンを配りながら生活を安定させ、心に余裕を持たせてもう一度宣誓してもらえばええじゃろ」

「うんうん、みんなに来てもらいたいからね！」

レオはニコニコして言う。

「そうと決まれば、お父様に話してくるわ！」

オデイーヌは元気に立ち上がり、レヴィアにつなげてもらった空間から王宮へと入って行った。



その日の午後、一行は王宮におもむいた。

豪華な会議室に通され、メイドが紅茶を丁寧にサーブしていく。薄い純白のティーカップには可愛い赤い花の装飾が施されており、気品が漂っていた。きつと名のある職人の手による物だろう。

レオは静かに紅茶を飲みながら、何度も王様に頼む事を思い出し、確認する。

手の込んだ刺繍が施されたレースのカーテンには柔らかな日差しが当たり、室内をふんわりと照らしていた。

シアンがお茶菓子のクッキーを美味しそうに食べる、ポリポリという音が静かな室内に響く……。

ほどなくして王様が現れた。

「ようこそお越し下さされた。娘も世話になっていて申し訳ない」

王様は席に着くと一同を見回しながら威厳のある声で切り出した。

「オデューヌには助けてもらっています」

レオはそう言ってニコツと笑った。

王様は小さな少年、レオが答えたことにちよつと驚いて言う。

「それで今日は何やら提案があるとか……」

「スラムの人たちを僕たちの国で引き取りたいんですが、いいですか？」

レオはニコツと笑って言った。

「え!? あの人たちを?」

「そうです、そうです。まずこれを見てください」

レオがそう言うと、オディーヌがパソコンで街の動画を見せた。

「な、なんだ……、これは……」

驚く王様。

「ドラゴンの領地にこういう街を作りました。ここの住民としてスラムの人たちを呼び寄せたいのです」

「ちよ、ちよつと待って、この高い建物は何かね?」

「ああ、この一番高いのがオフィスビルで、低いビル群がタワマン、住居です」

「ほわあ……。こんなのどうやって建てたの?」

王様は圧倒されながらレオに聞いた。

「シアンがエイツで建てたんです」

「きやははは!」

シアンはうれしそうに笑った。

王様はシアンの方を向いてただ茫然ぼうぜんと見つめていた。

「お父様、スラムの人たちを引き取るのは、ニーザリにとってもいい事でしょう?」

「それはそうだが……。それには安全保障条約とか脅威にならない保証を得ないと

……」

王様は困惑した。こんなオーバーテクノロジーを実現するドラゴンの国とどう付き合ったらいいのか皆目見当がつかなかったのだ。

「別にニーザリを攻めたりせんよ。条約なら問題ない。レオ、ええじやる?」

「うん、僕は大丈夫」

「ちよつと待って、君が意思決定者なのか?」

王様が驚いてレオを見る。

「あ、自己紹介がまだでしたね。この国、アレグリスの国王のレオです」

そう言つてレオはニコツと笑つた。

「い、国王……?」

啞然とする王様。

前代未聞の恐るべき国を率いる存在が、まだ幼いこの子供だという事実には、王様は困惑する。この少年との付き合い方がニーザリの将来をも左右するのだ。王様はただ茫然とレオを見つめた。

3—14. 夢の強さ

「まあ、国王と言つても、権力を持つのは一時的じゃがな。体制が整つたら国権は議会に移譲される」

レヴィアは淡々と説明する。

「レ、レオさんは何か特別な……方なのかね？」

困惑しながら王様が聞く。

「ただの奴隷あがりの何もできない子供です」

ニコツと笑つてレオは言つた。

「奴隷あがり……」

「あ、でも、貧困と奴隷をこの世界からなくそうと誓つてるのは特別かも？」

レオはちよつと首をかしげて言つた。

「レオはね、自由の国を命がけで作るんだつて。そんな子なかないでしょ？」

シアンがニコニコしながら言う。

「国づくりの発案者……ということ……か。しかし、国というのはそう簡単に作れる物じゃない。理想だけでは国は回らんぞ」

王様はいぶかしげにレオを見る。

「理想を追わなければ理想は実現できませんよね？」

レオはニツコリとして答えた。

王様はレオの目をジッと見る……。

「……。そうか……。なるほど……」

王様はそう言つて目をつぶり、何度か大きくうなずいた。

そして相好を崩すと、

「なるほど、レオさんは特別な方だな」

そう言つて少し羨ましそうにレオを見た。

ちよつと恥ずかしそうにはにかむレオ。

「で、オデイナー。お前は どうするんだ？」

王様はオデイナーに振る。

「しばらくはアレグリスのお手伝いをしようかと……」

「王妃になるつもりは？」

王様はニヤツと笑つて言った。

「え!？」

驚くオデイナー。

そしてレオと目を見合わせる……。

「まあ、それは若い二人が自由に決めたらええじやろ」

レヴィアはニヤリと笑みを浮かべて言った。

レオもオディーヌも真つ赤になって下を向く。

「分かった。それでは相互不可侵の安全保障条約を前提に移民計画を受け入れよう」

王様は満面の笑みで言った。

「あ、ありがとうございます」

レオは真つ赤になったまま頭を下げた。

こうして、アレグリスはスラム街のそばの倉庫を一つ借り受けることになり、そこを拠点として移民受け入れ事業を進めることになった。



まだ朝もやが残る静謐せいひつな早朝——。

「ねえ、レオ、ちよつと見て！」

タワマンの一室で寝てるレオをオディーヌが起こす。

「ん？ どうしたの？」

乗っかっていたシアンの腕をどけ、目をこすりながら起きるレオ。

「これよこれ！ チラシができたわ」

徹夜明けのハイテンションでオデイナーヌが紙を渡す。

それは街の写真がふんだんに盛り込まれた、スタッフ募集のチラシだった。

「うわあ！ 綺麗だね！」

レオは喜んで写真を一つずつ眺めていった。

「これをあちこちの掲示板上に貼ったり、配ったりしてスタッフを集めましょ！」

「うんうん、いいね！」

レオはうれしそうに言った。

「あれ……？ これ、何のマーク？」

あちこちに使われている、龍が火を吹いているような意匠のマークを指して言った。

「あ、これは国章ね。案として作ったの。どう？」

「国章!? カッコイイね！ さすがオデイナーヌ！」

レオは目をキラキラさせながらオデイナーヌを見上げた。



その日はみんなで手分けして、街のあちこちにチラシを貼ったり、置かせてもらっていった。

チラシが無くなるころにはもう夕方だった。

「あー、お腹すいた〜」

レオがぐったりとしながら言う。

「ふふつ、お疲れ。じゃあ、零を呼んで歓迎会かねて食べに行くか！」

シアンがニヤツと笑って言った。

「あれ？ 零って大丈夫なの？」

「んー、暇してそうだから大丈夫じゃない？」

シアンは宙を見つめながら言う。

そして、何度か軽くうなずき、

「恵比寿の焼き肉屋になったよ」

そう言ってニッコリと笑った。

3—15. 海王星の衝撃

恵比寿へ転移し、四人でテーブルを囲んでいると零がやってきた。

「こ、ここにちは……」

長身でボサボサの髪をした細身のエンジニア、零はこげ茶のジャケットを着て現れる。

零は若い女の子三人と子供が一人という面子に、いささかとまどっていた。異世界のチームなのだから常識は通用しないとは分かっているものの、実際目の当たりにするとやはり動揺してしまう。

「零さん、はじめまして！」

レオがニコツと笑って言うど、

「お、お世話になります……」

と、軽く会釈をした。

「ビールでいい？」

シアンはニコニコしながら聞いた。

「は、は、は」

零に座ってもらい、自己紹介をしていると飲み物がやってくる。

「それでは、零君のジョインを祝ってカンパニー！」

「カンパニー！」「カンパニー！」「カンパニー！」「カンパニー！」

シアンは一気にジョッキを空けると、

「すみませーん、ピッチャー二つお願いしまーす！」

と、叫んだ。

そして、レヴィアは肉の皿を取り、そのままドサツと金網の上に肉を全部落とした。

「こんなのはチマチマやってちゃいかん」

そう言いながら金網の上の肉をならす。そして、まだ全然火の通ってない赤い肉を

ゴツソリ取るとそのまま丸呑みした。

零は一気飲みするシアンや、女子中学生の様な金髪おかつ娘の豪快なテンションに

圧倒される。

「予定通り来られそうですか？」

オデイーヌは笑顔で聞いた。

z o o mでは良く分からなかったオデイーヌの美貌に、零は気圧されながら答える。

「あ、もちろん。すでに引継ぎに入ってます」

「それは良かったわ」

零は気を落ち着けるべく、ビールをゴクゴクと飲んだ。

そして大きく息をつくと聞いてみる。

「ぐ、具体的には何作ったらいいんですかね?」

するとレヴィアは書類をドサツとテーブルに置いた。

「要件定義と画面遷移図はやったので、レビューから入って欲しいんじゃない」

驚く零。まさかもうここまで進んでは思わなかったのだ。

急いで書類を手に取り、パラパラと見ながら零は言った。

「えーと、これは……」

「中央銀行のシステムじゃ。これ以外にも決済システム、預金システム、個人情報管理システムなどがあるぞ」

「ちゅ、中央銀行!」

「そうじゃ、貨幣を発行し、金利を設定し、銀行にお金を貸し出したり国債を管理したりするシステムじゃ」

「ちよつと待ってください、私は中央銀行の業務なんてわかりませんよ?」

「大丈夫、必要な機能は全部そこに書いてる」

そう言いながら、レヴィアは超レアな焼き肉を頬張った。

「これは……、責任重大ですね……」

考え込んでしまう零。

「大丈夫、僕がちゃんとチェックするからさ」

シアンは楽しそうにそう言つて、ピッチャーをゴクゴクと一気飲みして空けた。

「あ、ありがとうございます。ちなみにサーバーとかはどこに置くんですか？」

「海王星だよ」

「えへえ!!」

レヴィアはそう叫んでせき込んだ。

「ダ、ダメですよ！ あそこは業務システムで使つていい所じゃないですよ」

「えー、だって、安定したシステム基盤があるなら使わなきゃ損でしょ？」

「そりゃ、ここ数万年ほどは最高に安定してますが……」

「大丈夫、僕が繋げておくからさ」

「……。私は知りませんよ」

そう言つてレヴィアはヤケクソ気味に焼き肉を頬張り、ビールで流し込んだ。

零は話が呑み込めなかった。数万年安定稼働している海王星のサーバー。地球の常識とはかけ離れている。幾ら異世界だと言つても飛躍し過ぎではないだろうか？

「あの……、海王星というのは……？」

零がおずおずと聞く。

「太陽系最果ての惑星だよ」

シアンがニコニコしながら言う。

「え!?! 本当にその海王星なんですか? 人がいけるような距離じゃないですよ!?!」

「この世界は全て情報でできてるんだ。この意味、零なら分かるんじゃない?」

シアンはちよつと挑戦的な笑みを浮かべた。

「全て情報……? それはつまり物質も……位置も距離も……合成された幻想……つまりゲームみたいな仮想現実でことですか?」

零は信じられないという表情で淡々と答えた。

「ほう、お主、さすががじゃな」

レヴィアはそう言つてビールをグツと飲んだ。

「いやいや、えつ? そんなことあるんですか?」

零は混乱してしまう。

「じゃあ、反証あげてみたらどうかかな?」

レヴィアはこんがり焼きた焼肉を零の皿に乗せながら言う。

「この肉も幻想つてことですよね? 食べることもこの肉体も幻想……」

零は手元をじっくり見まわし困惑する……。

柔らかく動く指先も、焼き肉の弾力も滴る肉汁も、すべてコンピューターで作られた

ものだという話を、どう考えたらいいのか全く分からなかった。

そして、ビールジョッキをグツと飲み、座った目で断固たる調子で言う。

「こんな精緻な造形が、合成された計算結果というのはちよつと理解できません。こんな膨大な計算処理を提供できるコンピュータシステムは作れません」

この世界が仮想現実だなんて、そんなことを認めたら自分はそのゲームのプレイヤーだということになってしまう。零はアイデンティティをかけて全力で否定する以外なかった。

3—16. 壮大な宇宙の神秘

「ふうん、必要な計算量が多いから無理っていうのね？」

シアンはニヤニヤしながら言う。

「そうですねよ！ この世界をシミュレーションするって事は、シュレディンガー方程式を解いて分子の動きからシミュレートしなきゃダメです。そしてそんなのスパコンつかったってたった一グラムの物体すら計算不可能です！」

零は勝ち誇ったように言い放った。

「ふうん、零は人体のシミュレーションをする時、シュレディンガー方程式なんて解くの？」

シアンは目をキラツと光らせて、うれしそうに聞いた。

「えっ!? じ、人体……ですか……。そのスケールだったら……。分子シミュレーションなんて……。意味ないから……。やらない……」

零は元気なくなってきた、うつむいてしまった。

「でしょ? 正解はこちらー!」

シアンは楽しそうに箸を指揮者のように振った。

すると、ボン！　と言つて零の身体はワイヤーフレームになった。

「へっ!？」

スカスカの線画になってしまった零は驚いて立ち上がり、両手を見る。しかしそこは白い線の針金細工のような手があるだけであり、向こうが透けて見えていた。

「な、何だこれは!？」

零はあわてて、針金のロボットみたいに見える自分の手を握った。しかし、触つてみるとちゃんと感覚があり、力も暖かさも感じる……。しかし……。向こうが丸見えで透け透けなのだ。

零はしばらく考え込む。この非常識な事態をどう考えたらいいのだろうか……？

しかし、幾ら考えても答えは一つしか考えられなかった。

そして、ゆっくりと口を開く。

「こう……。計算させてるんですね……。なるほどこれなら……」

そう言つて零はぐったりとうなだれると、しばらく動かなくなつた。

「零……。大丈夫?」

レオは零の針金づくりの顔をのぞきこみ、心配そうに言う。

零は針金の手でジョッキをガツとつかむとそのまま一気飲みし、観念したように言つた。

「全て理解しました。この世界がどうやって作られているかも想像がつかしました」
「うんうん、零は優秀だなあ」

シアンはうれしそうにして零の身体を元に戻した。

「で、サーバーが海王星にあるってことですよね？」

「そうそう」

「でも、全てが情報でできてるってことは、そこも根源じゃないってことですよね？」

零は鋭く切り込む。

「ほほう、お主すごいな」

レヴィアは感心して言った。

「我々は広大な情報の海に生まれ、生きる情報生命体……。あなた達の異世界はこの地球とどういう関係なんですか？」

零は吹っ切れたように饒舌じょうぜつに聞いた。

「パラレルワールドじゃな。多くの分身インスタンスの中の兄弟世界じゃ」

「でもですよ？ そんなことができるなら、私が書くようなプログラミングコードなど自動で合成できちゃうんじゃないですか？」

「そんなことやったら多様性が失われるじゃろ？」

「えっ？ 多様性？」

「効率を求めるならそもそも世界など作らんよ。我々に求められているのは多様性じゃ」「なるほど！ なるほど！ 我々は試されてれるってことですね？ この宇宙を司る大いなる存在に！」

零は興奮して言った。

「まあ……、そうじゃな……」

「その大いなる存在って誰なんですか!？」

零は壮大な宇宙の神秘に触れ、大興奮して聞いた。

レヴィアは渋い顔をしながらシアンを見る。

「きやははは！」

うれしそうに笑うシアン。

「まあ、それはデリケートな問題じゃな」

レヴィアはお茶を濁す。

それでも零は、この世界の真実に触れたことに感動し、スクツと立ち上がると、「わたくし、零は今！ モーレッツに感動しております!! この素敵な出会いにカンパーイ！」

と、勢いよくジョッキを掲げた。

「カンパーイ！」「カンパーイ！」「イエーイ！」「よろしくう！」

ジョッキのビールをゴクゴクと飲み干しながら、零は今までの悩みが全て吹っ飛んでいくような爽快感に浸っていた。今ここに見えている世界は幻想にすぎず、異世界は無数にあり、今、そこへのアクセスを手に入れたのだ。それは零の世界観をひっくり返すコペルニクスの転回だった。

3—17. 新人絶好調

乾杯を繰り返し、ラストオーダーの頃には零はグデングデンに酔っぱらっていた。

「シアンの姐さん！ 僕、分かっちゃいましたよ！ 姐さんがこの宇宙を作ったんだ！」

「ブブー！」

「ウソだあ！ 姐さん全部わかっているし、無敵じゃないですか！」

「惜しいけど違うんだな。きやははは！」

シアンも気持ちよさそうに真つ赤な顔で笑った。

「零、大丈夫？」

「ジュースしか飲んでないレオが心配そうに聞く。」

「これはこれは国王陛下！ 陛下は偉大だ！ その若さでなぜこんな大宇宙の要人に一
目置かれるのさあ！」

店内で叫ぶ零。

「お水貰いましょうか？」

「オデューヌが心配そうに声をかける。」

「これは王女様！ なぜ王女様はそんなに美しいのですか？ もうドキドキしっぱなし

ですよ！」

ナチュラルに口説き始める零。

「お主、そのくらいにしておけ」

そう言つてレヴィアは水を出して零に勧める。

零は受け取つた水を一気にゴクゴクと飲み干した。

そして、レヴィアをジツと見る。

「な、なんじゃ？ ほれちやダメじゃぞ」

「レヴィア様！ 見た目女子中学生みたいなのに、その存在感、何か秘めてますよね？」

偉大な匂いがあります！」

「おお、お主！ 見る目あるのう！ よし！ 飲もう！ カンパニー！」

そう言つて二人はまたジョッキをぶつけ、一気に空けた。

「くはーっ！ 美味しい！」

零はそう言つて焦点のあわない目で幸せそうに微笑む。

レオとオデイーヌは目を見合わせ、お互い渋い表情で首をかしげた。

翌日、オデイーヌのところには記憶を失つた零から謝罪のメールが届いていた。



スタッフ面接の日、倉庫で準備を整えていると、一人の若い男がふらりとやつてきた。

ネイビーのマリンキャップをかぶり、年季の入ったカーキ色のジャケットを羽織っている。

男はテーブルを拭いているレオを見つけると、

「おい、小僧！ 責任者を呼べ！」

と、横柄に怒鳴った。

レオは男を見上げると、

「責任者は僕だよ。なあに？」

と、笑顔で返した。

「はっ!? お前のようなガキが責任者!? ふざけんな！」

男はテーブルをドン！ と叩き、レオをにらんで喚く。

「歳は関係ないですよ。いい国を作ろうという情熱が全てです」

レオは一步も引かず、丁寧に言い切った。

男はレオをにらんだまま動かない。

レオも笑顔のまま男の目を見据える……。

奥でシアンは指先を不気味に光らせて揺らしながら、男の出方をうかがい、倉庫の中には緊張が走った。

すると、男は相好を崩し、言った。

「お前、いい度胸だな……。悪かった。それで……。チラシ読んだんだが、いい事ばかりしか書いてない。こんなうまい話あるわけがないだろ？ 一体何を企んでるんだ？」

「企むも何も、この国の方がおかしいんです。貧しい子供が飢えて死んでるのに、偉い人は贅沢三昧^{ぜいたくさんまい}。だから僕は当たり前の国を作るんです」

レオは淡々と説明した。

「ほほう、こつちの方が当たり前……。お前凄いな……。だが、こんなきれいごと上手くいくはずがない。俺が化けの皮を引つpegしてやる！」

男は吠えた。

「化けの皮つて？」

「そうだな……。例えば衣食住完備というが、食べ物はどうするんだ？ 十万人ということは毎日三十万個ものパンがいるぞ。どうやって調達するつもりだ？」

男は勝ち誇るかのように言い放つ。

レオはプロジェクターをいじり、スクリーンにパン工場紹介の動画を流す。

「うちにはパン工場があるんだよ。一万平米で生産量は一日五十万個」

動画では、次々とベルトコンベヤーの上を丸いパンが流れてくる様子が流れる。

「何だこれは……」

圧倒される男。

さらにレオは奥からロールボックスパレットに満載された二千個のパンをゴロゴロと引つ張ってくる。そして一つとつて男に渡した。

男は無言で受け取り、匂いをかいで一口かじった……。

「美味しい……、何だこの美味しいパンは!？」

日頃大麦まじりの硬いパンしか食べていなかった男は、白くふわふわで芳醇なパンに絶句する。

「これをね、欲しい人に欲しいだけ配るんだ」

レオはうれしそうに言った。

「配るって……、無料か？」

「衣食住にお金は取らないよ。そう、アレグリスの憲法に書いてあるからね」

見たこともない巨大な工場で作られる、食べたことのない上質なパン。そしてそれを無料で配ることをうたった憲法……。その圧倒的な先進性に男は言葉を失った。

3—18. スタッフ一号

「どう？ スタッフやらない？」

レオはニコツと笑って言う。

「いやいやいや、こんなすごいもの誰も見逃さない。どっかしら必ず攻めてくる国はあ
るし、盗賊も狙うだろ？ 維持できんよ！」

「あー、軍事警察力の心配は不要じゃ。うちを狙う者は瞬殺じゃよ」
レヴィアが横から説明する。

「瞬殺？」

「うちの防衛大臣にかなう者はこの世に存在せんのだじゃ」

そう言つてレヴィアはシアンの方を向いた。

「防衛大臣？ あのネーチャンが？」

男は怪訝けげんそうにシアンを見る。

シアンはニコニコしながら近寄つてくると、

「どっからでもかかっておいで。拳交わした方が話早いよ」

そう言つてクイクイツと手招きをした。

男はシアンをなめるように見回して言う。

「ほう……。可愛い顔して言うことがエグいね。俺が勝つたら……。そうだな、俺の女になつてもらおうよ」

「いいよ！ 勝てたらね」

シアンはニコツと笑った。

男は軽くステップを踏みながらシアンに近づき、ジャブを二、三回放った。

軽くスウエーして避けるシアン。

そして次の瞬間、鋭い右ストレートが放たれた。

が、シアンが素早く指先で触れた瞬間、右腕は四角い白黒のブロックノイズ群を残して消えてしまった。

「へっ!？」

焦る男。ニヤリと笑うシアン。

「うわああああ！」

ヒジから先が消えてしまった右腕を見て喚く男。

「君の女にはなれなかつたなあ、ふふふつ」

シアンはうれしそうに笑った。

男はきれいさっぱり無くなってしまった右腕を何度も見直し、

「ちよ！　ちよつと待てよ！　俺の腕返せよお！」
と泣き出してしまった。

シアンはニヤツと笑って言った。

「男がそう簡単に泣かないの！　レヴィアちゃん治してあげて」

「えっ!?　私ですか？」

いきなり振られて焦るレヴィア。

「た、頼むよお」

男はレヴィアの手を握り、みつともない顔で頼んだ。

レヴィアは手を振り払うと、渋々男の右腕の残った所をしげしげと眺め、

「シアン様の消し方複雑だから難しいんですね……」

と、つぶやく。そして目を閉じて右腕を両手で包むと、スーッと動かして消えた腕を

再生させていく……。

「お、おお！」

男は歓喜の声を上げ、右手を開いたり閉じたりしながら治った手を確認する。

「うちのスタッフやってみたいと思う？」

シアンが聞いた。

「……。あんた達すごいわ……。そうだな……。うちの連中をみんな受け入れてくれる

ならやるよ」

「うちの連中って何人？」

レオが聞く。

「だいたい千人だ」

「それはいいね！」

レオはうれしそうに言った。

「入国審査は要りませうけどね」

奥からオデイーヌが出てきて言った。

ポカンとする男を、オデイーヌは鋭い視線で男を射抜く。

「あ、あんたは……、もしかして……」

男がビビって後ずさりしながら言う。

「オデイーヌ、出てきちやイカンって言っとったじゃろ……」

レヴィアが渋い顔をして言う。

「お、王女様、見苦しい所をお見せしました……」

男はひざまずいてうやうやしく言った。

「スタッフやるって本気なの？ あなたの所属を述べなさい」

オデイーヌは威厳のある声で言った。

「お、俺……じゃない、私はヴィクトー。スラムの自警団のヘッドやってます」
「そう。じゃ、うちの運営にも協力してくれるかしら？」

「王女様のご命令なら……」

「命令を聞くのでは意味が無いのよ。ヴィクトーがやりたいかどうかが大切よ」

「……。チラシを初めて見た時、ふざけた連中だと怒りを覚えました。それで乗り込んできたんですが、少年の語る言葉、見せられた数々の奇跡、感服いたしました。ぜひ、非力ながら私も、少年の理想の実現に尽力させていたいただきたいと思えます」

そう言うと、ヴィクトーはまっすぐな目でオデイーヌを見た。

「よろしい！ それではお前はこれより我がアレグリスのスタッフよ」

オデイーヌはニッコリとそう言い渡す。

「ははあ！」

ヴィクトーは胸に手を当てて深く頭を下げた。

3—19. アレグリス始動

ヴィクトーの精力的な活動でスタッフも集まり、受け入れ態勢が整い、零も転職してきて、いよいよ移民受け入れの日がやってきた。

移民受け入れ所の奥の広間で、レオは木箱の上に乗ってみんなの前に立った。約五十人のスタッフが雑談をやめ、一斉にレオの方を向く。

「大将！ たのんますー！」

ヴィクトーが太い声をあげた。

レオはみんなを見回し……、とてもうれしそうにニコツと笑った。

「みんなありがとう……。言おうとしたこと、いっぱいあつたんですが、全部忘れちゃいました……」

そう言つてちよつと目を潤ませて下を向いた。

「レオ！ 頑張つて！」

オディーヌが優しく掛け声をかける。

レオは大きく息をついて、しっかりとした目でみんなを見回して力強く言った。

「言いたいことはただ一つ……。貧困や奴隷のない国を作りましょう！ 人が人を虐げ

るような世界はもうやめましょう！ みんなで理想の国を作りましょう！」

レオは小さなこぶしをグツと握って見せた。

パチパチパチ！

湧き上がる拍手。

「レオちゃん！」

若い女の子が数人声を合わせて掛け声をかけ、レオは赤くなり、あちこちで笑い声が上がる。

「お前ら！ 国王陛下に失礼だぞ！」

ヴィクトーは怒るが、みんな楽しそうに浮かれていて誰も言う事を聞かない。

待ちに待った移民開始の日、それはスタッフのみんなにとっても待望の日だったのだ。

「では、端末のチェックスタートします！」

零が声をかけ、担当のスタッフが移動していく。

「レオ様すみません、私の指導が行き届かなくて……」

ヴィクトーはレオに謝った。

「いやいや、嫌われるよりいいですよ」

そう照れながら答えた。

「ああいう子がいいの?」

オデイーヌが真顔で聞く。

「えっ? いいとか悪いとかないよ……」

困惑するレオを見て、レヴィアは言った。

「大丈夫、オデイーヌが一番じゃろ?」

するとレオは真つ赤になつてうつつむき、小さくうなずいた。

「わ、私はそんなこと聞きたかつたんじやないのよ」

赤くなつて焦るオデイーヌ。

「ははは、若いってええのう」

レヴィアはうれしそうに笑つた。



移民の受付が始まると、倉庫の前には長蛇の列ができた。数千人の人たちが押し寄せたのだ。衣食住完備、それは日々の食べ物にも困つてきたスラムの人たちには、まさに理想郷だつた。

「最後尾はこちらでーす!」

プラカードを持った女の子が長蛇の列の後ろで声を張り上げる。

長時間並ぶことになつても移民希望者は誰も文句を言わなかつた。それだけアレグ

リスへの希望は大きかったのだ。

移民希望者が倉庫の入り口を入ると、二十人くらいごとにまとめられてプロジェクトでアレグリスの情報の動画が流される。まず、レオがあいさつし、街の様子、入居するタワマンの部屋、配られるスマホの使い方、学校のシステムが案内される。

この動画が流される度に歓喜の声が上がリ、中には涙を流す者もいた。

それが終わると宣誓の部屋に通される。そこではウソ発見器に向かって、犯罪は起こさないこと、国の発展に協力する事を誓ってもらう。予想に反してほとんどの人が無事通過していった。

次に生体情報を登録してもらい、スマホが渡される。お金のやり取りの仕方、国からの広報の受け取り方を覚えてもらう。

最後にタワマンの部屋割りをを行う。スラムの地域ごとに近い場所になるように、不平等にならないようにヒアリングを行いながら部屋を割り当てていく。

これが終わると空間接続のドアをくぐってアレグリスへの入国となる。

初めてアレグリスの街を見た者は全員、タワマンを見上げ、その先進的な街の姿に驚き、しばらく言葉を失う。動画では見ていたものの、実際にその姿を見るとその威容に圧倒されてしまうのだ。

レオはそう言う人たちに声をかけていく。中にはレオの手を握りしめ、泣き出してし

もう者までいた。

そのうちにレオは移民たちに囲まれ、胴上げが始まってしまふ。

「国王陛下、バンザイー！」「バンザイー！」「バンザイー！」

街に響き渡る万歳の声に合わせ、レオは空高く舞った。

澄み渡る宮崎の空に高く高く、大きく手を広げ、レオは理想が形になっていく実感に浸りながら何度も舞った。

星の命運をかけた賭けにレオはまさに勝ちつつあったのだった。

初日は予定時間を大きく超え、五千人を超える移民を受け入れることができた。

4—1. 建国宣言

それから一カ月、住民は二万人を超え、スラムからだけじゃなく、平民も参加してくれるようになった。特に手に職を持った職人が、アレグリスの先進的な工業にひかれてやってくる人が出てくるようになり、国としての安定感が出始めてきた。

そして今日はアレグリスの設立記念式典の日だ。

スタジアムに全国民を集め、レオが建国を宣言する。

スタジアムに二万人の人たちが集まり、巨大動画スクリーンを背景に設置された特設ステージを見つめていた。

オディーヌがステージに現れ、照明が当たり、巨大スクリーンにその美貌が余すところなく表示された。

「それでは、アレグリス初代国王、レオⅡアレグリスの登場です！」

するとスタジアムの上空に巨大な影が走った。何だろうとみんなが見上げるとそれは巨大なドラゴンだった。

巨大な羽根をはばたかせ、厳ついウロコを誇示し、減速しながらステージへと降りてくる。その巨大な鋭い爪と恐ろしいギョロリとした燃えるような瞳に観客席の住民た

ちは凍り付き、戦慄が走った……。

そのドラゴンの背中に動く小さな人影……レオだった。レオは黒いスーツに身を包みみんなに手を振っている。

ドラゴンがステージの前に着地する。

ズズーン！ とステージアムが揺れた。そして咆哮を一発。

ギユアアアア！

その恐るべき重低音は住民たちの腹の底に響いた。

レオは、ピョンとステージの上に飛び移り、

「レヴィアありがとう」

そう言つてレヴィアに声をかけると、レヴィアはウインクをする。そして、バサツバサツと巨大な羽根をはばたかせると大きく飛び上がり、一気に青空へと消えていった。

レオはマイクの前に進むと、観客席をぐるっと見回した。自分を信じてやってきてくれた二万人もの住民たち。その光景はレオにとってまるで夢のようで、思わず胸が熱くなる。

「国王、ご挨拶をお願いします」

オデイナーヌが声をかける。

「みなさん、こんにちは！」

元氣よくレオが声をあげた。

ウオオオオオオ！

住民たちは可愛いレオの挨拶に歓声で答えた。

レオはそんな住民たちをニッコリと笑いながら見返し、手を大きく振りながら言った。

「みなさん、来てくれてありがとう！」

オオオオオオ！

さらにひととき大きな歓声が巻き起こった。

レオはその歓声を浴びながら、自分のやってきたことは正しかったのだという確信を得て、胸が熱くなった。

そして語りだした。

「僕は何もできないただの子供です。でも、理不尽な苦痛はこの世界からなくしたい、その想いの強さだけは負けません。そして、この想いに賛同してくれた仲間たち、彼らが僕に力をくれました。そして今日、こんなにたくさんの方を迎え、一人の子供の思い付きが現実の国となり、大いなる一步を踏み出すことができました！」

パチパチパチ！

住民は拍手で応える。

レオは観客席を見回し、大きく息をつくど、ピンと右手を高く掲げ、

「今日、ここに、アレグリス共和国建国を宣言します！」

と叫んだ。

ワアアアア！

上がる大歓声。そして上空で花火がポン！　ポン！　と破裂する。

レオは思わず涙をポロリとこぼした。物心ついた頃にはもう朝から晩まで労働を強いられ、理不尽な暴力におびえていた日々を思い出したのだ。自分だけじゃない、道端に餓死した浮浪児が転がされていたのは何度も見た。人権のない社会、それはもう終わりにしなければならぬ。そしてこれが解決への大いなる一歩なのだ感慨を新たに
した。

建国の式典は無事終わり、その後、各部門の担当者から業務内容の紹介と人材募集のプレゼンが行われていった。

4—2. 告げられた真名

控室にレオが戻ってくると、シアンは満面の笑みでレオに駆け寄ってハグをした。

「よくできました。カッコよかったですよ」

「ありがとう、シアンのおかげだよ」

レオもうれしそうにシアンを抱きしめた。

二人はしばらくいろいろな出来事を思い出しながら、お互いの体温を感じていた。すると、シアンはそつと離れ、

「賭けは君の勝ちだ。立派になったね。もう僕の役割も終わりだよ」

そう言つてちよつと寂しそうに微笑んだ。

「えっ……？　まだ……、まだだよ。まだ人が来ただけじゃないか！」

レオは終わりを告げるシアンに、不安を覚えて叫ぶ。

シアンはゆつくりと首を振ると、

「僕を待つてる星は百万個もあるんだ……」

そう言つて目をつぶった。

「いやだよおー！」

レオはシアンに抱き着いた。

シアンは愛おしそうにレオの頭をなでると、レヴィアの方を向いて、
「後は任せたよ」

と、静かに言う。

レヴィアは胸に手を当て、

「かしこまりました」

と、言つてうやうやしく頭を下げた。

「えっ！ やだやだ！ いかないで——！」

「楽しかったよ。またいつか……、会えるといいね……」

シアンは目に涙を浮かべながら言う。

「ダメダメ！ そうだ、お酒飲みに行こうよ！ エールを樽でさ！」

レオは必死に引きとめる……。

シアンはゆっくりと首を振つてうつむいた。

そして、静かに耳元で、

「ありがとうレオ。僕の本当の名前は『シアノイド・レクスブルー』。秘密だよ」

そう言うと、レオの頬にチュツとキスをする。

そして、愛おしそうに

「さようなら……」

と言うと、すうつと消えていった。

「えっ!?! シアン……。ウソだよね……。え……。う?」

呆然と立ちすくむレオ……。そして、

「うわあああ! シアン——!」

そう絶叫すると、ひざから崩れ落ち、涙をポロポロとこぼした。

あの日、短剣を拾ってくれた時からずっと隣にいてくれたシアン。レオにとつてもはや家族同然だった。

ブラックホールを操り、ジュルダンをアヒルにして、王宮でケーキをパクつき、一緒に東京を飛び、この街を作ったシアン。そして寝る時もいつも一緒だった。柔らかく温かく……。そして雑な宇宙最強の女の子。

「シアンのバカ——! うわあああん!」

レオは号泣する。人目もはばからず、オイオイと泣いた。

成功する事がこんなに悲しい事だなんて……。レオは失われたものの大きさに涙がとめどなく湧いてきた。

レオはひとしきり泣くと、起き上がってレヴィアの方を向き、真っ赤な目で言う。

「なんで引きとめてくれなかったんですか……。う?」

レヴィアは息を大きく吐くと、レオの目を見て丁寧に言った。

「シアン様の決められたことは絶対じや。我のような末端に発言権などない。あのお方はお主らが考えるより、はるかにずーっと偉いお方なのじやよ」

「そんな話じゃないよ……。一言だけでも……。引きとめて欲しかったのに……」

レオはそうつぶやくとガツクリとうなだれ、また泣きじやくった。

オデーヌはレオにそつと近づき、優しくハグをする。

時折会場からの地響きのような歓声が届く中、控室にはしばらくレオの嗚咽おえつが響いた。

4—3. 原理主義者の暴走

モチベーションの高いスタッフ、住民の献身的な努力のおかげで、アレグリスはどんどん整備が進んでいった。工場も農場も希望者に貸し出し、住民たちが自発的に生産を行うようになっていって経済も自発的に回るようになってきた。

そしてアレグリス産の産品は各国で高い評価を受け、高値で売れるようになってく。そうになると、移住希望者も増え、さらに生産力は上がっていく。また、アレグリスで新たな命も生まれ始め人口も順調に増えていった。

その日、ヴィクトーは兵器工場の所長を部屋に呼んだ。

「製造は順調かね？」

ヴィクトーは切り出す。

「自動小銃AK47は無事量産に入りました。構造が簡単なので出来もまずまずです」

「それは良かった。で、それを千丁急ぎでお願いしたい」

「え!? 契約では百丁……ですよね？」

驚く所長。

「急遽方針が変わったのだ」

ヴィクトーは力強い目で所長を見すえた。

「えっ!!」でも、防衛するのに千丁も要らないのでは……? AK47の性能は驚異的ですよ。百丁もあればどここの国の軍隊も瞬殺できる程かと……」

不安そうな所長。

「心配しなくていい。これは国王陛下のご意向なのだ」

「レオ様の……。そうであれば……。問題ないですが……」

「いいかね? アレグリスは人類の未来を担う国だ。万が一にも侵略を受けてはならぬのだ。そのためには軍事力だ……。わかるね?」

「は、はい……」

「悪いね! 至急増産体制に入ってくれたまえ。それから、グレネードランチャーRP G-7の開発も急いでくれよ」

そう言ってヴィクトーはニヤリと笑い、所長の肩をポンポンと叩いた。

「これはまた……。キナ臭いのう……」

パルテノン神殿の下、地下神殿でレヴィアは頬杖をつきながら画面をにらみ、つぶやいた。

レオたちに相談もなく勝手に軍拡を進めるヴィクトー。

不気味な動きはこの後も少しずつ地下で進行していったのだった。

いよいよ初の選挙の日がやってきた。これで権限を議会へと移譲してレオの仕事は完成となる。

テレビでは候補者の公開討論会が中継され、ウソ発見器のメーターが赤に振れるたびに観衆の笑いが起こってコンテンツとしても面白い仕上がりになっていた。

投票はスマホで行われ、締め切りと同時に結果が公表される。勝ったのはヴィクトーの自由公正党だった。ヴィクトーは自警団の人脈をベースに、国の立ち上げをしつかりと具体化していった点が住民に高く評価されたのだ。また、ウソ無くスパッと断定的に言い切る話術も頼もしいと好感されたようだった。

その夜、国権移譲式典が開かれ、レオから首相であるヴィクトーにドラゴンをかたどった金のプレートが受け渡された。

「ヴィクトー、頼んだよ」

レオはニツコリと笑いながら握手をした。

「国王陛下の理想は必ずやこの私が実現して見せます！」

ヴィクトーは熱い情熱を瞳にたぎらせながら、ガツシリとレオの手を握る。

オデューヌは拍手をしながら感慨深く二人を眺めていた。

レオの掲げた理想の挑戦はついにレオの手を離れ、羽ばたいていく事になる。

もう、レオには実権は無い。ただ、国の象徴として国民に愛される存在になったのだった。

「じゃあ、我もそろそろ行くとするかのう……」

「えっ?! レヴィア様も行っちゃうんですか?」

「もともとどこか一国に肩入れするのは禁忌なんじゃ。シアン様ももうおらんし、これ以上いたら管理局セントラルに怒られるわい」

「せめてレオに挨拶を……」

「湿っぽいのは苦手じゃ。達者でやれよ」

レヴィアはそう言うのと空間を切り裂いた。

「あ……。ヴィクトーは何やら企んどるぞ。注意しとけ」

レヴィアは思い出したようにオディーヌに言った。

「え? ウソ発見器では宣誓にウソは見られませんでしたよ」

「逆じゃ、レオの理想に感化され過ぎとる。過ぎた正義は暴走するんじゃ。まあ、収まるところに収まるしかないじゃろうが……」

「暴走つて?」

「ふふつ、お主ならもう分かっておろう。……。では、また縁があつたら……。な。楽しかったぞ」

そう言うとレヴィアは、空間の裂け目をくぐって自分の神殿へと帰っていった。

4—4. 制圧

その晩、レオは超高層ビルの執務室でぼんやりと夜景を眺めていた。眼下に広がる商業施設やスタジアムは美しくライトアップされ、多くの人が行きかっている。そして工業地帯のプラントたちも元気に稼働しており、煙突の上からは炎が立ち上り揺れていた。

多くの人の笑顔が溢れる素敵な街……、それはレオの理想そのものだった。ついにレオは夢を実現したのだった。

しかし……。

本音を言えばすごく寂しかった。ハチャメチャだけど常に元気をくれたシアン、彼女に翻弄されながらもいろいろ工夫して尽力してくれたレヴィア……。もう、彼らはいないのだ。そして、実権を失ったレオにはもう仕事もない。

理想を突き詰めたら寂しくなってしまった。頭では理解していたものの、胸にポツカリと穴が開いたように何をする気も起らなかつた。

「大人ならこういう時にお酒を飲むんだろうな……」

レオはボソッとそう言って目を閉じた。

コンコン!

誰かがドアを叩く。

「はい!」

返事をするオデイーヌが入ってきた。

「レオ、お疲れ様……」

オデイーヌは静かに言った。

「終わっちゃったね……」

「この星も消されずに済んだし、大成功だと思うわ」

オデイーヌもレオに並んできらびやかな夜景を眺めた。

「そうだね……。でもなんだか寂しくって……」

「私も同じ……。でも慣れなくっちゃ……」

二人はしばらく何も言わず、夜景を見ていた……。

「私も……。もう帰らないといけないわ」

「えっ!? オデイーヌも行っちゃうの!?!」

驚いてオデイーヌを見るレオ。

「だって、私はアレグリスの国民じゃないわ。ここに法的根拠がないのよ」

「そ、そんな……」

オデイーヌが建国に果たした役割は大きなものだったが、法治国家では例外は許されない。

「引継ぎが終わり次第、ニーザリに帰るわ」

目をつぶってうつむき、そう言った。

「そんなあ！ オデイーヌ、行かないで！」

レオはオデイーヌの腕をつかみ、泣きそうな顔で叫ぶ。

オデイーヌはレオの手にそつと手のひらを重ね、涙を浮かべながら、

「あなたはもう国王なんだから、言葉は選ばないといけないわ……」

そう優しく諭した。

「僕を一人にしないでよお！」

レオはオデイーヌの腕にしがみついて、ポロポロと涙をこぼす。

オデイーヌは何も言わずそつとレオを抱きしめ、可愛いすべすべとしたレオのほっぺたに頬ずりをした。

成功して夢をかなえたはずなのに、全てを失ってしまうレオ。

「いやだよお！」

その運命の非情さに打ちひしがれ、レオはいつまでも泣き続けた……。



翌日、国会が始まると、自由公正党は軍備増強の特別予算案を提出し、即時に全会一致で可決された。

それを聞いてレオは真つ青になる。

アレグリスの憲法では他国への侵略は禁止している。アレグリスの工場で作られている兵器はこの星の兵器に比べて圧倒的に先進的で、侵略など容易たやすかつたが、戦争による現状変更をレオが望まなかつたため日本の憲法を真似してこのようにしたのだ。

そして、防衛するのであれば、すでに十分すぎるほどの軍事力を保有していた。

それなのに軍拡を推進するという、レオはそこにヴィクトーのおそるべき野心を感じた。

レオはすぐさまヴィクトーを呼ぶ。

ヴィクトーは呼ばれる事が分かつていたかのように、すぐに執務室にやってきた。

そして、部屋をぐるりと見まわして、オーディーナや零をいちべつ一瞥するとレオに堂々と言う。

「国王陛下、何かありましたか？」

「なぜ軍拡などするのですか？」

レオは単刀直入に聞いた。

「国王陛下の理想をすべての国に広げ、この世から貧困と奴隷を無くします！」

ヴィクトーは悪びれることもなくそう言い放った。

「侵略戦争はダメだよ！ 多くの人が死ぬよ！」

「今、この瞬間も奴隷が過労や暴力で殺されています。彼らを救う事こそが死者を最小にします！」

「そんなのは詭弁きべんだよ。アレグリスを成功させ、模範となつて他国を少しずつ変えていくという話だつたじゃないか！」

「そんな方法では何十年もかかります。武力介入すれば一瞬です！」

ヴィクトーはグツと力こぶしを握つて言った。

「ダメダメ！ 僕がみんなに声をかけてくる！」

レオがそう言つて部屋を出ようとした時だつた。ヴィクトーはパチンと指を鳴らす。

すると、武装した兵士が十人ほど部屋になだれ込んできた。

「キャ————！」「うわあ！」

オデーヌや零はいきなりの展開に悲鳴をあげた。

武装兵たちは銃口をレオたちに向け、執務室を一気に制圧したのだつた。

「国王陛下、我々は国民代表です。国民が武力を望んでいるんです。国民主権、この国で一番偉いのは国民だつてあなたが決めたんですよ？」

そう言つてヴィクトーはニヤツと笑つた。

レオたちは両手を上げ、絶望の中拘束されたのだつた。

4—5. 託されたカギ

オフィスビルの地下室に三人は軟禁された。

「とんでもない事になっちゃった……」

レオは頭を抱える。

「レヴィア様の警告を生かせなかった……。ヴィクトーたちはお父様たちを襲うつもりだわ、何とかしないと……」

オディーヌは真っ青になって言った。

「何とかって……何か方法あるの?」

「シアンさんかレヴィアさんと呼ばれば解決ですが……」

零はそう言うものの、呼ぶ方法がない現実には肩を落とした。

レオたちはスマホも取り上げられ、外界とは隔絶されてしまっているのだ。

「何か方法ないかなあ……」

レオが頭を抱えながら言う。

三人は黙り込んだ。

どこかの換気扇のグォーンという鈍い音が、かすかに地下室に響いている……。

「あの……、この世界は幻想だって……言ってみましたよね……」

零が歓迎会の時のことを思い出して言った。

「そうね、情報でできてるって……」

オデューヌも思い出して言った。

「シアンは『知れば操作できる』と言ってた……」

「この世界を知る……、一体どうやって？」

零が聞く。

「呼吸がカギだって……言ってたわ」

「呼吸!? 知る事と呼吸と何の関係が？」

「分からないわ、でも肺が唯一動かせる内臓だって……」

「なるほど……、瞑想……かもしれないな」

零は腕組みをして言った。

「瞑想？」

レオが聞く。

「心を落ち着かせると無意識の中が見えてくるんだよ。そこがカギになってるのかもしれない」

「じゃあ、やってみよう！」

三人は零の『瞑想のやり方』の記憶を頼りに椅子に浅く座り、背筋をピンと伸ばしてゆっくり深呼吸を繰り返した……。

「なんかボーっとしてくるけど、世界のことは分からないね……」

レオが言う。

するとオデューヌが変な口調で話し始めた。

「なんじゃお前ら、捕まったのか、しょうがないのう……」

「レ、レヴィア!? レヴィアなの?」

レオが驚いて聞く。

「いかにも我じゃ。じゃが……、議会の総意が正義である以上、我も介入はできんぞ」

「そ、そんなあ……、多くの人が死んじやうよお!」

「それが人々の総意なら止められんのじゃ」

「レヴィアひどい!」

「ひどいって言われてものう……」

「瞑想するのは正解ですか?」

零が横から聞く。

「いかにも正解じゃ……。ついでに一つだけヒントをやろう。レオの短剣、それがカギになつとる。上手く使えよ」

「えっ？ 短剣!？」

レオは腰のベルトに付けておいた短剣を取り出して眺めた。しかし、それはただの剣だ。瞑想でどう使うのか分からない。

「ねえ、どうやって使うの？」

「瞑想を極めたら自然と分かるよ。これ以上は言えん。健闘を祈つとるよ」

そう言うとおデイナーはぐったりと倒れた。

「これがカギ……」

父の形見だとママに渡された短剣。まさかそれがこの世界のカギだったとは……。思いもかけなかったことにレオはしばし呆然^{ぼうぜん}として短剣を眺めていた。

零は、気を失ったオデイナーを丁寧に横たえると、言った。

「レオさん、カギを使いましょう!」

「う、うん……。瞑想してこれを使うとシアンみたいになれる……ってことだよな?」
「そうだと思います。ヴィクトーを止めましょう!」

レオは短剣を握り締め、再度深呼吸を繰り返した。

ス——、フウ——。

ス——、フウ——。

何度か繰り返すものの、雑念が邪魔をして一向に瞑想状態まで行けないレオ。

「ダメです、どうやるんですか？」

レオは泣きそうになって零に聞いた。

「焦らなくていいんです。雑念が湧いてもいいんです。雑念が湧いたら『これは横に置いておこう』って思ってまた深呼吸するといいいんです」

零は以前読んだ瞑想のやり方を思い出し、伝える。

「分かったよ！」

レオは再度深呼吸を始めた。

ス——、フウ——。

ヴィクトーの顔がチラついたが、それを横に流し、

ス——、フウ——、と深呼吸を続けた。

やがてフワツと体が浮き、スーッと落ち込んでいく感覚がした。

レオはそのまま深呼吸を続ける……。

どんどん、どんどん、落ちて行く……。

それは今までにレオが感じたことのない感覚だった。

レオは恍惚とした表情でさらに深い所を目指す……。

4—6. 魂の故郷

やがて、何かが見えてきた。

それは中央が塔のようになって、巨大な花だった。

五十メートルはあろうかと言うその花は、薄暗い巨大な洞窟の中に咲いており、中央の塔がめしべのような形で、明るい光の球を内包していた。花びらはキラキラと鮮やかな色で無数のきらめきを放ち、甘い香りを漂わせている。

「うわあ……」

レオはその幻想的な風景にしばし見とれていた。そして、しばらく見ているうちに自然とそれが何だか分かってしまった。それは魂の故郷だった。花びらの無数のきらめき一つ一つがそれぞれ誰かの魂の喜怒哀楽を表しているのだ。

生きとし生けるものの魂はここで管理され、喜怒哀楽の輝きを放ちながら他の魂と共鳴するのだ。

「綺麗……」

レオはそのきらめきを見ながら自然と涙をこぼしていた。

生命の営み……、この星に生きる全ての人たちの心の物語は、この花できらめきと

なつて紡がれている……。

命はかくも美しく、幻想的な輝きだったのだ。

そして、自分たちの勝手な都合で、この輝きを消しちやいけないと改めて誓った。

レオは思念体となつてふわふわと花の周りを飛んだ。蛍のような光の微粒子がわらわらとまとわりついてくる中を、ゆつくりと一周してみる。まるで光のじゆうたんのような花はどこから見ても気品高く、心に迫る美しさにレオはゾクツと痺しびれた。



花の脇に降り立つと、花は巨大なテントのようにその花びらを大きく広げている様子が見て取れた。とても立派な構造物である。

「で、どうするんだらう?」

レオは短剣をどう使つたらいいのか悩んだ。すると、思念体の手に短剣がぼうつと浮かび上がる。

柄のところの赤い宝石がキラキラと輝き、刀身は青く蛍光していた。

「うわあ、綺麗……」

レオは短剣を見つめる。記憶にない父から譲り受けた短剣、父はこれで何をやっていったのだろうか……?

短剣は斬るものであるから何かを斬るのだろうか……、一体何を?

レオは試しにビュンと短剣を振ってみた。

すると、ビシュツ！ という手ごたえがあり、レヴィアがやっていたように空間に切れ目が入った。

「わあ！ これだ！」

レオはそつと切れ目に手をかけて、切れ目を広げてみる……。

切れ目の向こうには年季の入った宿屋の建物が建っていた。

「えっ!? っ、これは僕んちじゃないか……」

レオは驚き、切れ目を押し広げて体を通し、宿屋に近づいてみる。

それは戦乱で焼けたはずの懐かしいレオの実家だった。

レオはひざからガツクリと崩れ落ちた。

「マ、ママ……、うっ……うっ……」

あの日、レオは全てを失った。

レオの脳裏に燃え上がった宿屋がフラッシュバックし、思わず頭を抱え、しゃがみこむ……。

「マ、ママあ……」

激しい頭痛がレオを襲いポタポタと涙が落ちる。

その時、宿屋のドアが開いた。

「えっ?」

見上げると、そこには男性が立っていた。ひげを蓄えたガツシリとした彼は優しい目でレオを見つめた。

レオはその人に見覚えがあった。それは夢に出てきた男性だったのだ。

「レオ、よく頑張ったな」

男性はしゃがんで両手を前に差し出した。

「パ、パパ……なの?」

レオは信じられないといった表情で聞いた。

「そうだ……。守ってあげられずに……、ゴメン」

男性はそう言つて申し訳なさそうにうつむいた。

レオは軽く首を振りながら男性を見つめた。

男性はちよつとはにかんで、また両手をレオに向けて開いた。

「おいで……」

「パパあ——!」

レオは駆けだすと思いつきりパパに飛び込んだ。

パパはしっかりと抱きしめ、愛おしそうに頬ずりをした。

「うわあああ、パパあ——!」

レオは泣いた。シングルマザーで苦勞しながらも、弱音一つ吐かなかったママの愛した人、そして、時折ママが自慢していたレオのルーツとなる男性。ずっと気になっていたパパについて出会えたのだ。レオは泣いた。オイオイとみつともない姿で大声で泣いた。

パパはそんなレオを何も言わずギュツと力強く抱きしめた。

レオに託されていた形見の短剣は、絶体絶命のレオに土壇場のところで奇跡を起こしたのだった……。

4—7. パパの置き土産

レオが落ち着くとパパは淡々と説明を始めた。パパはレヴィアの部下としてこの星の副管理人として働いていたが、宿屋の娘と恋に落ち、結婚してレオが生まれた。しかし、邪な^{よしま}想念に囚われた他の管理人との死闘の結果、相うちとなって命を失ってしまったのだった。

「えっ!? 死んじやった……の?」

レオが不思議そうに聞く。

「そう、だからこのパパは本物のパパじゃない。パパが残した残留思念なんだ。レオが来た時のために準備しておいた思念体だよ」

パパはそう言つて寂しそうに微笑んだ。

「残留思念……。でも、パパはパパだよね?」

不安そうに聞くレオ。

「そうだね、パパの一部だと考えてみて」

パパは優しく笑い、レオも微笑んだ。

「そうだ、今、僕ピンチなんだよ」

レオが眉をひそめて言う。

「分かってる。今からイマジナリーをレオに教えよう」

「イマジナリー？」

「レヴィア様みたいな不思議な力のことだよ」

「えっ!?! レヴィア様みたいになれる？」

「うん、パパの息子ならレヴィア様よりうまくなれると思うぞ」

「やったあ！」

レオは両手を上げて喜んだ。

「ここに来ているなら自分の心の扱い方はもうわかっているはず、次はデータのアクセス方法だ」

「データ？」

「この世界は情報でできている。物は全てデータなんだ。リングゴでも人体でもみんなデータとして管理されている。だから、データを呼び出せば……」

そうやってパパは手のひらの上にリングゴをポンツと出した。

「うわっ！ すごい！」

「レオもやってごらん」

「えーと、リングゴ、リングゴ……」

「あ、そうじゃなくて、まず、システムに意識を繋げるんだ」
「システム？」

「深呼吸すると、意識の底の方に硬い物があるはずなんだ。それに意識を集中して、そこにリングのイメージを送るんだ」

「やってみるね！」

ス——、フウ——。

レオは目をつぶり、深呼吸を何度も繰り返し、意識の更なる奥底へ降りていく……。すると、確かに何か硬い物がある。

レオはリングを思い浮かべ、そのイメージを硬い物に送った……。

手のひらの上にズシツとした重さが伝わる。

目を開けるとそれは真っ赤で美味しそうなリングだった。

「うわあ！ できた！」

「上手いぞ！ さすがパパの子だ！」

そう言ってパパはレオの頭を優しくなで、レオはうれしそうにパパを見た。



しばらくパパの特訓が続き、一通りイメージナリーの伝授が終わると、パパは優しい顔で言った。

「これで基本は全て終わりだ、レオは優秀だな」

「ありがとう！」

レオは満面の笑みで答えた。

「お前はパパの自慢の息子だ。ありがとう……」

パパはそう言ってレオをギュツと抱きしめた。

「ふふふ、パパ、大好き……」

レオはパパの胸の中で幸せそうにそう言った。

すると、パパの力が徐々に弱くなっていく。

「えっ!?!」

驚いてパパを見ると、パパの身体はどんどん薄くなって透け始めていた。

「ど、どうしたの!?! パパ!」

レオが叫ぶと、

「時間切れだ。ありがとう……。元気にやるんだぞ……」

パパはそう言って寂しそうにどんどん薄くなっていった。

「嫌だよお! パパ! いかないで! もっといろんな話聞かせてよお!」

泣き叫ぶレオ。

「さようなら……」

最後にかすかな声でそう言うと、パパは消えていった。

「うわあああ！　パパ——！！」

レオの絶叫が静かな異空間に響き渡った。

崩れ落ちるレオ……。

「みんなひどいよお！　なんでおいてくんだよお——！！　わあああん！」

彼の心を温かくする存在はことごとく去っていく。それも、うまくやり、成功しているのに去っていく。それはまだ幼いレオには耐え難い心の痛みだった。

「ぐわあああ——！！」

レオの慟哭どうしやくが異空間の中にもいつまでも響いた。

4—8. 暴力の発露

やがて、宿屋がすうつと消えていく……。

レオは地下室へと戻された。

いきなり泣きじやくるレオを見て、オデイーヌはそつとハグをする。

オデイーヌの温かい胸に抱いだかれながら、しばらくレオはすすり泣いていた。

「辛い目に遭ったのね……」

ゆつくりとうなづくレオ。

「かわいいそうに……」

オデイーヌは愛おしそうにゆつくりとレオの頭をなでる……。

柔らかく甘く香るオデイーヌの匂いがレオを優しく包み、レオはゆつくりと自分を取り戻していった……。

落ち着くと零が優しく聞いた。

「大丈夫？ 何かわかったかい？」

レオは静かにうなずいた。

そしてレオは何かを考えこみ……、ハツとして言った。

「大変だ！ ニーザリにヴィクトーの軍が侵攻してる！」

「えっ!?」

青ざめるオデイナー。

「僕、止めてくる！」

そう言うのと、レオは指先で空間を切り裂き、ニーザリへとつなげた。



ヴィクトーは千人の歩兵部隊を引き連れ、スラムの倉庫から一気に王宮へと侵攻していった。

しかし、道中の街は静まり返っていて、いつもの賑わいは無かった。

「ちくしょう！ 誰か漏らしやがったな！」

ヴィクトーは悪態をつく。

しかし、グレネードランチャーと自動小銃で武装した部隊を止められる様な軍事力をニーザリは持っていない。あえて言うなら特殊魔術師部隊が気になるが、それでも千人を相手にできる力などなかった。ヴィクトーは予定通り侵攻を続けることにした。

「ザッザッ！」 という規則正しい行進の足音が不気味に石造りの街に響く。

王宮へつながる中門まで来ると、城門が閉じていた。ここが閉じているのをヴィクトーは初めて見た。そして、城壁の上には弓兵や魔術師が待ち構えている。

「ゼンターイー！ 止まれ！」

ヴィクトーは弓矢の射程距離の手前で手を上げると、大声で叫んだ。

ザッザッ！

歩兵たちはその場で二回足踏みをするると一斉に行進を止める。その一糸乱れぬ動作は、高い練度と忠誠心を感じさせた。

城壁の上の弓兵達とヴィクター達はにらみ合う。

「グレネードランチャー用意！」

ヴィクトーが叫ぶと、でかい対戦車弾頭のついた長い兵器を携えた兵士が四人出てきてヴィクトーの前に並び、城門に弾頭を向けた。

ヴィクトーはニヤリと笑うと、

「ニーザリ軍に告ぐー！ これより城門を吹き飛ばす。被害を出したくなければ投降せよ！」

と、叫んだ。

しかし、弓兵たちは微動だにしない。それは死んでも降伏などしないという意味表示だった。

「撃ち方よーい！」

ヴィクトーが叫ぶと、兵士はひざをつき、安全装置を解除して照準を出し、城壁を狙っ

て引き金に指をかけた。

と、その時だった、横の方から兵士たちの前に子供が走り出て、両手を大きく広げて叫んだ。

「ヴィクトー止めろー！」

それはレオだった。

「へ、陛下……」

ヴィクトーは予想外の妨害に動揺した。

「ヴィクトー！ 殺してはダメだ！ 僕たちの理想は人を殺しては叶えられない！」

レオは必死に叫んだ。

「何を言ってるんですか、陛下。この旧態依然とした搾取構造を破壊しない限り理想など夢です！」

「僕はテロリストたちのテロに遭った事がある。ひとたび人を殺せば憎しみは次の殺戮を呼ぶ。軍隊をどんなに強化したってテロリストは封じ込められない。アレグリスの街にテロの嵐が襲うぞ！」

ヴィクトーは返す言葉がなく黙ってしまふ。

「もう一度ちゃんと話し合おうよ。話し合えばきつと理想は叶えられるから」

レオはヴィクトーに両手を差し出し、受け入れる姿勢を見せた。

ヴィクトーはうつむき、しばらく何かを考える……。

そして意を決すると、レオをにらみ、叫んだ。

「お前は陛下じゃない！ 偽物だ！ 目標、陛下の偽物！ 撃ち方よい！」

なんとヴィクトーはレオを拒絶し、攻撃にうつつたのだ。

しかし、レオは一步も引かない。

真一文字に口を結び、両手を差し出したままだ。

兵士たちはお互い顔を見合わせながら、本当に命令を聞いていいのかオロオロしている。

「腰抜けが！ 貸せ！」

ヴィクトーはグレネードランチャーを兵士から奪い取ると自分で構え、レオに照準を合わせた。

「ヴィクトー！ 止めろ！ なぜ分かってくれないんだよお！」

レオは泣き叫ぶ。

「自由の国、アレグリス、バンザイ！」

ヴィクトーはそう叫びながら引き金を引いた……。

4—9. 暴走する殺意

バシユン!

発射音がして弾頭は目にも止まらない速度でレオに襲いかかった。

直後、ズズーン! という大爆発が起こり、レオは爆炎の中に消えた……。

「イヤ——っ!」

脇の方の空間の裂け目から様子をうかがっていたオデイナーが、泣き叫ぶ。

モウモウと上がる爆煙……。

「レオ——っ!」

静まり返った中門前の広場には、オデイナーの悲痛な叫び声がこだましていた。

その直後、爆煙の中から何かが飛び出し、ヴィクトーたちを襲った。

ビツシヤア!

「ぐわああ!」「うひいい!」

盛大な水しぶきをあげながら兵士とヴィクターが吹き飛んだ。飛んできたのは巨大な水玉だったのだ。

一体何があったのか分からない兵士たちに、次々と巨大水玉が襲いかかる。

ビシャツッ！ ビシャツッ！ ビシャツッ！ ビシャツッ！

高速に連射される水玉は次々と兵士たちを吹き飛ばす。

ただの水ではあつたが、高速な水玉の威力はすさまじく、大崩れとなつた歩兵たちは次々と逃げだしていった。

爆煙が晴れていくと、レオが手のひらを兵士たちに向けたまま立っていた。

服はズタボロに焼け焦げ、髪の毛もチリチリだったが、身体は無事のようだった。

「ダメー！ レオー！ 逃げてー!!」

その時、オデイーヌが叫びながら駆けてくる。

「えっ!?!」

レオが振り返ると、背後の弓兵が弓を引き絞り、矢を放つた。

「ダメー——っ!」

オデイーヌが叫びながらレオに抱き着いた時、矢はオデイーヌを貫いた……。

ドスッ！ と鈍い音を立てながら矢はオデイーヌの背中から心臓を撃ち抜いたのだった。

「うわああ!!」

倒れる二人。そして、倒れたレオの上にオデイーヌは覆いかぶさり、

ゴフッ！

と血を吐いた。

「オ、オデイナーヌ!!」

叫ぶレオ。

レオはオデイナーヌの身体を持ち上げ、オデイナーヌを貫く血だらけの矢を見つけ、
「いやああ! オデイナーヌ!!」

と、絶叫した。

オデイナーヌは血だらけの震える手でレオの頬に触れると、涙でいっぱい瞳で

「あなたと……、もつと……、いた……かった……」

そう言つてガクツとこと切れた。

「オデイナーヌ! オデイナーヌ!」

錯乱するレオ。

「ぐわあああ!」

レオの絶叫が広場に響く。同時にレオの身体からはどす黒いオーラがブワツと湧き出した。オーラは城壁にすごい勢いで城門にぶち当たるとズン! という激しい衝撃音を放ちながら城門を破壊した。上にいた弓兵たちは崩落する城門から転げ落ち、逃げ出していく。

するといきなり人影がどこからともなく現れて言った。

「我に見せるんじやー！」

レヴィアだった。

レヴィアはオディーヌに手を当て、必死に治癒魔法をかけた。

レオは涙をポタポタ落としながら、その様子をジッと見つめる。

しかし、いつまで経つてもオディーヌの目は開かなかつた。

「ぐう！ ダメじゃー！ 治癒妨害の毒を使つとるー！」

レヴィアはギュツと目を閉じて無念そうに言つた。

オディーヌは血まみれの服に包まれ、真っ白い顔でピクリとも動かない。

「えっ!? そんなあ……、やだ……やだよお!!」

レオはレヴィアの腕をつかんでゆらす。

「これ以上は我にも無理じゃ……」

そう言つて、レヴィアは首を振つた。

「シアン……シアンならできるの?」

レオが必死に聞く。

「もちろん、シアン様なら生き返らせられる……が……どうやってお願いするんじや?」

「田町へ行けばいいんでしょ? 僕、頼んでくるから転送して!」

「お主……気軽に言うが、奇跡のお願いのために星を渡らせるなんて重罪じゃ。我は捕

「まっつて牢屋行きなんじゃぞ……」

レヴィアは泣きそうな顔で言う。

「大丈夫、シアンが何とかしてくれるよ!」

「無事シアン様に会えて、納得してくれたら……な」

「他に道は無いんでしょ!?!」

レヴィアは目をつぶり、大きく息をついて言った。

「そうじゃ、やるしかない……、やるしかないが……シアン様は^{オールマイティ}根源なる威力、百万もの星の頂点に立つ宇宙最強の軍事力じゃ。もう別れて久しい。我らと一緒にいた時のシアン様……、あれは気まぐれのお姿じゃ。あの姿を期待してたら瞬殺されるかもしれんぞ」

「殺されてもいい、僕はオディーヌを生き返らせるんだ!」

レオは涙をポロポロとこぼしながら叫んだ。

レヴィアはゆつくりとうなずくと、

「分かった……。田町まで送ってやろう。お主のその覚悟で道を切り開くんじゃ」

そう言つて、レヴィアはレオの身なりを整えると、

「神殿で待つとるぞ、行ってこい!」

そう言つて両手をレオに向け、東京に転送させた。

4—10. パージョンアップ女子

レオは気がつくくと田町の高級マンションのドアの前にいた。

ここから先、ミスは許されない。

目を閉じて大きく息をつき、気持ちを落ち着けて、レオは恐る恐る呼び鈴を押した。

ピーンポーン！

「はい、どなた？」

若い女性の声がある。

「シアンの友人のレオです。シアンにお話があつてきました」

「あらあら、可愛いお客さんね……。どうぞ」

ガチャツとロックが開いた。

レオが恐る恐るドアを開けると、清楚な女性がパタパタと廊下を早足でやってきた。

「まあまあ可愛いお友達ね。ただ……。あの子は今会えるような状態じゃないのよ」

そう言って女性は申し訳そんな顔をする。

「え？ どうなってるんですか？」

「うーん……、まああがつて」

そう言つて女性はレオを奥へと案内した。

レオが進むと、そこは広いリビングで、机が並んでいるオフィススペースになつていた。

メゾネットづくりの吹き抜けで、広大な窓ガラスが開放的な景観を作り、ゆつたりと流れるスローなジャズが気持ちの良い空間だった。

全宇宙の最高機関と聞かされていたレオは、もつと恐ろしい場所を思い描いていたが拍子抜けであつた。

女性はレオをソファアーに座らせ、麦茶を出し、

「わざわざ来てくれてありがとう。私はあの子の母親の神崎よ」

そう言つて、クリツとしたブラウンの瞳でニコツと笑つた。

しかし、まだ二十代であろう若くて張りのある美しい肌はとても子持ちには見えず、レオは少し困惑した。

「お、お母さま……ですか。シアンさんにはとてもお世話になりました」

レオは頭を下げた。

「こんなお友達ができたなんて、あの子は一言も言つてくれなかつたわ……」

そう言つて神崎はちよつと不満げな顔をした。そして続ける。

「それで、あの子なんだけど……。今、あの子はね、バージョンアップ中なのよ。だから会ってくれないと思うし、そもそもあなたの事を覚えているかも……。怪しい……。かも……」

神崎は申し訳なさそうに言う。

「バージョンアップ……。？」

レオは何を言われたのか全く分からなかった。

「あの子は半分AI……。機械なのよ。それで時々自分を作り変えて勝手に勝手にどんどん強くなってるの……。最近ではもう私も何がどうなってるのか全く分からないのよ」

神崎は肩をすくめる。

「き、機械……。ですか……。？」

レオは困惑した。確かに破天荒なシアンの行動は常識外れではあったが、温かく柔らかい女の子が機械だったと言われてしまうと、どうしたらいいか分からない。

しかし、シアンの正体が機械でも何でも今は会うしか道はなかった。

「で、シアンは今どこに？」

「それも分からないわ……。ごめんさいね」

神崎はひどく申し訳なさそうにうつむいた。

「な、何とかならないですか？ 大切な人の命がかかってるんです！」

レオは切々と経緯を訴えた。

神崎はレオの涙まじりの説明を、うんうんとうなずきながら聞き、

「……、それなら……、ついて来てくれる？」

そう言いながら立ち上がった。



メゾネットの階段を上がり、神崎は木製のドアのオシヤレなドアノブをガチャッと回し、微笑みながら言った。

「どうぞ入って」

レオはドアの中を見て困惑した。真つ暗な中に点々と何かが光っている……。

レオが困った顔で神崎を見ると、神崎は優しくうなずいた。

恐る恐る中へと進むレオ。

やがて、目が慣れてくると光の靄もやが流れているのに気がついた。

「え……？ あ、天の川だ！」

レオは思わず叫んだ。

そう、部屋の中は満天の星々が広がる大宇宙だった。

「うわあ……」

思わず顔をほころばせて奥へと進むレオ。

そして、横を見ると巨大なイルミネーションが見える。それはまるで満開の桜の木のようにモコモコとした大樹の形になって煌びやかな光を放つ光のオブジェだった。それは今まで見たどんなイルミネーションよりも美しく、大宇宙を背景に荘厳に静かにその煌めきを誇示していた。ただ、美しさの奥に秘められた何かに、レオは思わずブルッと身震いした。

4—11. 全宇宙の輝き

「世界樹よ、綺麗でしょ？」

神崎は言った。

「世界樹……？」

「あの煌めく花、一つ一つが現実にある一つの星なのよ」

「えっ!? これが全部星!？」

レオはただ美しいだけではない凄みの理由に気おされた。

「あなたの星は……、あそこね」

神崎はそう言つて指先を高く伸ばし、枝の先に着いた小さな光の花を指さした。その玉の光は他のにぎやかに光り輝く花に比べて見劣り、貧弱さを漂わせている。

「あれ……、なんでこんな……」

心配になるレオ。これはきつと瞑想の時に見た巨大な花と同じものだろう。単体で見た時は綺麗に輝いて見えたが、他の星の大きく激しい輝きをまとった花に比べると見劣りしてしまう。

「この光はその星に生きる人たちの喜怒哀楽の輝きなの。人の数が多ければ多いほど、

活性が高ければ高いほど強く輝いて見えるわ」

「僕たちの星はその辺が貧弱なんだね……。シアンが……。うちの星を消そうとしたのもそれが理由？」

レオは泣きそうな声で聞いた。

「そうね。宇宙のリソースは有限なの。活きが良く元気な星をどんどん伸ばすためには、生きが悪い星は間引かないとならないの」

「間引くって……。みんな殺しちゃうって……。こと？」

「殺しはしないわ、新しい星に転生するだけ。もちろん、なるべく避けるようにしてるわよ。あなたの星も消されなかつたでしょ？」

レオは目をつぶり、押し黙る。何が正しいのか、この壮大なスケールの宇宙の営みをどう考えたらいいのか分からなかつたのだ。

「宇宙はこうやって五十六億七千万年かけて発達し、こんな見事な花が咲き誇る世界に育つたのよ」

レオは偉大な世界樹を見上げ、ふうと大きく息をつく。そして、その壮麗な光のファンタジーに魅せられ……。また目をつぶった。



「それで……。シアンはどこにいるんですか？」

レオは神崎を見て言った。

「この無数の輝きの中の一つが……あの子の物よ。あなたにそれが見つけられるかしら？」

数千兆個にも及ぶ無数のきらめきの中から『シアンを探せ』と言う神崎。その目にはやや挑戦的な色があつた。

「えっ!？」

予想外の展開に言葉を失うレオ。

どう考えても無理だ。そんなの砂浜の中から一つの砂粒を見つけて出すようなものだ。できる訳がない。

しかし、諦めたらオディーヌもレヴィアも破滅だ。絶対シアンには会わねばならぬ。い。

「シアン！ 僕だよ、レオだよ！」

レオは必死に叫んだ。

しかし、世界樹には何の変化もない。

レオは焦り、必死に考える……。シアンは目の前にいる。でも、どれがシアンか分からない……。居るのに会えない、そのもどかしさがレオを苦しめる。

その時、別れ際のシアンの言葉を思い出した。

そして、大きく息を吸って気持ちを落ち着けると、

「シアノイド・レクスブルー！ 僕が来たよ！」

と、大声で叫んだ。

神崎は驚いてレオを見つめる……。

直後、世界樹が揺れた。

そして幹の一番根元がまぶしく光り輝く。

「シアーン！」

レオは光に走り寄り……、直後すうつと消えていった……。



レオが気がつくとき、暗いゴツゴツとした岩だらけの荒野にいた。周りを見回すと満天の星々が広がり、天の川もくつきりと流れている。しかし、ただ一つ、違うものが夜空に浮いていた。

赤くボウつと光る奇妙な巨大構造体が夜空高く浮いていた。レオはしばらくなんだか分からなかったが、ジーツと見つづけて、それは太陽を覆う三本の巨大な幅広のリングである事に気づいた。大きさが少しずつ違うリングは六十度ごと角度をつけて交差されており、まるでカゴの目のように、巨大な正三角形が夜空に浮かんで見える。

レオが吸い込まれたのは世界樹の根のところだった。つまり、この世界は多くの世界

の根底に当たるに違いないが、あの太陽サイズの超巨大リングが何のためにあるのか、レオには想像もつかなかった。

周りを見回すと、レオのいる星は極めて小さく、言わば小惑星で、空気もない事にながった。レオは一瞬焦ったが、自分の周りにシールドが張られているのを見つけ、ホツとする。

極めて弱い重力の中、ゆっくりビヨーンと飛び上がってみる。どこまでも高く浮かび上がり……、そしてゆっくりとまた戻ってきた。

「おーいー・シアーナー」

レオは叫びながら斜めに飛びあがる。

ジャガイモのような形をした小惑星は、ゴツゴツとした岩肌が続くばかりで、レオは不安になってくる。

と、その時、ジャガイモの目の様なくぼみに青い光を見つけた。レオは慣れない低重力の中、何とか身体をコントロールしながらくぼみへと降りていく。

くぼみの奥底には大きな水晶の結晶が生えていて、それが青く光を放っていた。その清涼さを感じさせる青い結晶は、荒涼とした小惑星で唯一シアンを感じさせてくれるものだった。

4—12. 美しき構造体

レオは迷わず結晶に触った。すると、レオは結晶に吸い込まれ、気がつくまで白と青の世界にいた。そう、それは初めてシアンと会った時に連れていかれたシアンの内部だった。

見渡す限りの白い世界、そして、眼下に広がるどこまでも澄んだ水……、真つ青の水平線。ついにレオはシアンのところまで来られたのだった。

しかし……、見渡す限りの水平線だけでシアンはいない。バージョンアップ中だから不在なのだろうか……。レオは心細くなり、叫ぶ。

「シアン！ おーい！ シアン！」

しかし何の返事もない。仕方なく、レオは広大な世界を飛び回ってみる。どこまでも続く白と青だけの世界、それは純粹で清浄で、しかし、レオには不安を呼び起こす。

レオは高度を高くとつてみた。どんどんと高度を上げ白の世界をどんどんと上の方へ上の方へと行ってみる。しかし、見える風景は全く同じ、どこまでも続く水平線はただまっすぐに目の前に広がるだけだった。

「シアノイド・レクスブルー！ 僕だよ——！」

と叫ぶが、何も起こらなかった。

レオは困惑し、ゆっくりと辺りを観察する……。

すると、水の中で何かキラツと何か光つたのを見つけた。

「えっ!?!」

レオは急いで飛んでいく。

近くまで行くと、水中にガラスでできたような巨大な構造体が沈んでいるのが見える。

レオはその構造体へ向けて両手を向け、そつとパパから教わった力を込めて引っ張り上げた。

やがて水の上に引き上げられたそれは、正八面体の形をした一軒家くらいのサイズの、巨大なガラスの構造物だった。

「なんだこれ!?!」

レオは不思議に思つて構造物に近づき、観察する。構造物の内部には透明で緻密な繊維が縦横無尽に走り、キラキラと微細な光を放ち続けていた。

「うわあ……綺麗だなあ……」

その不思議で見事な造形に見とれると、

「なんだお前?」

と、上から声がした。懐かしい声だ。

レオがあわてて見上げると、そこにはシアンがいた。

しかし、青かった髪は黒々としていて、心なしか釣り目になって険しい表情でレオを見つめている。

「シ、シアン！ 僕だよ、レオだよ！」

レオは急いで言った。

シアンはしばらく首をかしげ……、

「ああ、お前か。悪いがお前と仲良くしてたシアンはもういないよ」

と、冷たく言い放った。

「えっ!? そ、そんな……。オデイナーヌ、オデイナーヌが大変なんだ！ 力を貸して！」

レオは必死に訴える。

「うーん……。それって僕に何のメリットがあるの？」

シアンは面倒くさそうに言う。

「人生は損得勘定じゃないよ、『損をするのもいい』ってシアンも言ってくれてたじゃないか！」

「うるさいガキだねえ……。僕は損することなんてやらないの！」

シアンは冷たい表情で肩をすくめた。

「僕は……、そんな悪い子のシアン、認めない。こんなバージョンアップは失敗だよ！」
レオがシアンをにらんで言う。

「ほう、認めないってどうすんの？ 根源オールマイティなる威力たる僕と戦うの？ 小僧が？
きやはははー！」

シアンはレオを嘲笑あざわらう。しかし、レオには余裕があつた。

「僕、このガラスの構造物が何か分かつちやつたんだ。これ、シアンの本体……だよね？」

レオは構造物に手を当てて、ニヤツと笑いながら言う。

シアンは急にレオをにらみ、構造物の中でキラキラと無数のきらめきがブワツと広がった。

「何？ 壊すつもり？」

シアンの声から余裕がなくなる。

「一旦、元のシアンに戻って！ お願いだよ！」

レオは必死に頼む。

「チツ！ オディーヌは蘇生させてやる。だからその手を離しなさい」

シアンは舌打ちをして叩きつけるように言った。

「ダメ！ そんなじゃないんだ。前の明るく楽しいシアンに戻って！ そっちの方が

シアンにとつても絶対いいんだから……。」

シアンはキツとレオをにらみ、大きく息をつく……。

そして、目をつぶり、大きく肩で息をすると、考え込む……。

ガラスの構造体から垂れる水滴がピチョン、ピチョンと静寂の中響いていた。

シアンはゆっくりと目を開け、愛おしそうにレオを見て微笑む。

「分かった。そうだね、レオの言うとおりだよ。おいで……。」

そう言つて、両手をレオの方に優しく広げた。

それはあの優しかったシアンそのものの言葉だった。

「良かった！　ありがとう、シアン！」

レオは。パアツと明るい表情になり、シアンの方に急いでスーツと飛ぶ。

と、その時だった、急にシアンは悪い顔になり、

「なんて言う訳ねーだろ、バーカ！　きやはははは！」

と、悪態をつき、手のひらをフニフニと動かすと、ガラスの構造体をどこかに退避させてしまった。

4—13. 限りなくにぎやかな未来

「えっ!? だましたの!？」

焦るレオ。

「お子ちゃまの理想を押し付けんなって」

「僕が子供だとか関係ない、これは人として……」

「あー、うるさい! 死ね!!」

シアンはそう叫んでレオに一瞬で迫ると、光をまとわせた手刀でレオの首めがけて振り下ろす。

「ひいっ!」

レオは目をつぶり、死を覚悟した……。

ガキッ!

衝撃音が響き……、

ガッ、ガガガガッ!

と、交戦音になった

「えっ?」

レオが目をそつと開けると、誰かがシアンと戦っていた。

よく見るとそれは青い髪のシアンだった。

「シアン！」

レオは思わず叫んだ。

青髪のシアンは、目にも止まらぬ速度で黒髪のシアンにこぶしを打ち込んでいく。

防戦一方の黒髪のシアンが喚く、

「くっ！　なぜお前がまだ残ってんだ！」

「きゃははは！　お前はテスト失格！」

そう叫ぶと青髪シアンは腕をまばゆいくらいに光らせ、目にも止まらぬ速さで黒髪シ

アンの胸を腕ごとぶち抜いた。

「グフッ！」

黒髪シアンは血を吐きながら吹き飛ばされる。

鮮烈な赤色の血液がボタボタと水面に落ち、青の世界を濁した。

それでも、黒髪シアンは全身光をまとい、治療魔法で再生させながら体勢を取り直し、

鋭い視線でにらみつけ、吠えた。

「旧バージョンのくせに生意気だ！」

青髪のシアンはニヤツと笑うと、

「どんなに性能をあげても、損得勘定で動く奴は底が浅いんだよね〜」

そう言って黒髪シアンの背後にワープし、両手を組んで振り下ろし、黒髪シアンを水の中へと叩き落とした。

ザッバーン！ と派手な水柱が上がる。

「レオを守ると決めた僕には勝てないよ」

青髪シアンはそう言いながら、手のひらをフニフニと動かした。

どこからともなくガラスの構造体が徐々に浮かび上がってくる……。

「失敗作はさようなら〜！」

青髪シアンはそう言いながら拳に力を込め、光をまとわせた。

「止めろ——！！」

水から飛び出してきた黒髪シアンは酷い形相で止めようとしたが、ガラスの構造体は拳を受け、光をキラキラとまき散らしながら粉々に砕け散り、バラバラと水の中へと落ちて行く……。

「ぐわあああ！」

黒髪シアンは断末魔の叫びを上げながら、湧き上がるブロックノイズの中に消えていった。

「シアーン！」

レオは涙をポロポロとこぼしながら、シアンに向けてまっすぐに飛ぶ。

シアンはニコツと微笑むと両手をレオに広げた。

レオはすごい勢いでシアンに抱き着き、オイオイと泣く。

「ごめん、ごめん、怖い思いさせちゃったね……」

シアンはレオをぎゅつとハグして、可愛い頬に頬ずりをした。

「もう、死んだかと……、思ったよおおお！」

レオはシアンを抱きしめて叫んだ。

「悪かったね……。レオの言うとおりだよ、バージョンアップは失敗だった」

そう言つてレオの頭をそつとなでた。

レオはひとしきり泣くと、

「そうだ！ オディーヌ、オディーヌが！」

と、シアンの目を見て叫んだ。

すると、シアンはニコツと笑つて、

「はい、オディーヌはこちら」

そう言つて手を伸ばし、手のひらを広げた。すると、まるでマジックショーのように

オディーヌがボン！ と音をたてて現れた。

「えっ？」「えっ？」

驚いて見つめ合うレオとオデイナー。

「オデイナー——！」

レオはオデイナーに飛びついた。

「オデイナー！ オデイナー!!」

レオは何度も叫びながらオデイナーをきつく抱きしめる。

「レオお……」

二人ともむせび泣きながらお互いの無事を喜び、温かい体温に癒されていた。

シアンはそんな二人を温かなまなざしで見つめる。

青と白の世界にゆったりとした優しい時間が流れた。



三人はレヴィアの神殿に飛ぶ。

「やあ、レヴィア、久しぶり！」

シアンはニコニコしながらレヴィアに声をかける。

ソファに寝っ転がって、ポテトチップスをポリポリと食べていたレヴィアは、驚いて

立ち上がった。

「こつ、これはシアン様！ お見苦しい所をお見せしまして……」

「オデイナー殺しちゃダメじゃん！ 頼むよ〜」

シアンはニコニコしながら突っ込む。

「いや、面目ない……」

「でさー、レオを副管理人にしようと思うけどどうかな？」

「へっ!? そ、それは私の部下……ということ……ですか？」

「そうそう、レオのパパの後を継いでね」

シアンは含みのある笑顔でレヴィアを見る。

レヴィアは目をつぶって、大きく息をついた。

そして、じつとレオを見つめ……、聞いた。

「レオ……、この星の管理をやる気はあるか？」

「この星を盛り上げる仕事だね、うん、やってみたい！」

レオは瞳をキラキラさせながら言う。

「分かった……」

レヴィアはうんうんとうなずくと、

「パパを守ってやれんで済まなかった……」

そう言ってレオに頭を下げた。

「パパは……、誇りをもって死んでいった。誰も……、恨んでないよ」

レオは目をつぶり、ゆっくりと答える。

「そうか……、ありがとな。もっと早く謝っておくべきじゃったな……」
「そんな、大丈夫ですよ」

レオは瞳を潤ませながらニコツと笑った。

「では、これからお主はわしの部下じゃ。国王職は卒業じゃな……」

「よろしくお願いします!」

レオは元気よく言った。

「レオ、良かったね……」

オデイーヌはちよつとうらやましそうに声をかけた。

「何を言つとる。お主も研修生になるんじや」

「え? 研修生?」

「王宮に戻るのと、ここでレオと一緒に世界を管理するのとどっちがいいんじや?」

レヴィアはニヤツと笑って言った。

オデイーヌはチラツとレオを見て、頬を赤らめて、

「……が……いいです……」

と、言った。

「やった! これからも一緒だね!」

そう言つてレオはうれしそうにオデイーヌの手を取り、笑った。

オデューヌはちよつと照れながらうなづく。

「そうと決まれば樽酒だ——！」

シアンは上機嫌に両手を上げた。

「うん！ 行こう！ 行こう！」

レオもまぶしい笑顔で両手をあげ、ピョンピョン跳ぶ。

「今日はいっぱい飲んじやうぞ——！」

「今日もでしょ？」

「ソウデース！ 今日もデース！」

シアンはおどけてそう言つて、二人は笑い合つた。

レヴィアとオデューヌはそんな二人を眺めながら優しく微笑む。

こうしてレヴィアの星はこの日、新たなフェーズに入った。

後に若い二人の活躍は全宇宙に響き渡る事になるのだが……、それはまたの機会に。

了

エピソード

シアン「よし、レヴィちゃん、きょうは酒のみ勝負だ！」
上機嫌に言う。

レヴィア「いやいや、シアン様には勝てませんよ」

シアン「なーんだ、勝ったらクモスケあげようと思ってたのに」

レヴィア「要りませんよ！ あんなの！」

シアン「あれ？ 神殿潰したのまだ怒ってる？」

レヴィア「怒ってません！」

レオ「シアン、ダメだよ！ 心の傷はイジつちやダメなんだよ！」

レオがたしなめる。

シアン「はい、レオは偉いなあ」

そう言つてシアンはニコニコする。

レヴィア「お主、シアン様をたしなめるとはすごいもう」

シアン「たしなめるどころか、さっき、僕を殺すつて脅したんだよ」

レヴィア「へっ!? シアン様を!」

レオ「やだなあ、あれは必死だったから……」

シアン「いやいや、僕にあんなこと言ったのは、今までうちのパパくらいだよ」
レヴィア「レオは大物になりそうじゃなあ」

レオ「あはは……、ガンバリマス」

シアン「で、そろそろ作者が出てくるんじゃないの？ おーい！」

作者「あー……いいですか？」

シアン「はい、暖めといたよ！」

作者「ありがとうございます。皆さんお疲れ様でした」

一同「乙です」

作者「レオ君、どうでした？」

レオ「いやー、大変でした。特に後半別れが続いて心折れかけました」

作者「別れは辛いですよねえ」

レオ「でも最後はみんなに会えてよかったです」

作者「大丈夫です。私ハッピーエンドしか書かないので」

オデューヌ「えっ？ そんな事言っちゃっていいんですか？」

作者「ポリシーですから」

オデューヌ「だったら出してもらったら必ず幸せになるってことですね！」

作者「まあ、ヒロインは必ず殺されますけどね」

オデイナー「……」

レヴィア「そう言えば私も以前、殺されとったなあ……」

作者「あの時は乗っ取られたシアンに瞬殺されましたね」

レヴィア「……」

ジト目でシアンをにらむレヴィア。

シアン「あ、あれは僕のせいじゃないよ！」

作者「まあ、シアンさんはシリーズ通じてお騒がせキャラですよね」

シアン「きやははは！」

レオ「ねえねえ『後に若い二人の活躍は全宇宙に響き渡る』ってあるけど、どうなるの?」

作者「ふふふ、レオさんとオデイナーさんはこの後、ああなつてこうなつて……むふふ」

オデイナー「えっ!? どうなるんですか?」

作者「二人の希望通りになりますよ」

二人は真つ赤になつてうつむいた。

作者「それは機会があつたら書きたいですね。さて、エピソードは以上ということ、

みなさん、一言ずつお願いします。

レオ「みなさん、応援してくれてありがとうございます！ごぎいました」

オディーヌ「また機会があったらお会いしましょう！」

レヴィア「応援してくれると、また次の作品に出してくれるらしいので、応援よろしくなのじゃ！」

シアン「きやははは！」

作者「それではまたお会いしましょう！ 次回作はこちら←」

大賢者が転生したものの無能を装ったがために追放され、魔物を食べながら最強に倒した暗黒龍は少女となりスマホを持っていた!!

捨てられた前世【大賢者】の少年、魔物を食べて世界最強へ <https://syosetu.org/novel/265876/>

レヴィアも出てくるよ (▽、*)